

みさやまみちきだよるやしきにじ  
御射山道北・古屋敷西・  
堤之尾根遺跡

御射山地区県営畠地帯総合土地改  
良事業に伴う緊急発掘調査報告書

1991.3

長野県原村教育委員会

みさやまみちきたふるやしきにし  
御射山道北・古屋敷西・  
つつみのおね  
堤之尾根遺跡

御射山地区県営畑地帯総合土地改  
良事業に伴う緊急発掘調査報告書

表紙地図10,000分の1 ○印が御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡



原村全景



堤之尾根遺跡 1号住居址

## 序

農業の合理化と生産性の向上を目指し、昭和59年度に始められた御射山地区総合土地改良事業も平成2年度で最終年度を迎えた。村教育委員会では土地改良事業により削減してしまう遺跡の記録保存を計るため、これまでに13遺跡の発掘調査を行なってきました。

これらの発掘調査により、縄文時代から中世にわたり、この地域を生活の舞台とした人々の足跡が少しづつ解明されてきました。

また本年度に発掘調査を行なった御射山道北遺跡、古屋敷西遺跡、堤之尾根遺跡の3遺跡のうち、堤之尾根遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判り、両時代の住居址や遺物などが発見され、考古学上貴重な多くの資料を得ることができました。

発掘調査によって得られたこれらの成果は、この地域の歴史にまた新たな1行を書き加えることになると思われます。

このたびの調査にあたり、諒訪地方事務所土地改良課の方々の御配慮をはじめ、長野県教育委員会の御指導、そして地元の土地改良事業実行委員会の皆様、地権者の方々、調査に携わっていた皆様など多くの方々の御好意、御尽力に深く謝意を表する次第であります。

また本報告書刊行の過程におきましてお世話になった関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月20日

原村教育委員会  
教育長 平林 太尾

## 例　　言

- 1 本報告は「県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村中新田に所在する御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成2年5月7日から7月31日にかけて実施した。整理作業は、平成2年8月1日から平成3年3月20日まで行なった。
- 3 遺構と遺物の実測・トレース・拓本は平林とし美、押型文土器の拓本は会田　進、写真撮影は平出一治が行なった。
- 4 執筆は、会田　進・平出一治・伊藤証・平林とし美が行ない分担については文末に明記した。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。  
なお、本調査関係の資料には、御射山道北遺跡は92・古屋敷西遺跡は91・堤之尾根遺跡は81の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、芦部公一・児玉卓文・小林公明・小林秀夫・小林深志・関孝一・高見俊樹・樋口誠司・百瀬長秀・守矢昌文の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

# 目 次

序

例 言

目 次

図版目次

I 発掘調査の経過.....	1
1 発掘調査に至る経過.....	1
2 調査組織.....	1
3 発掘調査の経過.....	3
II 調査方法.....	7
1 調査地区の設定.....	7
2 調査の方法.....	7
3 調査の概要.....	7
III 御射山道北遺跡.....	12
1 位置と環境.....	12
2 土 層.....	13
3 遺 物.....	13
(1) 繩文時代の遺物.....	13
(2) 平安時代の遺物.....	14
4 ま と め.....	15
IV 古屋敷西遺跡.....	16
1 位置と環境.....	16
2 土 層.....	16
3 遺 物.....	17
(1) 繩文時代の遺物.....	17
(2) 平安時代の遺物.....	18
4 ま と め.....	19
V 堤之尾根遺跡.....	20
1 位置と環境.....	20
2 土 層.....	20
3 繩文時代の遺構と遺物.....	24

(1) 住居址	24
(2) 碑群	25
(3) 小豎穴	27
(4) 遺構外出土の遺物	47
4 平安時代の遺構と遺物	67
(1) 住居址	67
(2) 遺構外出土の遺物	76
5 まとめ	76
VI 結語	80
引用参考文献	83

## 図版目次

カラーグラビア

原村全景

堤之尾根遺跡 1号住居址

### 挿図

#### 第1図 原村域の地形断面模式図

(赤岳—御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡—宮川ライン) .....	1
第2図 御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡の位置と付近の遺跡.....	2
第3図 御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡発掘調査区域図・地形図.....	9
第4図 御射山道北遺跡グリッド配置図.....	12
第5図 御射山道北遺跡土器拓影と石器実測図.....	14
第6図 古屋敷西遺跡グリッド配置図.....	17
第7図 古屋敷西遺跡土器拓影.....	18
第8図 堤之尾根遺跡グリッド配置図.....	21
第9図 堤之尾根遺跡構配図.....	22
第10図 堤之尾根遺跡第2号住居址実測図.....	24
第11図 堤之尾根遺跡構実測図.....	26
第12図 堤之尾根遺跡構・小豎穴実測図.....	28
第13図 堤之尾根遺跡小豎穴1、5~8、11~19、29、30、36、47、48実測図.....	30
第14図 堤之尾根遺跡小豎穴2~4、9、10、20~28実測図.....	36
第15図 堤之尾根遺跡小豎穴31~35、37~41実測図.....	40
第16図 堤之尾根遺跡小豎穴42~45実測図.....	43
第17図 堤之尾根遺跡小豎穴出土土器拓影と石器実測図.....	44
第18図 堤之尾根遺跡グリッド別遺物出土状況図.....	46
第19図 堤之尾根遺跡構外出土縄文早期土器拓影 (1).....	49
第20図 堤之尾根遺跡構外出土縄文早期土器拓影 (2).....	50
第21図 堤之尾根遺跡構外出土縄文早期土器拓影 (3).....	53
第22図 堤之尾根遺跡構外出土縄文早期土器拓影 (4).....	54
第23図 堤之尾根遺跡構外出土縄文早期土器拓影 (5).....	55

第24図	堤之尾根遺跡遺構外出土縄文前期・中期土器拓影	56
第25図	堤之尾根遺跡遺構外出土縄文後期土器拓影	58
第26図	堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (1)	60
第27図	堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (2)	61
第28図	堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (3)	62
第29図	堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (4)	63
第30図	堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (5)	64
第31図	堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (6)	65
第32図	堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (7)	66
第33図	堤之尾根遺跡第1号住居址実測図 (1)	68
第34図	堤之尾根遺跡第1号住居址実測図 (2)	69
第35図	堤之尾根遺跡第1号住居址出土土器実測図	71
第36図	堤之尾根遺跡第3号住居址実測図	73
第37図	堤之尾根遺跡第3号住居址出土土器実測図	74
第38図	堤之尾根遺跡第4号住居址、小豎穴46実測図	77
第39図	諏訪・山梨県北巨摩出土の耳皿	78
第40図	縄文時代後期の遺跡分布	80

## 表目次

第1表	御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡と付近の遺跡一覧	3
第2表	堤之尾根遺跡遺構一覧	3
第3表	山形文土器観察表	48
第4表	楕円文土器観察表	51
第5表	耳皿出土遺跡地名表（諏訪・山梨県北巨摩）	78
第6表	県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区に伴う埋蔵文化財調査一覧	82
第7表	堤之尾根遺跡の小豎穴一覧	85

# I 発掘調査の経過

## 1 発掘調査に至る経過

昭和59年度から実施されている「県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区」も7年目をむかえ、平成2年度は事業最終年度にあたり、すでに昭和59年度は花表原・中御射山西・中御射東の3遺跡、60年度には御射山遺跡、61年度には笄手久保遺跡、62年度には判の木東遺跡、平成元年度には梨の木沢・中道通・御射山沢・梨の木沢西の4遺跡の緊急発掘調査を実施してきた。平成2年度の工事予定地域内に御射山道北（原村遺跡番号92）、古屋敷西（原村遺跡番号91）、堤之尾根（原村遺跡番号81）の3遺跡が所在していることから、その保護については、平成元年9月11日に行なわれた長野県教育委員会の「平成2年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課・諏訪地方事務所土地改良課・原村役場農林課・原村教育委員会の4者であった。

その後、地元に対する説明と協議を行い、原村教育委員会は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、また、農家負担分については国庫及び県費から発掘調査補助金交付をうけて、平成2年5月7日から7月31日にわたり緊急発掘調査を実施した。

## 2 調査組織

### 御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡発掘調査団名簿

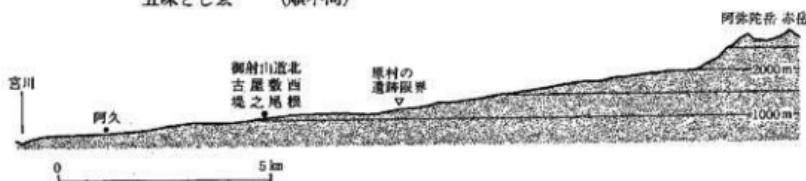
団長 平林太尾（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出一治

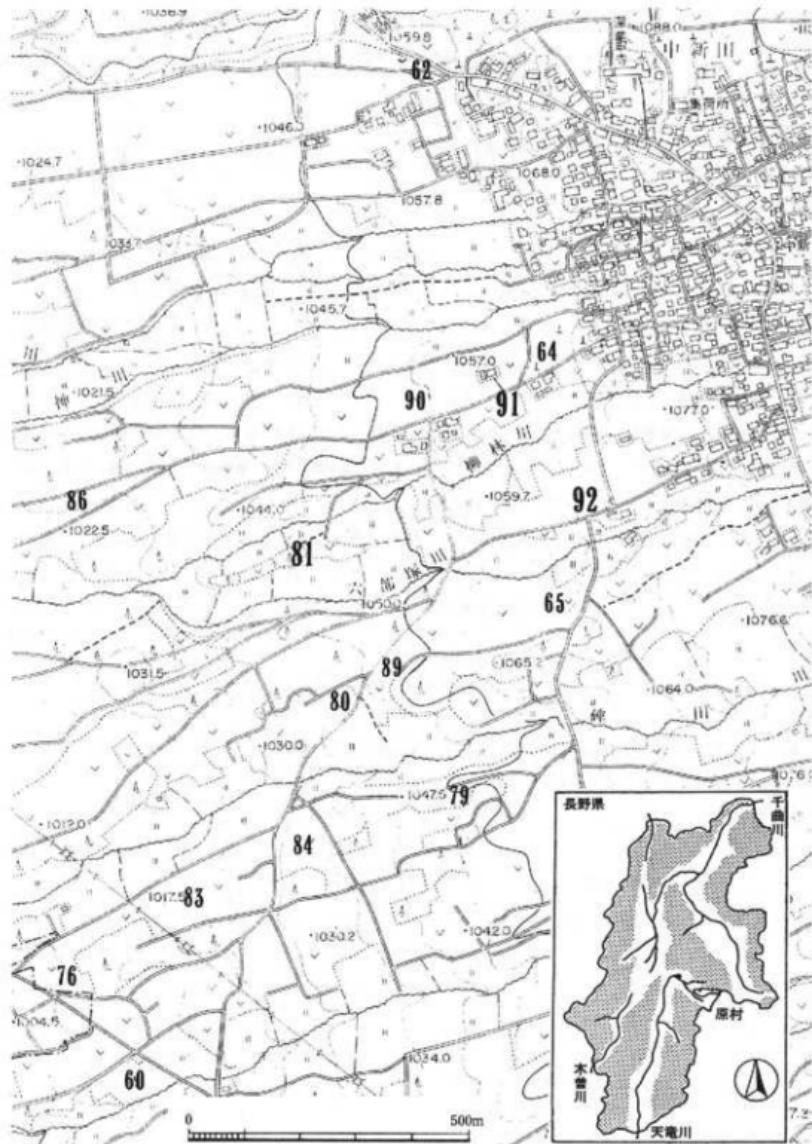
調査員 武藤雄六 会田進 大竹幸恵 氏家敏之 伊藤証

調査補助員 平林とし美 関喜子 原敏江 小松とよみ 矢崎つな子

調査参加者 菊池利光 鵜飼辰夫 松沢弘一 宮坂一次 小林静子 藤原智恵子 宮坂とし子  
五味としあ（順不同）



第1図 原村域の地形断面模式図（赤岳—御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡—宮川ライン）



第2図 御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡の位置と付近の遺跡 (1:10,000)

第1表 御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
60	浅間沢		○		○									
62	庚申				○									
64	古屋敷				○									
65	梨の木沢		○	○						○	○	平成元年度発掘		
76	御射山		○	○	○					○	○	○	昭和59・60年度発掘	
79	中御射山東				○								昭和59年度発掘	
80	御射山沢				○								昭和59年度発掘	
81	堤之尾根		○	○	○	○				○			平成2年度発掘	
83	花表原				○								昭和59年度発掘	
84	中御射山西				○					○	○		昭和59年度発掘	
86	判の木尾根			○									昭和62年度発掘(判の木東)	
89	梨の木沢西									○			平成元年度発掘	
90	中道通			○									平成元年度発掘	
91	古屋敷西				○					○			平成2年度発掘	
92	御射山道北				○					○			平成2年度発掘	

事務局 原村教育委員会事務局 小池平八郎（教育次長） 大口美代子（主任） 宮坂道彦 田中宏江（～6月） 伊藤佳江（7月～） 伊藤 証 平出一治

### 3 発掘調査の経過

#### 御射山道北遺跡

平成2年5月7日 発掘準備をはじめる。

5月16日 御射山道北遺跡の表度剥ぎを重機で行い、グリッド設定をはじめる。

5月17日 教育長挨拶の後、機材の搬入とテント設営を行う。B区からグリッド発掘をはじめる。BE-58グリッドで縄文後期の土器破片が出土する。灰陶陶器の小破片を表面採集する。

耕作土の直下は、地山の含礫ローム層となり保存状態は極めて悪い。

5月18日 A区とB区のグリッド発掘を行う。やはり耕作土の直下は含礫ローム層となってしまう。数多い礫を包含するグリッドもみられた。それらの礫には規格性は一切認められないことから、集石遺構ではなく、自然流出によるものと思われた。

昨日BE-58グリッドで土器破片が出土したため、北隣のBE-59グリッドの発掘を行うが、遺構を検出するまでは至らなかった。AT-50グリッドで打製石斧が出土する。

- 5月21日 引続きA区のグリッド発掘を行うが、AJ-50グリッドで縄文土器破片が出土しただけである。グリッド杭の片付けを行ない今日で調査を終了する。

#### 古屋敷西遺跡

- 5月21日 古屋敷西遺跡のグリッド設定を行い、機材の搬入とテント設営後、B区からグリッド発掘をはじめる。BE-54グリッドで内黒土師器の小破片が出土する。耕作土の直下は、地山の含礫ローム層となり保存状態は極めて悪い。
- 5月22日 A区とB区のグリッド発掘を行う。AX-50グリッドで縄文後期の土器破片が出土する。  
御射山道北遺跡同様に、耕作土の直下は含礫ローム層となってしまう。それらの礫には規格性は一切認められないことから、集石遺構ではなく、自然流出によるものと思われた。
- 5月23日 引続きA区のグリッド発掘を行うが、遺物の発見はない。グリッド杭の片付けを行ない今日で調査を終了する。

#### 堤之尾根遺跡

- 5月22日 堤之尾根遺跡のグリッド設定をはじめる。
- 5月23日 上物の片付けとグリッド設定を行い、C区からグリッド発掘をはじめるが、遺物の発見は1グリッド1~2点と少ない。ローム層までは浅く、ローム層を耕作土にしている状態で保存は良くない。
- 5月24日 グリッド設定とC区のグリッド発掘を行うが、やはり遺物の発見は少ない。
- 5月25日 引続きグリッド設定とC区とD区のグリッド発掘を行う。
- 5月28日 C区とD区のグリッド発掘を行うが、縄文時代早期のためか、遺物の発見は少ない。
- 5月29日 引続きグリッド発掘を行う。遺物の散布範囲がほぼわかってくる。東側はCTラインまでのようである。したがってCTライン西側の平面発掘をはじめる。
- 5月30日 C区の平面発掘を行う。
- 5月31日 B区のグリッド発掘を行う。土師器の発見数がやや多くなる。
- 6月1日 B区のグリッド発掘を行う。BM-48とBO-48グリッドで住居址と思われる落込みを確認する。BO-48グリッドで竈の一部と思われる石が東壁際で発見される。

- 6月6日 落込みを認めたBM-48とBO-48グリッド付近の平面発掘を行い、隅丸方形の落込みをほぼ確認する。
- 6月7日 引続き検出作業を行い、平安時代の住居址と確信し、便宜上第1号住居址と呼ぶことにする。
- 6月11日 C区の平面発掘を行う。
- 6月12日 C区の平面発掘を行う。出土遺物は1グリッド1～3点と少ない。
- 6月13日 C区の平面発掘を行う。礫が検出されるが、自然か人為的なものかわからぬ。
- 6月14日 C区の平面発掘を行い、礫の検出を続ける。
- 6月15日 C区の平面発掘を行い、礫の検出を続ける。
- 6月18日 C区の平面発掘を行い、礫の検出を続ける。
- 6月19日 C区の平面発掘を行い、礫の検出を続ける。出荷野菜の取り入れで、休む作業員もあり思うように作業がはかどらない。
- 6月22日 C区の平面発掘を行い、礫の検出を続ける。
- 6月25日 C区の平面発掘を行い、礫の検出がほぼ終わるが、その大きさは子供の握り拳から頭大よりも大きなものまでまちまちである。集石とか列石というようなまとまりは見られない。
- 6月28日 C区の平面発掘を行う。
- 6月29日 C区の平面発掘を行い、礫の検出写真撮影。その後実測をはじめる。
- 7月2日 引続き礫の実測を行う。1号住居址の検出作業と検出写真の撮影。その後東西方向に土層観察ベルトを残し、住居址の精査をはじめる。
- 7月5日 引続き1号住居址の精査、小竪穴31上面の集石(発掘時は集石1と考え調査)の写真撮影と精査を行う。  
午後原村文化財調査委員会の視察。
- 7月6日 引続き1号住居址の精査を行う。小竪穴の検出と精査をはじめる。
- 7月9日 小竪穴の検出と精査をはじめる。
- 7月10日 引続き1号住居址の精査、小竪穴の検出と精査を行う。
- 7月11日 引続き小竪穴の検出と精査。1号住居址の精査と埋土の観察を行い実測をはじめる。
- 7月12日 引続き小竪穴の検出と精査。1号住居址の土層観察ベルトの取り除き作業を行う。午後レイクシティーケイブルビジョンテレビの取材。
- 7月17日 引続き小竪穴の検出と精査。1号住居址の遺物出土写真の撮影。その後実測をはじめる。
- 7月18日 引続き小竪穴の検出と精査。1号住居址の遺物取り上げを行う。

- 7月19日 引続き小豎穴の検出と精査。B区の表土剥ぎを重機で行う。
- 7月20日 2号住居址を検出し精査をはじめる。小豎穴の写真撮影。
- 7月23日 2号住居址と小豎穴の写真撮影。
- 7月24日 1号住居址・2号住居址および小豎穴の写真撮影。1号住居址の実測をはじめめる。
- 7月25日 小豎穴、1号住居址の竈の精査を行う。B区とC区の表土剥ぎを重機で行う。表土剥ぎが終了したところから遺構の検出作業をはじめ、3号住居址を検出する。
- 7月26日 小豎穴・1号住居址の竈・3号住居址の精査を行う。
- 7月27日 小豎穴・3号住居址の精査を行い写真撮影。その後竈の精査と実測をはじめると。
- 7月28日 3号住居址の実測。小豎穴の精査と写真撮影を行う。
- 7月29日 4号住居址を検出し精査を行う。遺構の全体写真の撮影を行うが、ここ数日雨が無く乾燥は著しく水まき作業は大変であった。
- 7月30日 遺構の全体写真の撮影を行う。
- 8月7日 機材の片付けと水洗いを行う。

(平出・伊藤)

## II 調査方法

### 1 調査区の設定

発掘に先だち、御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡とも東西南北（磁北）に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区・C区・D区というようアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに $2 \times 2$ mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南北方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた（第4・6・8図）。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図の御射山道北遺跡の右上の $2 \times 2$ mの発掘グリッドでみると、大地区はB区であり、小地区の東西方向はMラインにあたり、南北方向が62ラインで、それは「M-62」となる。したがって小地区的前に大地区を表記した「BM-62」となる。

### 2 調査の方法

発掘調査の対象は、平成2年度御射山地区県営畠地帯総合土地改良事業にかかる御射山道北・古屋敷西・堤之尾根の3遺跡で、それぞれ遺跡の全域におよぶ（第3図）。

準備期間中に数回におよぶ踏査を行ない、御射山道北遺跡は重機で表土剥ぎをした後に、古屋敷西遺跡は手耕りで、堤之尾根遺跡はじめ手握りで、遺跡の性格を確認した後は重機で表土剥ぎをした個所もある。発掘調査は御射山道北・古屋敷西遺跡は原則として含礫ローム層上面まで、堤之尾根遺跡の尾根上でローム層が確りした個所はローム層の上面、低地でローム層の堆積が不安定な個所は含礫ローム層上面まで層位別に行なった。

遺物は、基本的にグリッド別・層位別にとり上げ、遺構に伴うものは遺構別に取り上げた。

測量は、予め設定した2m四方のグリッドを基準とするやり方による。

### 3 調査の概要

御射山道北・古屋敷西の2遺跡は、発見した遺物は少なく、遺構を検出するまでには至らなかつた。

堤之尾根遺跡は、村教育委員会で昭和59年に実施した分布調査で、縄文時代早期から前期の土

器破片、打製石斧、黒曜石の剝片を採集し、その後に行なった踏査でも遺物の発見があり、縄文時代の遺跡立地としてはやや尾根幅は狭いようであったが、打製石斧の発見数が5点と多いことから住居址の埋没が期待できた。

しかし、遺構の分布状況は第9図に示したように、縄文時代の住居址は1軒と少なかった。当初は考えることもできなかった平安時代後期の住居址3軒を発見し、良好な調査結果を得ている。発見した遺物と遺構は次の通りである。

### 御射山道北遺跡

縄文時代後期土器破片と石器

平安時代後期灰釉陶器破片

発見した遺物は少なく遺構を検出するまでには至らなかった。

### 古屋敷西遺跡

縄文時代後期土器破片

平安時代後期土師器破片

御射山道北遺跡同様、発見した遺物は少なく遺構を検出するまでには至らなかった。

### 堤之尾根遺跡

縄文時代早期・前期・中期・後期土器破片と石器

縄文時代中期竪穴住居址 1軒

縄文時代小竪穴 48基

第2表 堤之尾根遺跡遺構一覧

カッコ付けの数値は推定ないしは現存部分を示す

遺構名	時代	遺構の特徴・規模等	出土遺物等
第1号住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 東西410cm 南北454cm 石組粘土甌 柱穴なし 火災?	
第2号住居址	縄文	円形ないしは楕円形の竪穴住居址 径(260cm) 石開炉 柱穴なし	
第3号住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 東西310cm 南北346cm 石組粘土甌 柱穴なし	耳皿
第4号住居址	平安	隅丸方形竪穴住居址 東西290cm 南北(346cm) 石組粘土甌 柱穴なし	
砾群	縄文		
小竪穴群	縄文	48基 性格の判明したものは少ない陥し穴が 2基ある	遺物が判出したもののは少ない



第3図 御射山道北・古里敷西・塙之尾遺跡発掘調査区域図・地形図 (1:2,000)

縄文時代の竪穴住居址は伴出遺物が皆無で、明確な帰属時期は不明であるが、遺構の在り方から中期中葉のものと思われる。また、検出位置が強い南傾斜面であり注意されよう。縄文早期の土器と石器はそれほど多くないが、当地方としてはまとめた資料である。

平安時代後期の竪穴住居址は、ほぼ等高線上に展開したが、八ヶ岳西南麓の多くの遺跡とは違い、緩やかな南傾斜面の日當まりではなく、北斜面であった。

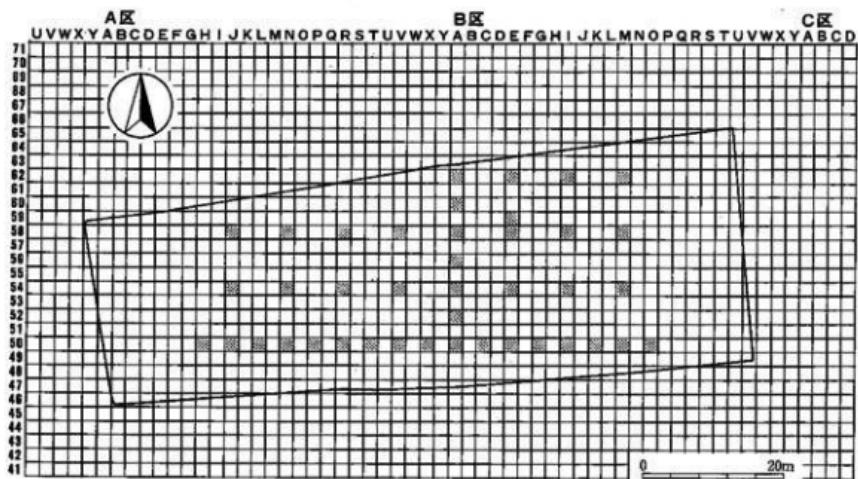
### III 御射山道北遺跡

#### 1 位置と環境

御射山道北遺跡（原村遺跡番号92）は、中新田区の西南方に隣接し、中央自動車道の諏訪南インターチェンジ東北方約2400mの、長野県諏訪郡原村中新田14558-1番地付近に位置する。柳林川対岸の北方約230mに古屋敷西遺跡が、北西方約500mに堤之尾根遺跡が所在している（第2図・第1表）。

このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。その一つである六部塚川と柳林川にはさまれた尾根の緩やかな北斜面が遺跡である。これより西は、約3300m先でホオツサマグナの西縁である糸魚川一静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

本遺跡が確認されたのは古いことではなく、昭和59年度に村教育委員会で実施した「県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区内における埋蔵文化財緊急分布調査」の折に、縄文時代中期曾利式土器破片1点を採集したことにより注意されはじめた遺跡であるが、縄文時代の遺跡立地としてはあまり良くない。



第4図 御射山道北遺跡グリッド配置図 (1 : 800)

発掘地点の地目は普通畠であるが、付近は水田で、水田の中に調査地が畠地として残っていた状態であった。地味は、礫が多くあまり良くない。この状態は、すでに発掘調査を実施している判の木尾根（判の木東）、箕手久保、中道通遺跡なども同様であった。標高は1070m前後を測り、当地方における遺跡としてはやや高所に位置している。

この付近一帯は、八ヶ岳西南麓の中では遺跡の希薄地域であるが、第2図と表1に示したように、縄文時代後期を中心とした遺跡が分布している。それらは昭和59年度に実施した分布調査の折に発見された遺跡が多く、10遺跡を数え一連の発掘調査の結果、比較的小規模な遺物散布地ばかりであった。

なお、第2図と表1の番号は、原村遺跡番号で表示した。

## 2 土 層

第4図のグリッド配置図に示したように、41グリッド164m<sup>2</sup>の平面発掘を層位別に実施した。

B区のグリッドの多くは耕作土の直下が地山の含礫ローム層となってしまう状態で、層序は安定していないが、A区は地区の含礫ローム層までは深く層序も安定していた。これは丁度畑の堀がA区B区の境辺りにあり、これが土層の厚さにも関係しているようである。地山の含礫ローム層までが深かったAJ-58グリッドの東壁を基本層序と考え、おおまかな観察結果を記しておきたい。

第I層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土で19~20cmの厚さである。上層は重機で取り除いた。

第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。14~15cmを計る。下部には礫が混入するが、礫の大きさは握り拳大から頭大よりやや大きなものまでまちまちである。

第III層 混礫褐色土層 50cmを計る。礫の大きさは第II層と同じで、上部の35~40cmは礫層と呼んでも良い位であった。

第IV層 含礫ローム層 地山のローム層である。

## 3 遺 物

### (1) 縄文時代の遺物

発掘調査の結果、縄文時代と平安時代の遺物を僅かに発見しただけである。これらに若干の説明を加えてみたい。

#### 土 器 (第5図)

土器は、破片ばかり15点発見したが、14点は胎土・整形・焼成からみて同一個体のものと思われる。1~4の4点を図示したが、無文の深鉢で明確な帰属時期を示すことはできない。胎土・

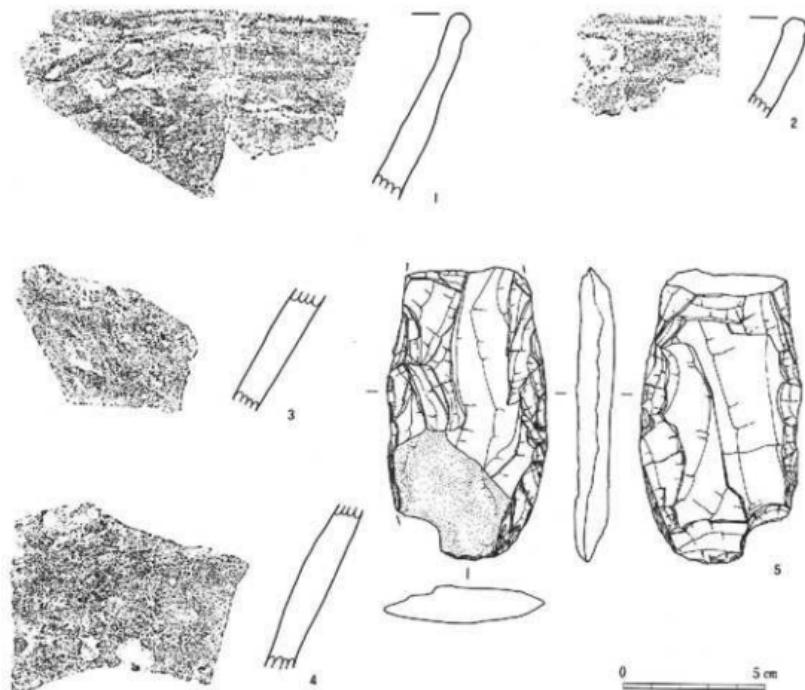
整形および焼成は、南西方約900mの花表原遺跡出土の無文の鉢に極めて類似するもので、後期初頭であろう。外壁に炭化物が確り付着している。BE-58、BE-59グリッド出土。

#### 石 器（第5図）

石器は、第5図5の硬砂岩製の打製石斧1点で、基部と刃部の一部を欠損するが、比較的薄手作りの良品である。当地方で一般的にみられるもので、縄文後期と思われるが明確な帰属時期を示すことはできない。

#### (2) 平安時代の遺物

発見したのは灰釉陶器1点で、器形も判別できない小破片で図示してない。A地区からの表面採集である。



第5図 御射山道北道路土器拓影と石器実測図 (1 : 2)

#### 4 ま と め

調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかった。発見した遺物は土器・石器とも少なく、その出土状態からみて遺構の埋没は考えられない希薄な遺物散布地である。

縄文時代の遺物は、土器破片が2個体分で15点(内14点は同個体)、打製石斧が1点と極めて少なかった上に、縄文時代の集落遺跡にはかならず有ると言える黒曜石の剝片やチップの発見は皆無であった。この事実からなんらかの生活の場でありながら、その時間は極めて短かったようである。興味深いことであるが、当地方における集落遺跡と、本遺跡のような小規模遺跡が、一体どのような関係にあったかについては今後に残す研究課題であろう。

(平出)

## IV 古屋敷西遺跡

### 1 位置と環境

古屋敷西遺跡（原村遺跡番号91）は、中新田区の西南方に隣接し、中央自動車道の諏訪南インター東北方約2400mの、長野県諏訪郡原村中新田14484-1番地付近に位置する。柳林川対岸の南方約230mには御射山道北遺跡が、南西方約500mに堤之尾根遺跡、平成元年度に発掘調査した中道通遺跡が西方約150mに所在している（第2図・第1表）。

このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。その一つである柳林川と道祖神川にはさまれた尾根の平坦部といえるくらい緩やかな南斜面が遺跡である。これより西は、約3300m先でホッサマグナの西縁である糸魚川一静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

本遺跡の発見はそう古いことではなく、昭和59年度に村教育委員会で実施した「県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区内における埋蔵文化財緊急分布調査」の折に、石器を採集したことにはじまる。しかし、縄文時代の集落遺跡の立地としてはあまり良くない。

発掘地点の地目は普通畠であるが、付近は宅地と水田でその保存状態はあまり良くない。地味も礫が多くあまり良くない。この状態は、すでに発掘調査を実施している箕手久保、判の木尾根（判の木東）、中道通遺跡なども同様であった。標高は1065m前後を測り、当方における遺跡としてはやや高所に位置している。

御射山道北遺跡でも記したように、付近の遺跡は比較的小規模な遺物散布地である。

### 2 土 層

第6図のグリッド配置図に示したように、14グリッド56m<sup>2</sup>の平面発掘を層位別に実施した。

グリッドの中には耕作土の直下が地山の含礫ローム層となってしまうものもあり、層序は安定していないが、BM-54グリッドの東壁を基本層序と考え、おおまかに観察結果を記しておきたい。

第I層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土で16~20cmの厚さである。

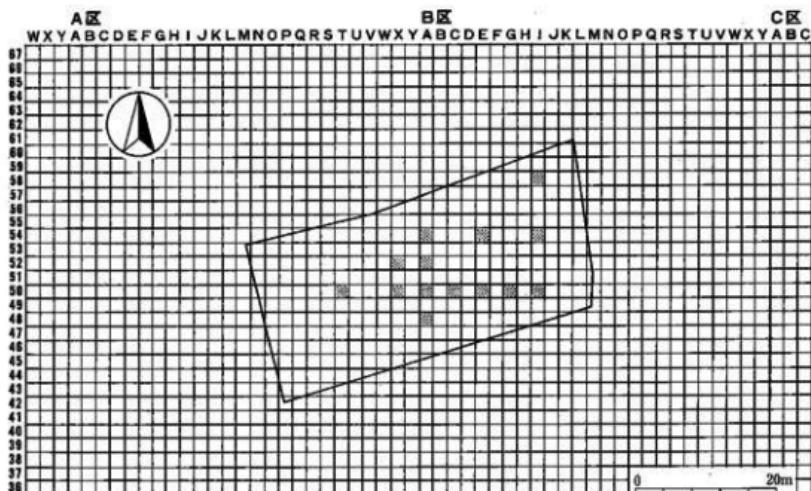
第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。16~18cmを計るが下部に礫が含まれるグリッドもみられた。礫の大きさは握り拳大から頭大よりやや大きなものまでまちまちである。AX-50グリッドの縄文土器破片はこの層からの出土である。

第III層 黄色土層 10~12cmを計る。数多い礫が含まれるグリッドもみられた。礫の大きさ

さは第II層と同じである。

第IV層 含礫ローム層 地山のローム層である。

なお、西方約500mの中道通遺跡は見方によつては同じ遺跡となろうが、付近一帯はすでに工事が行なわれ層序の比較はできないが、中道通遺跡でも第I層～第IV層に分けている。観察の違いか地点の違いによるものかその土層名は違つてゐる。礫を包含しているのは第II層下部から第III層であり、縄文土器の出土は第II層で層位は同じようである。



第6図 古屋敷西遺跡グリッド配置図 (1:800)

### 3 遺 物

#### (1) 縄文時代の遺物

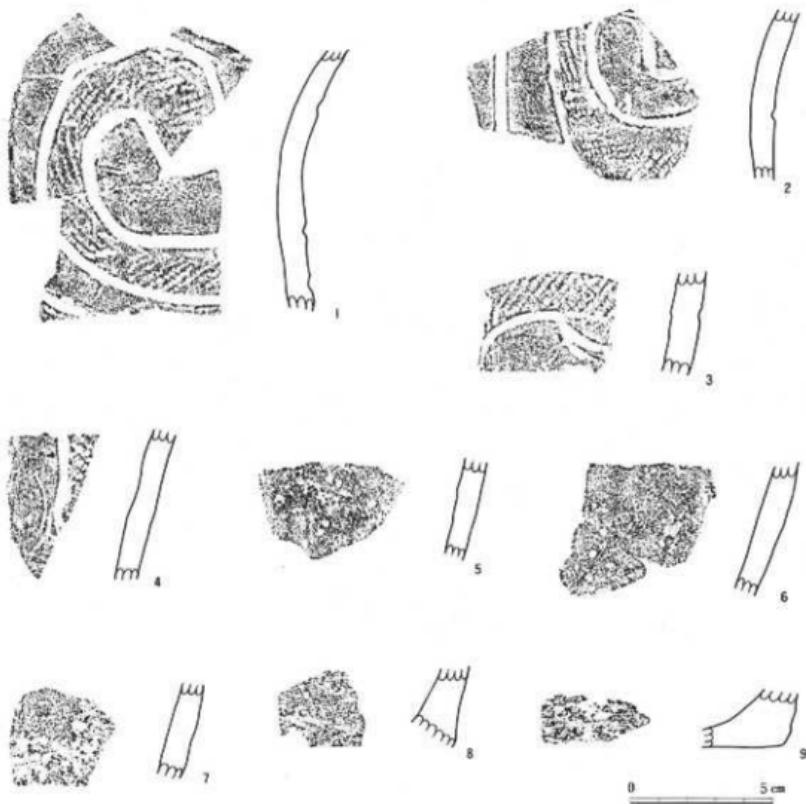
発掘調査の結果、縄文時代と平安時代の遺物を僅かに発見しただけである。これらに若干の説明を加えてみたい。

##### 土器 (第7図)

土器は、破片ばかり17点発見したが同一個体の深鉢で、9点を図示した。1～4は沈線と縄文が施された胴部破片、5～8は無文の底部付近で、9は底部破片である。縄文時代後期初頭に帰属する。AX-50グリッド出土。

## (2) 平安時代の遺物

発見したのは土師器 1 点で、小破片で図示してないが内面黒色の環形土器である。BE-54グリッドの第 I 層耕作土出土。



第 7 図 古屋敷西遺跡土器拓影 (1 : 2)

#### 4 ま と め

調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかった。発見した遺物は土器・石器とも少なく、その出土状態からみて造構の埋没は考えられない希薄な遺物散布地である。

発見した縄文時代の遺物は少なく、それも土器破片17点だけでありしかも同個体の破片である。集落遺跡にかららず有る黒曜石の刷片やチップの発見はなく、御射山道北遺跡と同様である。御射山道北遺跡の土器は無文で帰属時期を明確に示すことはできなかったが、その時期もほぼ同様と思われ。また地形的には類似するし、遺跡の位置関係は柳林川をはさんだ隣どうしであり、性格は同様な遺跡であったものと思われる。

御射山道北遺跡と同じことになるが、極めて強い発掘所見であるのでここでも書いておきたい。なんらかの生活の場でありながら、その時間は極めて短かった点は興味深い。集落遺跡と希薄な遺物散布地が、当時どのような関係にあったかは今後に残す研究課題である。 (平出)

## V 堤之尾根遺跡

### 1 位置と環境

堤之尾根遺跡（原村遺跡番号81）は、中新田区の西南方、中央自動車道の諏訪南インター東北方約1900mの、長野県諏訪郡原村中新田14534-1番地付近に位置する。

御射山道北遺跡は東南方約500mに、古屋敷西遺跡は北東方約500mに、平成元年度に発掘調査した御射山沢遺跡と梨の木沢西遺跡が、六部塚川対岸の南方約250mに所在している（第2図・第1表）。

このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。その一つである六部塚川と柳林川にはさまれたやせ尾根が遺跡である。六部塚川と柳林川は下流約200mで合流し金山沢川となる。これより西は、約2300m先でホオッサマグナの西縁である糸魚川一静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

本遺跡の発見はそう古いことではなく、昭和59年度に村教育委員会で実施した「県営畑地帯総合土地改良事業御射山地区内における埋蔵文化財緊急分布調査」の折に、縄文時代早期と前期の土器破片8点（内2点は押型文）、打製石斧5点、黒曜石の剝片12点を探集したことにはじまる。しかし、極めてやせた尾根であり遺跡の立地としてはあまり良くない。

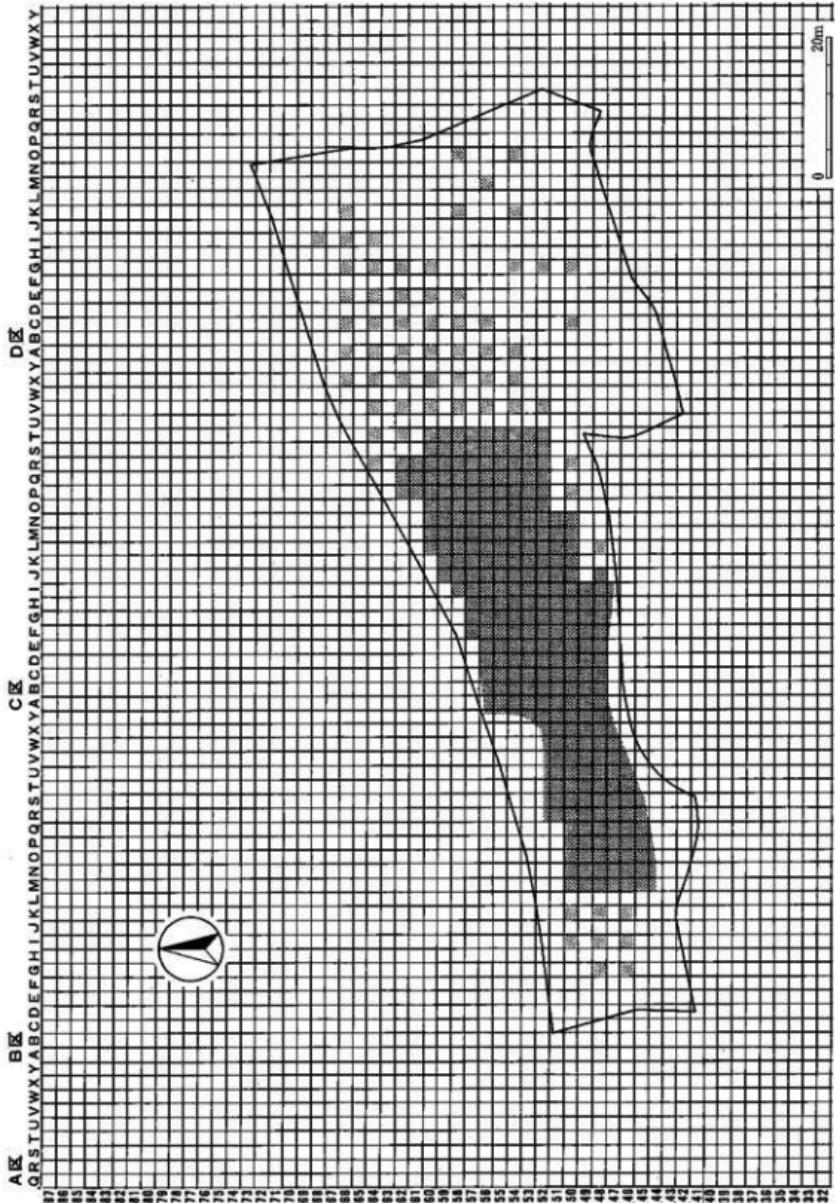
発掘地点の地目は普通畑であるが、付近は水田で、水田の中に調査したやせ尾根が残っていた状態で、尾根上の黒色土の堆積は極めて薄く、ローム層を耕作土としている箇所もみられ、その保存状態は極めて悪いものであった。標高は1040m前後を測り、当地方における遺跡としてはやや高所に位置している。

歴史的環境は、西南方約1800m諏訪神社上社の摂社である御射山神社が鎮座し、この付近一帯は、上社が執り行う年4度の御狩の神事のなかで最も大掛かりな「御射山御狩」の祭場にあたり、ことに中世においては、その神事が盛大であったことが、同時代の文献によって伝えられている。

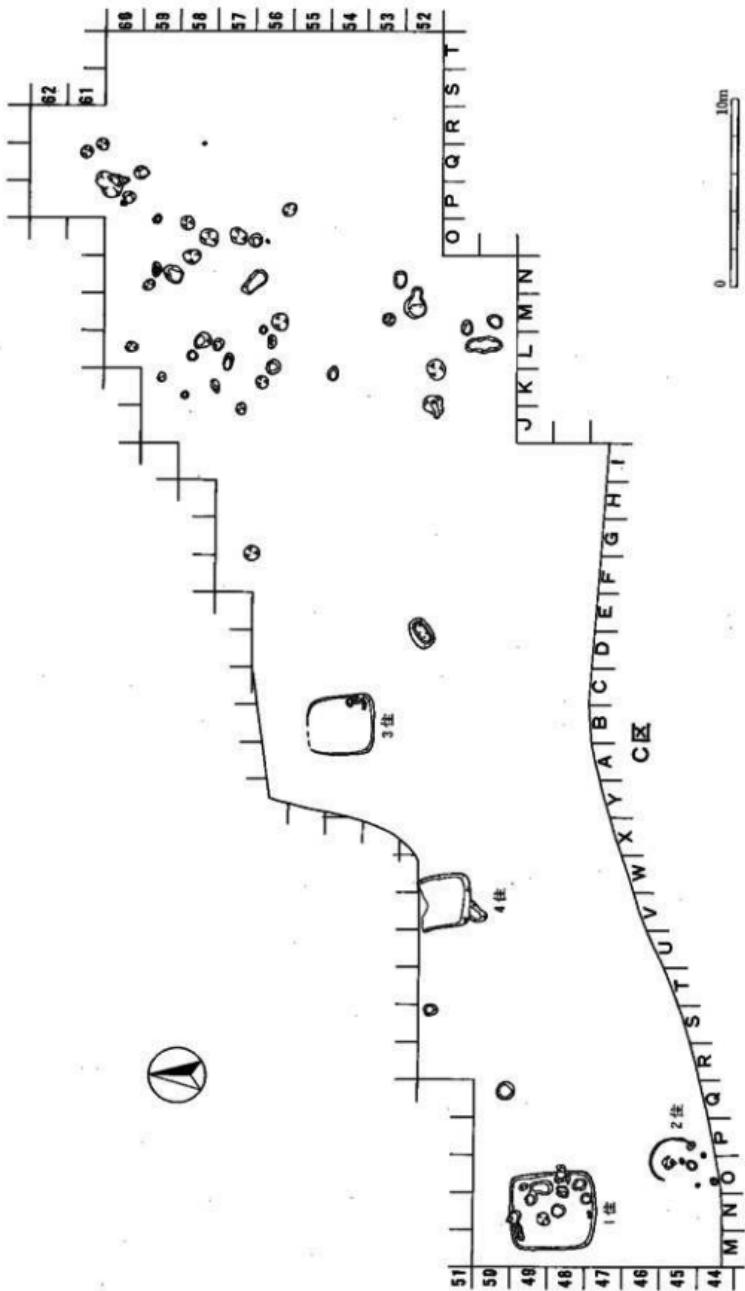
付近一帯には、濃密な平安時代後半の遺跡があり、中でも当時の生活において貴重品であった、綠釉陶器片が出土した手洗池遺跡、鐵鐸等豊富な副葬品を持った墓壙が検出された御狩野遺跡、綠釉陶器片と八稜鏡が発見された判の木西遺跡などがあり、これらの遺跡は御射山神社に無縁ではあったとは考えにくく、神社を支える集落群が成立していた地域と思われる。

### 2 土 層

第8図のグリッド配置図に示したように、364グリッド1,392m<sup>2</sup>の平面発掘を層位別に実施した。



第8図 堤之尾根造林クリット断面図 (1:800)



第9図 横須賀市境地図 (1 : 300)

本遺跡における層序は、尾根上と斜面、そして平地（低地）では違いがみられた。それは尾根幅が狭く土層が安定していないことによるものであろう。

尾根上のB地区からC地区Fライン位までは、住居址が発見された地区で、地山のローム層までは比較的深く、層序はしっかりとしている箇所もあった。B地区TラインからC地区にかけて、長芋を掘ったと思われる擾乱が著しくローム層まで達していた。基本的には上層から黒褐色土（表土）・黒色土・黒褐色土・褐色土・ソフトロームである。

C地区FラインからD地区にかけての尾根上は、礫群と小豊穴が検出された地区で、表土である耕作土の直下がローム層となってしまう箇所は広範囲におよび、中にはロームを耕作土としている箇所もみられるなど最悪の状態であった。表土の直下がローム層となることは、土の堆積事態が薄かったことも充分考えられることであるが、尾根幅が狭く馬の背状の傾斜地では土の流出も多かったことであろう。また、耕作の都合で平坦化がされているようでもある。

おまかなか観察結果を記しておきたい。

## 尾根上

第I層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土で10~20cmの厚さである。

第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。5~20cmを計り、ローム層までが深い箇所はこの層が厚く堆積していた。上部からは平安時代の遺物が、下部から第III層にかけて縄文時代の遺物が出土している。

第III層 黒褐色土層 しまり堅さは第II層と同じである。この層の認められない箇所もある。

第IV層 褐色土層 いわゆるローム漸移層である。

第V層 ソフトローム層

D地区50ライン南側は低くテラス状となり、平地と呼べるような地区である。含礫ロームまでの深さはグリッドによってまちまちで40~65cmを計り、この土の厚さは、前記したように馬の背状の尾根から流出した土を留めているためであろう。

## 平 地

第I層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土で16~20cmの厚さである。尾根上より黒色は強い。

第II層 黒色土層 第I層よりしまっている。

第III層 真黒色土層 5~40cmを計る。尾根上では認められないもので、含礫ローム層までが深い箇所はこの層の堆積が厚くなる。下部には礫が含まれている。礫の大きさは握り拳大から頭大よりやや大きなものまでまちまちである。縄文時代の遺物が僅かに発見されている。

第IV層 含礫黒褐色土層 磯の大きさは第III層と同じであるが、礫が多くなり磯層と呼んで

もよい状態であった。

第V層 含礫褐色土層 磚の大きさは第III・IV層と同じである。色調が褐色となる以外は第IV層と変わることはない。

第VI層 含礫ローム層

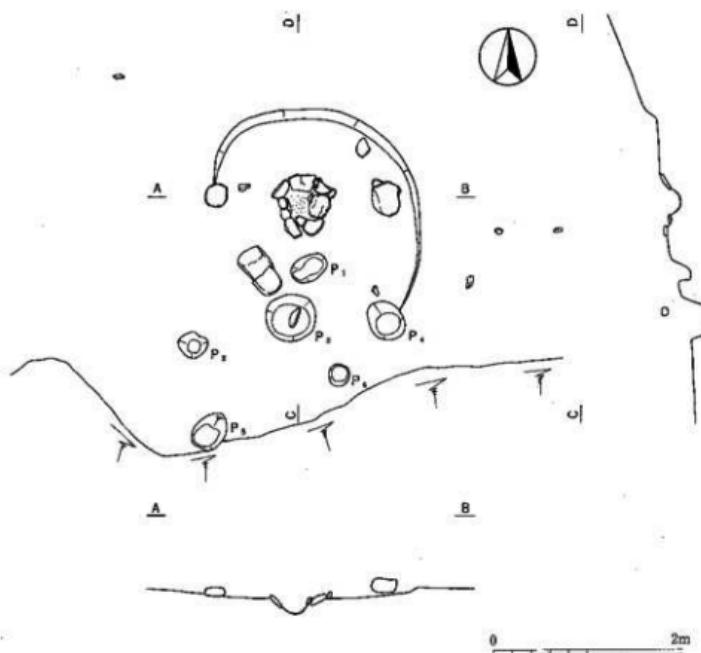
### 3 繩文時代の遺構と遺物

検出調査した縄文時代の遺構は、中期中葉と思われる住居址1軒、礫群、小豎穴48基である(第9図・第2・7表)。遺物は土器と石器であり多くない。

#### (1) 住居址

第2号住居址 (第9・10図)

調査の経過



第10図 堤之尾根遺跡第2号住居址実測図 (1:60)

1号住居址の検出と付近の精査を進めている折りに、尾根の肩部にあたり極めて傾斜は強くなる上に、土層の不安定な箇所で数個の礫を発見した。集石か列石状の遺構と考え調査を進めると、縄文時代中期の炉址であった。炉址を確認してしまったこともあり、あわてて住居址のプラン検出を試みたが、強い傾斜地である上にロームはブロック状にボロボロと崩れ落ちる最悪な状態で、BO-46、BP-45、BP-46グリッドで北壁と東壁が僅かに確認できただけである。

プランは確認できたが、埋土の多くはすでに取り除かれた後で、土層の観察は明確にできなかつたが、自然埋没による豊穴のように思われた。

#### 遺構

遺存した東壁と北壁から住居址のプランと規模を推定すると、BO-44~46、BP-44~46の6グリッドに跨る径260cm位の円形ないしは楕円形を呈するものであろう。壁の立上りはなだらかで、壁高は北壁の高い所で18cmを計り南に行くにしたがい低くなり、西壁と南壁は遺存していなかった。

床面は総体的には軟弱で、ロームのタクキ床は炉址から北側に僅かに残存しただけで、地形の傾斜同様に南に傾いていた。炉をはさんだ東と西の壁際には平板石が床面上に据え置かれていた。打痕や磨痕は一切認められないもので、性格および用途は不明である。炉南側からもやはり大きな石が発見されているが同様である。

柱穴と思われる穴は発見できなかつたが、住居址の南側で柱穴状の穴P1~P6の6個を検出した。P1とP3は検出位置から本址に伴うものかもしれないが、積極的にいえるものではない。ここでP1~P6の大きさについて触れておきたい。P1は40×28cmの平面楕円形で深さ21cm、P2は32×29cmの不整円形で深さ58cmと深い。P3は53×53cmの円形で深さ25cmを計り、上面には23×9cmの礫1点があった。P4は46×36cmの楕円形で深さ28cm、P5は42×33cmの不整楕円形で深さ23.5cm、P6は24×22cmの円形で深さ21cmである。

炉は中央奥壁寄りと思われる位置に、内径規格28×22cmの方形石圓炉がある。基本的には8個の小さな石を埋め立てて構築したもので、石と石の間には小石がつめられていた箇所もある。また、火と熱によって破損している石もみられたし、脆くなつていて取り上げる際に破損したものもある。石全てが当地方で産出する安山岩である。この形態の炉は、中期中葉の新造式ないしは藤内I式にみられるものである。炉内の焼土はあまり厚くなかった。炉内には地山のバミスがみえ、本址の構築場所がいかに傾斜地にあるかがわかる。

#### 遺物

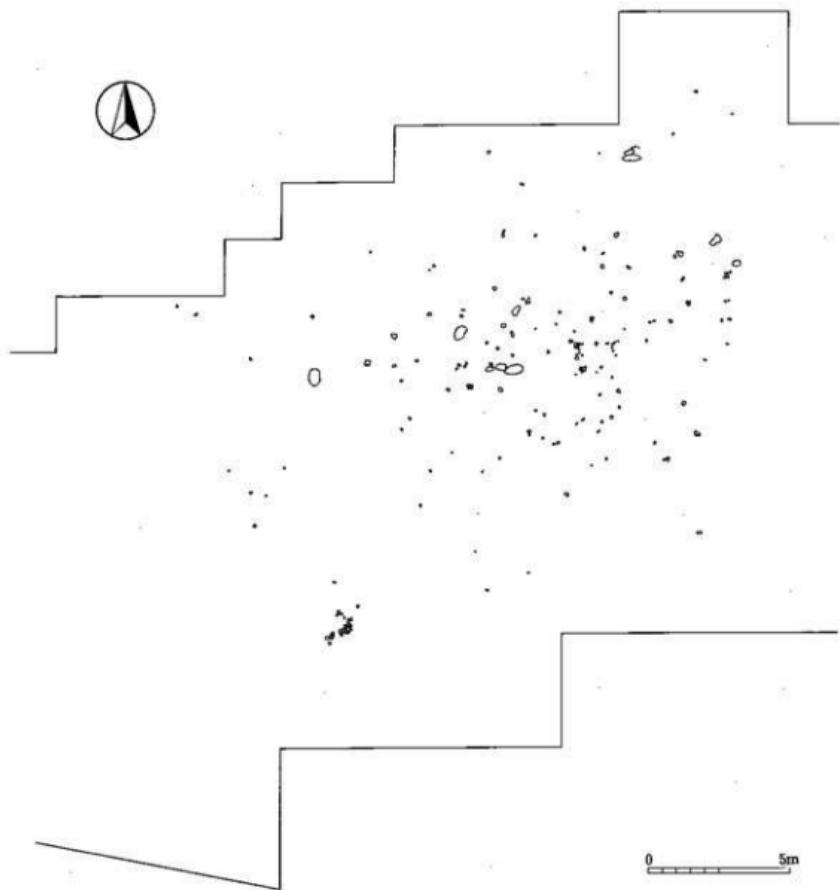
遺物の発見は皆無である。

#### (2) 磯群 (第11・12・18図)

礫はC地区の尾根上で検出調査したが、礫実測図(第11図)に示したように、その広がりは20×20mの範囲で、小豊穴31上面の集中箇所以外は、集石とか列石と呼ぶようなまとまりや規格性はみられなかつた。

礫検出範囲は、礫・小豎穴実測図（第12図）に示したように、小豎穴の分布範囲とはほぼ同じで、礫と小豎穴が無縁であったとは考えられない。土層の所で記載したように、検出地点は地山のローム層を耕作土としていることから、礫が縄文時代そのままの状態で埋没していたとは考えられないし、耕作の折に数多い礫が取り除かれているものと思われ、その保存状態は極めて悪く性格を究明するまでに至っていない。

礫は円礫と角礫とがあり、その大きさは数cmの小さいものから70×30cmの大きなものまで、ま



第11図 境之尾根遺跡礫実測図 (1:200)

ちまちで規格性はみられなかった。当時の状態そのまで残っていると思われる大きな礫をみると、1点が単独に置かれたもの、2点が寄り添う状態に並べられたもの、3点が列石上に並べられたものなど、規格性に乏しくその出土状態も、ローム直上に据え置かれたもの、ロームに半分位埋められていたもの、写真9のように、ロームに礫とほぼ同じ大きさの穴を掘り埋め立ててあったものなどやはりまちまちである。

僅かではあったが、小さい礫の中には特殊磨石と凹石があり、これらの石器を当時の人たちが、単に他の礫と同様にあつからていたのか、それとも石器の性格を有したままであったのか明確にすることはできなかった。

遺物は、縄文時代早期の押型文系、条痕文系を主体とした土器破片と、特殊磨石や凹石の他に打製石斧、横刃形石器、石匙、石鎌などの石器が出土している。全資料を表示しなかったので問題点も残るが、グリッド別遺物出土状況図（第18図）に示したように、土器と石器が礫群や小豎穴の検出範囲と、ほぼ同じ地点であることは注目すべきことである。しかし、調査では礫群と遺物の出土地点がほぼ一致した傾向以外に、積極的に礫群に伴うことを示す状況はみられなかったので、造構外出土遺物で説明したいと思う。

性格については、茅野市・高風呂遺跡の集石4～7の、縄文早期末葉（条痕文系と縦条体压痕文系）から前期初頭にわたる土器群が混然とした状態で発見された点は、本遺跡と共に通するが保存状態が悪く比較できないことが多い。

高風呂遺跡では集石の性格について「この集石群は住居址内にみられた固定式石皿と同形態の石皿を中心に礫が不規則に集中して一定の空間を構成しており、集石周辺には屋外炉とみられる焼土や固くしまった面も検出されている。そのあり方は、ここが単に礫や土器等を廃棄した場でないことを示すものである。完形土器・石皿・焼土そしてこの周辺に特に集中して検出されている黒曜石製の搔器等から、早期末以来続く屋外の食糧調理の場としての性格も考えることができ、早期末から前期初頭の住居内炉のあり方と関連して注目される。」と述べている。高風呂遺跡と大きく違う点は、本遺跡では該期の住居址が発見できなかったことである。焼土も検出できなかつたし石皿の発見もなく、高風呂遺跡の性格を直接結び付けることはできない。しかし、本遺跡の礫群も縄文時代の何らかの施設の一部であることは確かで、ここでは似通った性格の施設の一部と考えておきたい。

### （3）小豎穴（第12～17・38図）

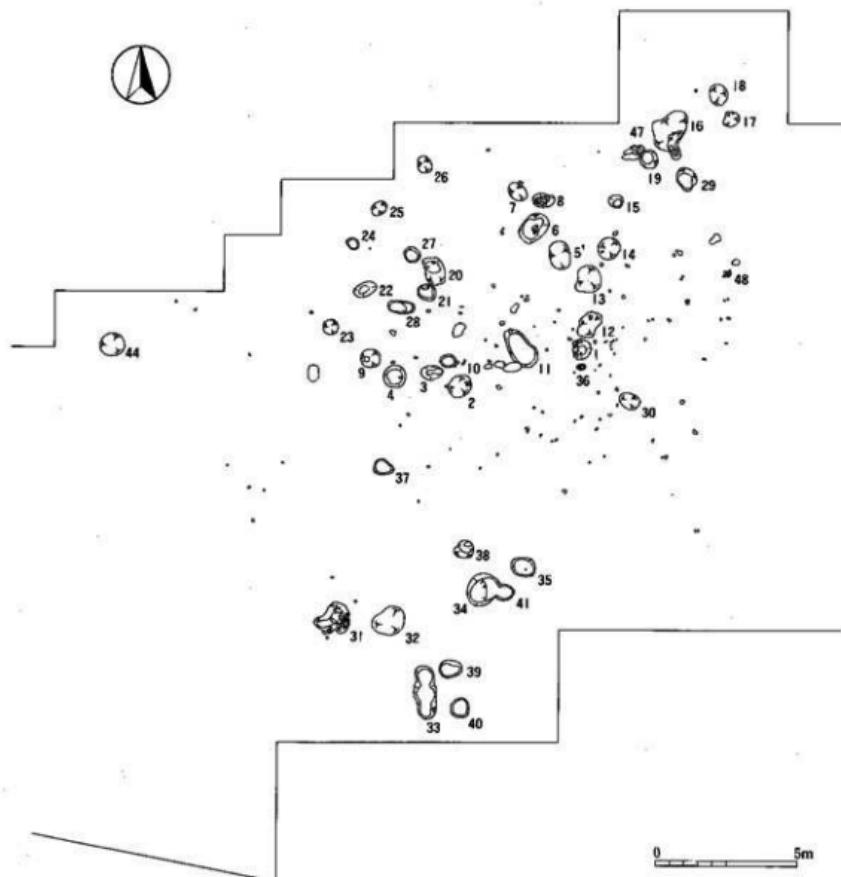
小豎穴は、第9・12～16・38図と第7表に示したように、48基を検出調査した。帰属時期を明確にできる遺物が伴出した小豎穴は少なく、性格がわかるものも少ない。

礫群の所でも記載したが、小豎穴31上面の礫は当初集石と考え調査を進めたように、小豎穴と礫群の出土地点はほぼ同じで（第12図）、小豎穴と礫が無縁であったとは考えられない。小豎穴と礫群を検出した地点は、地山のローム層を耕作土としていることから、検出した礫が縄文時代そ

のままの状態で埋没していたとは考えられないし、耕作の折に取り除かれた礫も多かったと思われ、その保存状態は極めて悪いものであった。

以上のことから小豎穴と礫群の関係および性格を明確にすることはできないが、強いていうならば、小豎穴1と31の礫の在り方から、小豎穴と礫は同一遺構であったと考えられる。

帰属時期のわからない小豎穴の方が多いが、礫群の在り方からここでは縄文時代の小豎穴と考えておきたい。



第12図 堤之尾根遺跡礫・小豎穴実測図 (1:200)

小豎穴の調査方法は、自然傾斜方向ないしは長軸方向で半分の精査を行ない、土層観察をした後に残り半分の精査を実施した。下記の土層は検出面の状態を示すが、注意されるものについては観察結果を記載する。

なお、カッコ付けの数値は重複した小豎穴で、現存部分の大きさを示している。

#### 小豎穴1 (第9・12・13・17図)

尾根上のCO-55、CO-56グリッドで検出調査した。検出面と小豎穴内で角礫と円礫5点が出土している。その出土状態から本址に確実に伴うものであるが、性格については不明である。小豎穴の平面形は70×64cmの楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁はややなだらかで、底面は平で深さは27.5cmを計る。

遺物は縄文土器2点と少ないが、縄文が施された薄手の第17図1と撚糸文の小破片で、帰属時期を明確にすることはできなかった。

#### 小豎穴2 (第9・12・14図)

尾根上のCL-56グリッドで検出調査した。検出面で17×12cmの角礫1点の出土がある。平面形は90×72cmの楕円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ17cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豎穴3 (第9・12・14図)

尾根上のCK-56グリッドで検出調査した。平面形は79×48cmの楕円形である。埋土の堆積はレンズ状の自然埋没で、上層から含ローム褐色土・含ローム黄褐色土・含ローム褐色土であった。壁は二段に立上り東側の一部は袋状となる。斜めに掘られた小豎穴であったが、平底で深さ78.5cmと深い。

遺物は図示していないが、縄文の施された小破片1点が発見されただけで、帰属時期を明確にすることはできなかった。

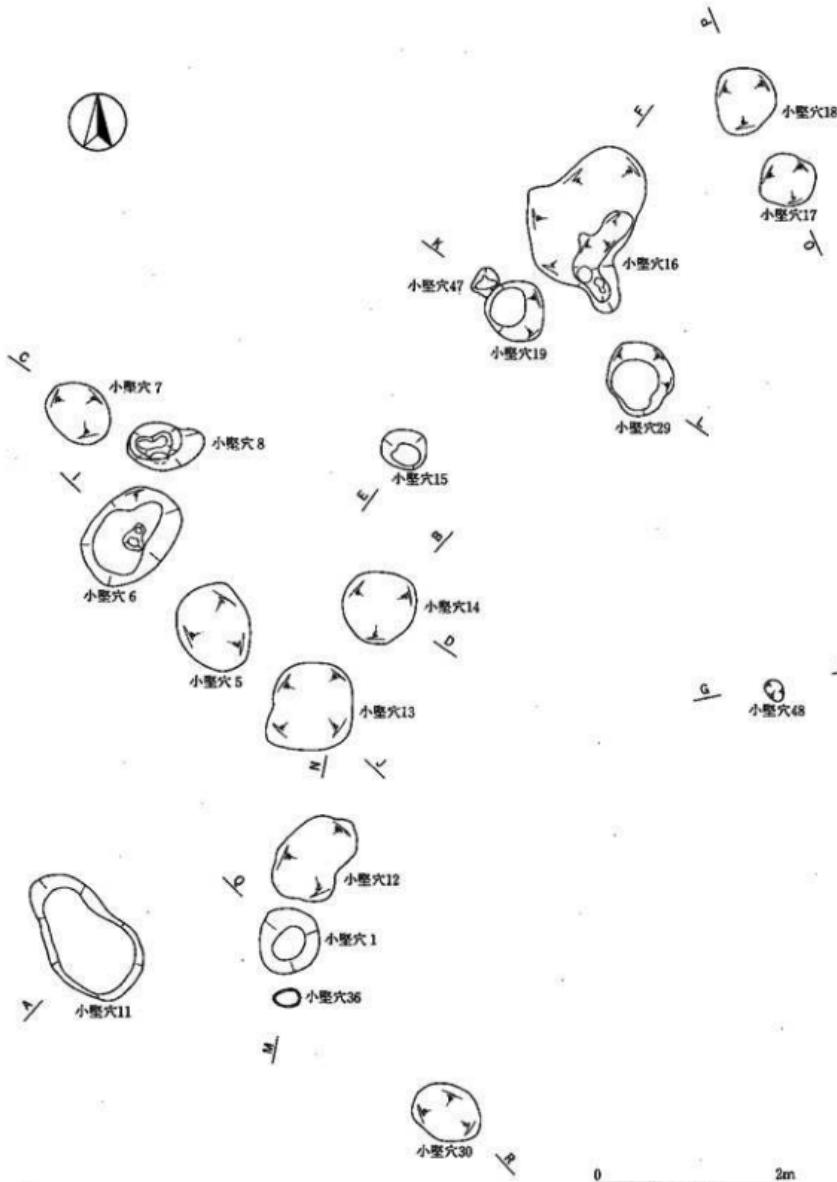
#### 小豎穴4 (第9・12・14図)

尾根上のCJ-56、CK-56グリッドで検出調査した。平面形は76×75cmの円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ23cmである。

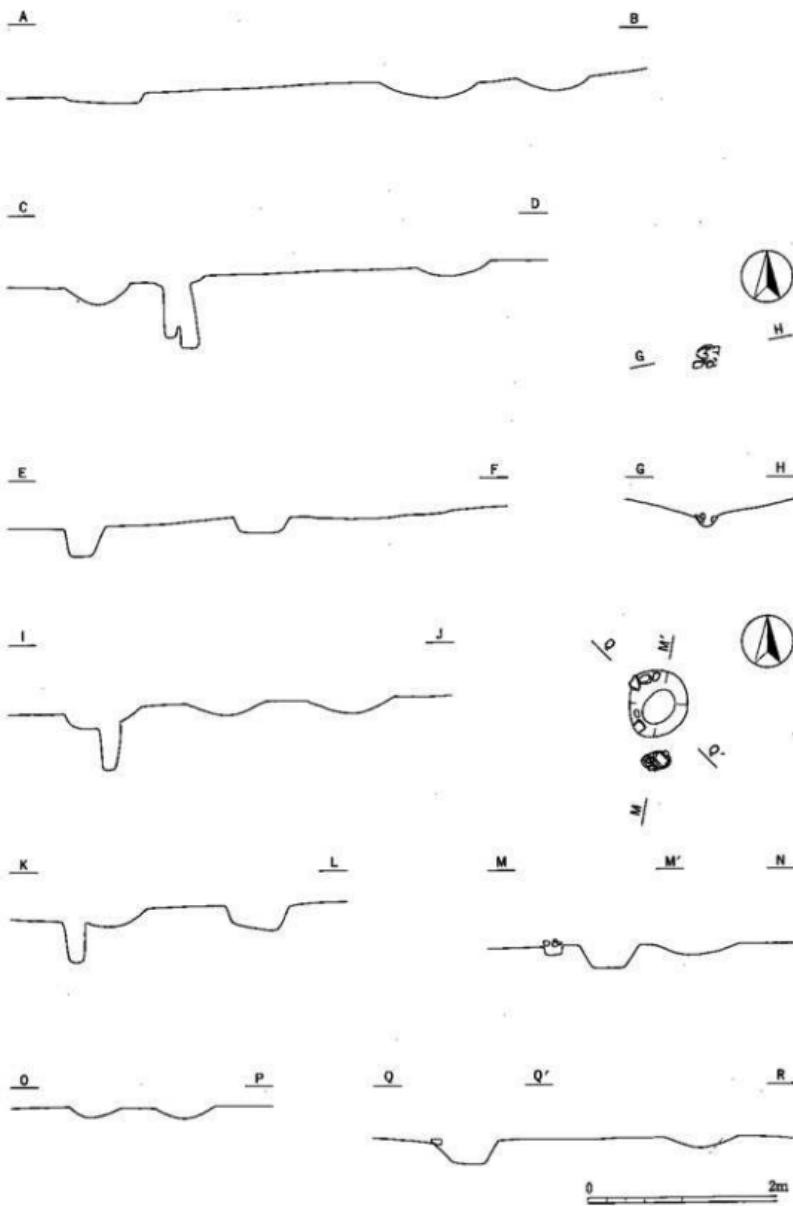
遺物の発見は皆無である。

#### 小豎穴5 (第9・12・14図)

尾根上のCM-58、CM-59グリッドで検出調査した。平面形は82×94cmの楕円形で、埋土は黒色



第13圖 堤之尾根遺跡小竖穴 1、5~8、11~19、29、30、36、47、48実測図 (1 : 60)



土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ16cmの舟底状であった。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴8 (第9・12・13図)

尾根上のCM-58、CM-59グリッドで検出調査した。検出面で10×8cmの角礫1点の出土がある。小豊穴の平面形は、118×82cmの橢円形で、埋土は、黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ67cmを計るが、底面に橢円形の小穴がほぼ垂直に2個穿たれていた。それは22×16cmで深さは38cmと、12×12cmで深さは17cmである。

小豊穴42と比べると規模は小さいし粗雑であるが、底面に穿たれた小穴の在り方からここでは陥し穴と考えておきたい。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴7 (第9・12・13図)

尾根上のCM-59グリッドで検出調査した。平面形は72×60cmの橢円形である。埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ23.5cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴8 (第9・12・13図)

尾根上のCM-59グリッドで検出調査した。平面形は82×50cmの不整橢円形であるが、縁部の状況からみて埋没する際に崩れたものかもしれない。埋土は褐色土の自然埋没であったが、褐色にみえるのはロームの微細粒が混ざっているように観察できた。壁の立上りは二段となり、底も二段となる。深さは浅い方が60cm、深い方が78cmを計り一部袋状となる。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴9 (第9・12・14図)

尾根上のCJ-56グリッドで検出調査した。平面形は70×65cmの円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ13.5cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴10 (第9・12・14図)

尾根上のCK-56、CL-56グリッドで検出調査した。検出面で12×9cmの角礫1点の出土がある。平面形は52×45cmの円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ13cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴11 (第9・12・13図)

尾根上のCM-56、CM-57グリッドで検出調査した。平面形は152×88cmの楕円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ27cmである。

遺物は小破片で図示していないが、無文の縄文土器1点が発見されただけで、帰属時期を明確にすることはできなかった。

#### 小豊穴12 (第9・12・13図)

尾根上のCO-57グリッドで検出調査した。平面形は102×68cmの不整楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ17.5cm舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴13 (第9・12・13図)

尾根上のCO-58グリッドで検出調査した。平面形は94×92cmの楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ18.5cm舟底状である。

遺物は図示していないが、黒曜石の剥片1点が発見されただけである。

#### 小豊穴14 (第9・12・13図)

尾根上のCO-58、CP-58グリッドで検出調査した。平面形は80×78cmの円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ17cm舟底状である。

遺物は図示していないが土器と石器があり、土器は縄文が施された小破片1点で、帰属時期を明確にすることはできなかった。石器は黒曜石の剥片1点である。

#### 小豊穴15 (第9・12・13図)

尾根上のCO-59、CP-59グリッドで検出調査した。平面形は48×44cmの円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ32.5cmを計る。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴16 (第9・12・13・17図)

尾根上のCP-60、CP-61、CQ-60、CQ-61グリッドで検出調査した。平面形は176×124cmの不整楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没で、小豊穴内から10×7cmの縄文土器1点が出土している。壁はなだらかに二段に立上り、底は小さくなるが平で深さ79cmを計り、底面には円形の小穴が3つほど垂直に3個穿たれていた。小穴の大きさは大きいものから径16cmで深さ44cm、径9cmで深さ34.5cm、径5cmで深さ16cmをそれぞれ計る。性格は不明であるが出土土器から縄文早期に帰属するものであ

る。

遺物は土器と石器がある。土器は小破片ばかり 8 点で図示していない。2 点は山形押型文土器、6 点は無文土器で磨滅している。石器は17図 8 の特殊磨石 1 点で、硬砂岩製の破損品である。断面三角形を呈する特徴的な形態で、磨耗面には敲打痕も認められ、端部には明瞭な剝離痕が残り敲打痕も著しい。本遺跡で発見した特殊磨石は10点を数えるが、当地方で産出する安山岩製のものばかりで、硬砂岩はこの 1 点だけである。

#### 小豊穴17 (第 9・12・13図)

尾根上のCQ-60、CQ-61、CR-60、CR-61グリッドで検出調査した。検出面で  $8 \times 3$  cm の角礫 1 点の出土がある。平面形は  $58 \times 54$  cm の円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ 17 cm の舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴18 (第 9・12・13図)

尾根上のCQ-61グリッドで検出調査した。平面形は  $72 \times 64$  cm の円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ 14.5 cm の舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴19 (第 9・12・13図)

尾根上のCP-60グリッドで検出調査した。平面形は  $66 \times 64$  cm の円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで、底面はやや丸みを持ち深さ 20.5 cm を計る。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴20 (第 9・12・14・17図)

尾根上のCL-58グリッドで検出調査した。平面形は  $94 \times 70$  cm の楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで、底面は平で深さ 22 cm である。

遺物は土器と石器がある。土器は小破片 17 図 2 の条痕文織維土器 1 点で、帰属時期を明確にすることはできなかった。石器は図示していないが、黒曜石の剥片 1 点がある。

#### 小豊穴21 (第 9・12・14図)

尾根上のCL-57、CL-58グリッドで検出調査した。平面形は  $66 \times 58$  cm の円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ 6.5 cm を計るが、北壁際には径 10 cm の穴が穿たれている。この小穴は深く検出面から 57 cm を計る。

遺物は小破片で図示しないが 3 点ある。無文土器で帰属時期を明確にすることはできなかつ

た。

#### 小豊穴22 (第9・12・14図)

尾根上のCK-57、CK-58グリッドで検出調査した。平面形は82×48cmの楕円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで、底面は平で深さ29cmである。

遺物は小破片で図示してないが3点ある。同一個体の無文土器で帰属時期を明確にすることはできなかった。

#### 小豊穴23 (第9・12・14図)

尾根上のCJ-57、CK-57グリッドで検出調査した。平面形は56×54cmの円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ24.5cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴24 (第9・12・14・17図)

尾根上のCK-58グリッドで検出調査した。平面形は38×38cmの円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ14cmを計る。

遺物は土器が1点ある。薄手の小破片17図3で、無文であるが焼成は良好で硬く、縄文土器としてはやや異質に思えるが、ここでは縄文土器と考えておきたい。

#### 小豊穴25 (第9・12・14図)

尾根上のCK-59グリッドで検出調査した。平面形は52×51cmの円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ27cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴26 (第9・12・14図)

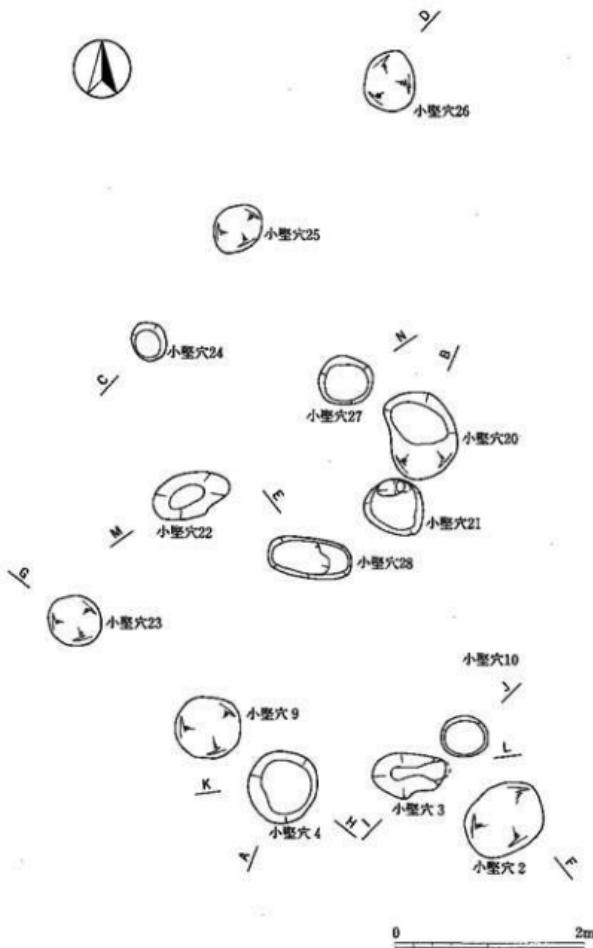
尾根上のCL-60グリッドで検出調査した。平面形は64×52cmの楕円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ20cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

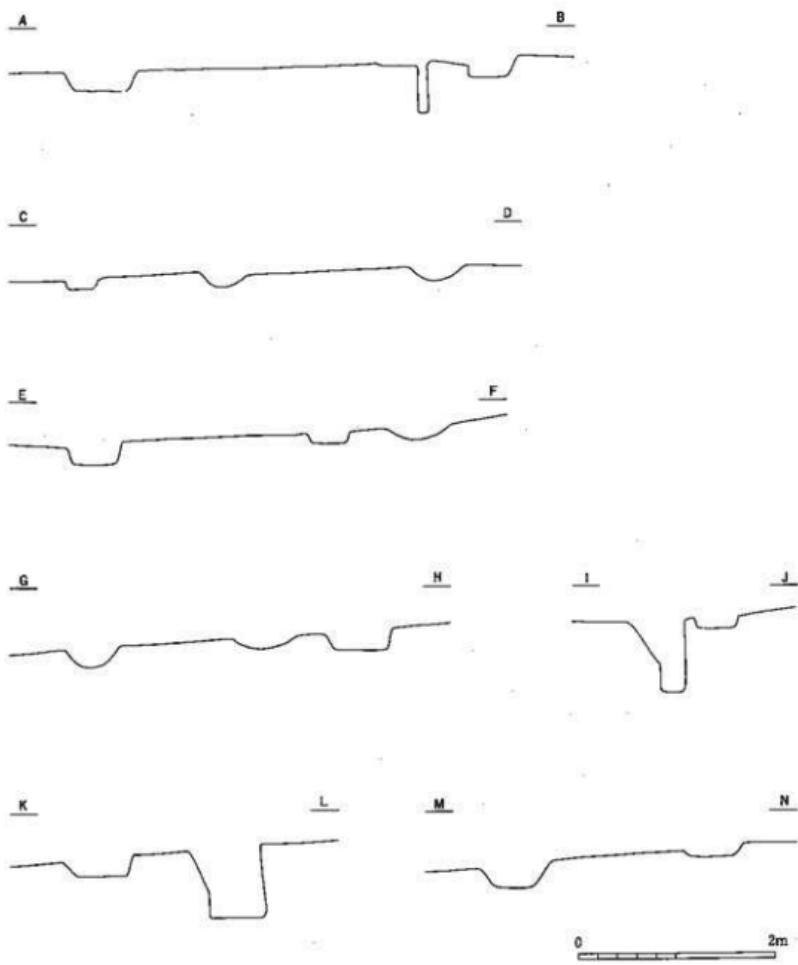
#### 小豊穴27 (第9・12・14図)

尾根上のCL-58グリッドで検出調査した。平面形は58×53cmの円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平であるが深さ12.5cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。



第14図 堤之尾根遺跡小型穴 2～4、9、10、20～28実測図 (1:60)



#### 小豊穴28 (第9・12・14図)

尾根上のCK-57、CL-57グリッドで検出調査した。平面形は90×42cmの楕円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通であるが、底面は二段となり深さは浅い方が10cm、深い方が24cmを計る。

遺物は小破片で図示していないが、縄文土器2点が発見されている。縄文が施されたものと無文の織維土器で、明確な帰属時期を示すことはできない。

#### 小豊穴29 (第9・12・13図)

尾根上のCQ-59、CQ-60グリッドで検出調査した。平面形は80×72cmの不整楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで、底面は平で深さ35cmである。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴30 (第9・12・13図)

尾根上のCP-55、CP-56グリッドで検出調査した。平面形は78×59cmの楕円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ13.5cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴31 (第9・12・15図)

尾根上のCJ-51、CJ-52、CK-51、CK-52グリッドで検出調査した。当初は集石と考え調査を進めたことでもわかるように、検出面に20数個の礫が集中していた。それらの礫は10×10cm前後の大ささであった。礫の在り方は平面的なものではなく、凸レンズ状に集石されていたが、小豊穴の埋土には僅かに炭化物が混じっていたが、礫と礫の間から炭化物や焼土は一切認められなかった。したがって縄文早期に見られる集石炉ではないことから、集石を伴う小豊穴である。しかし、その性格を究明することはできなかった。平面形は128×108cmのダルマ状を呈する楕円形で、埋土は上層から含炭化物黒色土、黒色土の自然埋没であった。一見したとき2基の小豊穴の重複とも見えるが、上面の集石の状態から1基の小豊穴である。壁は二段に立上り底面までの深さは、浅い方が37cm、深い方が75cmと深い。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴32 (第9・12・15図)

尾根上のCK-51、CK-52、CL-51、CL-52グリッドで検出調査した。平面形は114×94cmの不整楕円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ33cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

### 小豎穴33 (第9・12・15図)

尾根上のCL-50、CL-51グリッドで検出調査した。平面形は $198 \times 86\text{cm}$ の不整楕円形で、埋土は含炭化物黒褐色土の自然埋没であった。埋土は同じであったが、3基の小豎穴の重複とも考えられる状態であった。壁はなだらかで底面は平であるが二段となり、この状態からも重複は考えられることであった。深さは浅い方が $8\text{cm}$ 、深い方が $31\text{cm}$ を計る。3基の小豎穴の重複とも考えられる状態であったが、ここでは埋土が同じであったことを重視し一つの小豎穴と考えておきたい。

遺物は図示していないが縦文土器が1点ある。口縁部の小破片で太い確りした沈線文が施されている。繊維の混入はみえない。

### 小豎穴34 (第9・12・15図)

尾根上のCM-52で検出調査した。検出面で原石（石器）と思われる玢岩1点が出土した。平面形は $122 \times (102)\text{cm}$ の楕円形で、埋土は含炭化物黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は二段となり深さは浅い方が $10\text{cm}$ 、深い方は $22\text{cm}$ である。

遺物は図示していないが土器と石器がある。土器は撚糸文が施された繊維土器の小破片で、明確な帰属時期を示すことはできない。石器は玢岩（？）1点で、稜線上には僅かな磨耗が認められ使用されている可能性が高い。

### 小豎穴35 (第9・12・15図)

尾根上のCN-52、CN-53グリッドで検出調査した。検出面で $3 \times 6\text{cm}$ の礫1点の出土がある。平面形は $86 \times 68\text{cm}$ の楕円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平であるが深さ $19\text{cm}$ と浅い。

遺物の発見は皆無である。

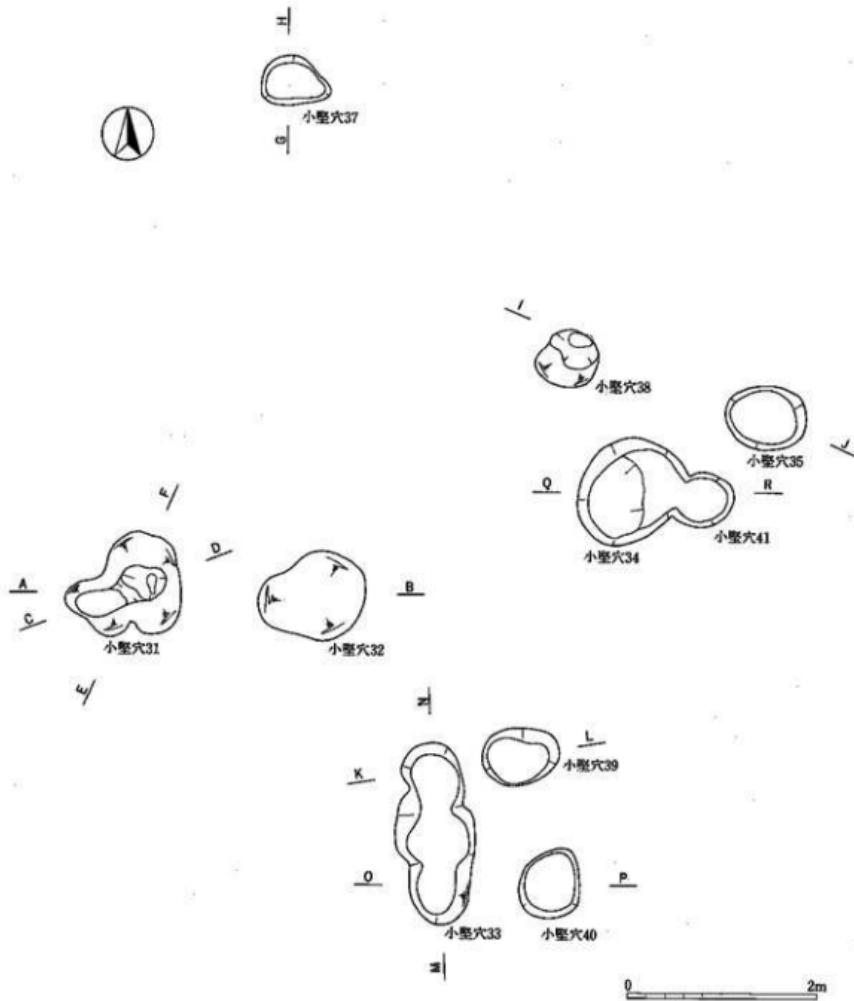
### 小豎穴36 (第9・12・13図)

尾根上のCO-56グリッドで検出調査した。検出面には7個の礫が集石していたが、礫と礫の間からは炭化物や焼土は一切認められなかった。したがって、小豎穴31より規模が小さいが、本址も集石を伴う小豎穴となろう。平面形は $30 \times 20\text{cm}$ の楕円形で、埋土は褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはほぼ垂直となるが深さ $10.5\text{cm}$ と浅い。

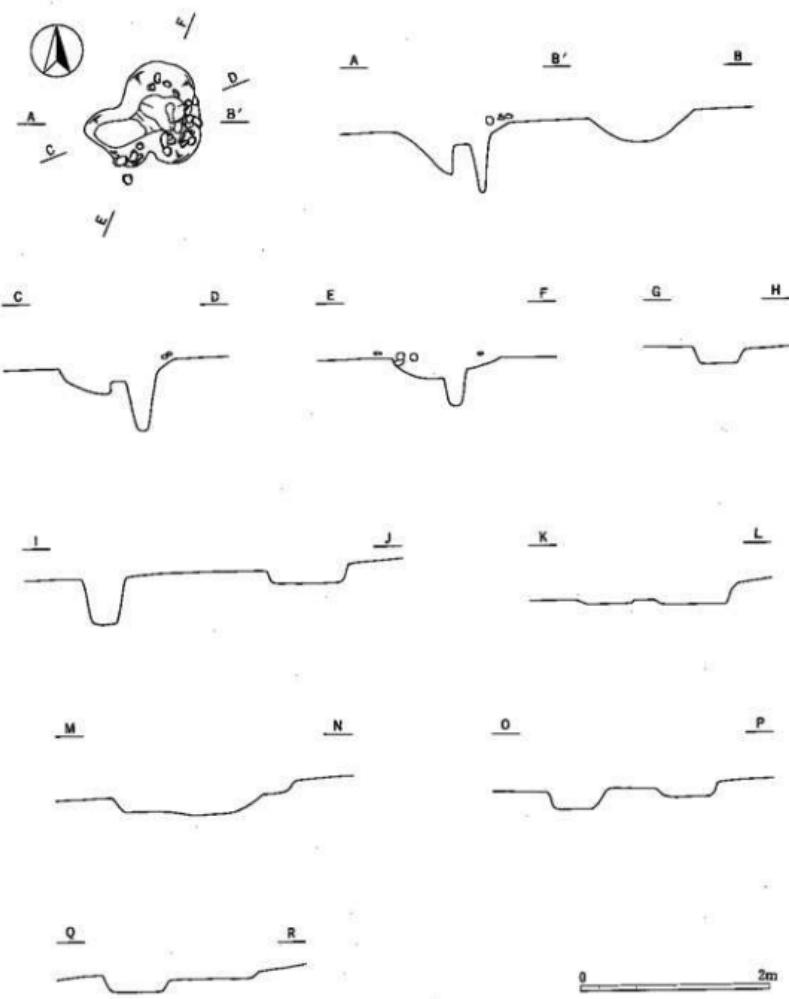
遺物は小破片で図示していないが、楕円押型文土器が1点ある。

### 小豎穴37 (第9・12・15図)

尾根上のCK-54、CK-55、CL-54グリッドで検出調査した。平面形は $74 \times 54\text{cm}$ の不整楕円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁立上りは普通で、底は平で深さ $22\text{cm}$ である。



第15圖 塚之尾根遺跡小堅穴31~35、37~41実測図 (1 : 60)



#### 小豊穴38 (第9・12・15図)

尾根上のCM-53グリッドで検出調査した。平面形は68×62cmの円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは南壁はなだらかであるが、北壁はほぼ垂直となり一部袋状となる箇所もある。底面は平で深さ48cmである。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴39 (第9・12・15図)

尾根上のCL-51、CM-51グリッドで検出調査した。平面形は82×62cmの楕円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平で深さ20cmである。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴40 (第9・12・15図)

尾根上のCM-50グリッドで検出調査した。平面形は70×66cmの円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没である。壁の立上りは普通で、底面は平となるが深さ13cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豊穴41 (第9・12・15図)

尾根上のCM-52、CN-52グリッドで検出調査した。小豊穴34と重複するが本址の方が旧い。平面形は(60)×60cmの円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面は平となるが深さ8cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

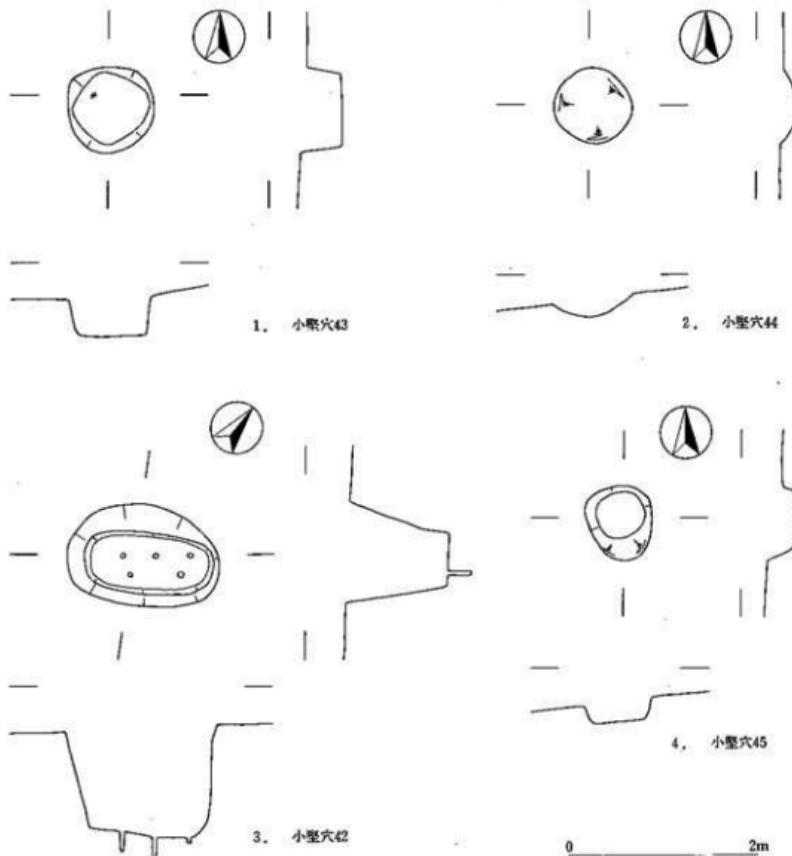
#### 小豊穴42 (第9・16・17図)

尾根上のCD-53、CE-53グリッドで検出調査した(第16図3)。平面形は162×108cmの楕円形で、埋土の堆積はレンズ状となり、検出面は擾乱が著しかったが黒色土で、下層にいくにしたがい壁土が落下したと思われるロームの塊と粒が多量に混入していた。その状態から本址は自然埋没したものである。なお、床面近くの10cm位は、壁ハードロームとはまったく違質の黄みをおびた粘土質のロームの堆積がみられた。調査当初は粘土質のローム上を底面と見誤った位に平坦であった。このことは、この陥し穴は底面の時、粘土質のロームの時の2時期にわたっているのかもしれない。

壁の立上りは底から19~28cmはほぼ垂直でしっかりしているが、それより上はスリット状となり、壁土の落下は著しいようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。深さは118.5cmと深く、床面は平ではほぼ水平となるが、円形の小穴がほぼ垂直に5個穿たれている。それは径が6.5cmで深さが20cm、径が5cmで深さが24cm、径が5.5cmで深さが

6cm、径が5cmで深さが24cm、径が5cmで深さが22.5cmを計るものである。小穴は20cm以上と深いものが4個あり、陥し穴として有効に機能させるために、仕掛け用の竹や棒（槍）をさしたものであろう。なお、小穴は黄みをおびた粘土質のローム上面ですでに確認できた。

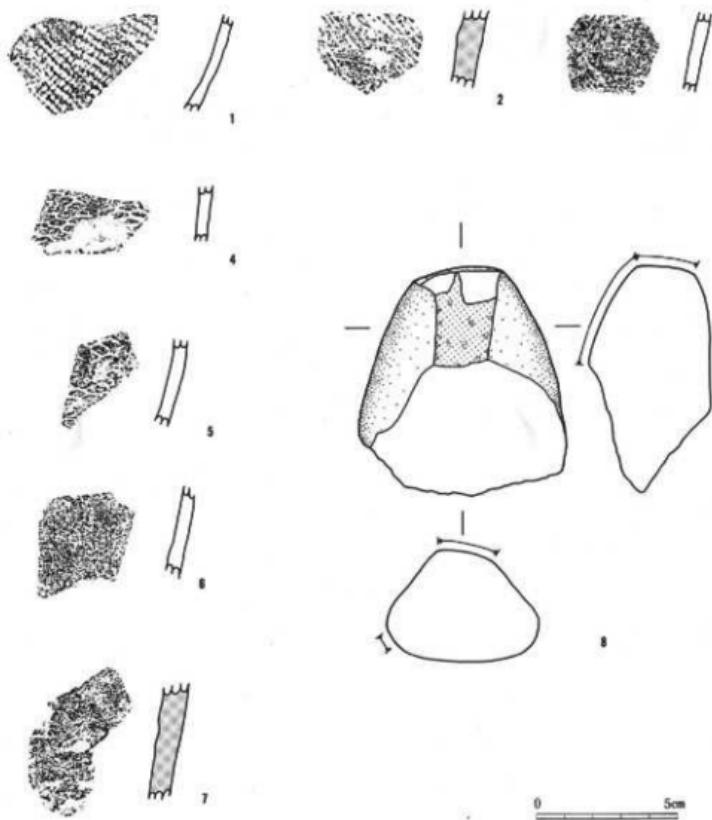
遺物は土器と石器がある。土器は小破片ばかり6点で、17図4・5の2点は薄手の楕円押型土器で、同一個体の破片であろう。6は薄手の無文土器、7は無文の繊維土器、図示していない2点は無文の同一個体と思われるものである。石器は図示していないが、黒曜石の剥片2点がある。これらの遺物は埋土中からの発見で、本址に伴うものではなく、埋没途上で流れ込んだものと考えておきたい。



第16図 堤之尾根遺跡小堅穴42~45実測図 (1:60)

**小豎穴43 (第9・12・16図)**

尾根上のBQ-49、BQ-50グリッドで検出調査した(第16図1)。ここは、平安時代の1号住居址と4号住居址のはば中間に位置し、C地区で検出した小豎穴とは性格は違うようである。平面形は92×90cmの円形で、埋土の堆積はレンズ状の自然埋没であった。検出面は黒色土、その下層は含ローム褐色土で、底面の北西よりの6×10cmの範囲に焼土が認められた。壁の立上りはほぼ垂直で、底面は平ではなく水平となり、深さは43.5cmを計るしっかりしたものである。焼土の在り方からみて、本小豎穴内で火がたかれたことは事実であるが、その性格については不明である。



第17図 堤之尾根遺跡小豎穴出土土器拓影と石器実測図 (1:2)

遺物の発見は皆無である。

#### 小豎穴44 (第9・12・16図)

尾根上のCF-56、CF-57、CG-56、CG-57グリッドで検出調査した(第16図2)。平面形は82×82cmの円形で、埋土は含炭化物黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで深さ24cmの舟底状である。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豎穴45 (第9・16図)

尾根上のBS-51、BS-52グリッドで検出調査した(第16図4)。平安時代の1号住居址と4号住居址の間に位置し、C地区で検出調査した小豎穴とは性格が違うようである。平面形は82×72cmの楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没であった。壁の立上りは普通で、底面はほぼ平で深さ24cmである。なお、この近から繩文後期初頭の土器破片が出土している。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豎穴46 (第9・12・38図)

尾根上のBV-50、BV-51グリッドで平安時代の4号住居址と重複して検出されたが、本址の方が扱い。検出面で9×8cmの礫1点の出土がある。平面形は(106)×102cmの不整楕円形である。壁は底部近くはほぼ垂直に立上り、それより上はスリ鉢状となる。底面は平で深さ19.5cmである。

遺物は図示していないが土器と石器がある。土器は繩文土器の小破片2点で、無文のものと絹条体圧痕文が施されたもので、明確な帰属時期を示すことはできない。石器は黒曜石の剥片2点である。

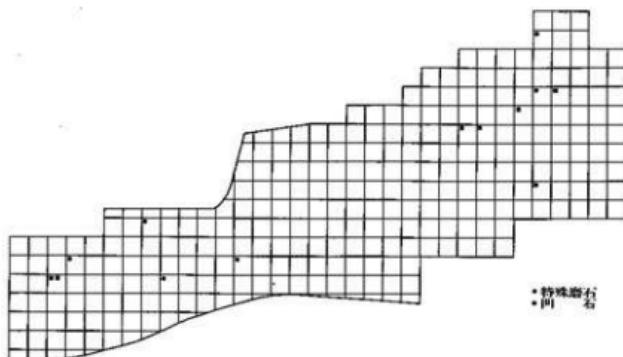
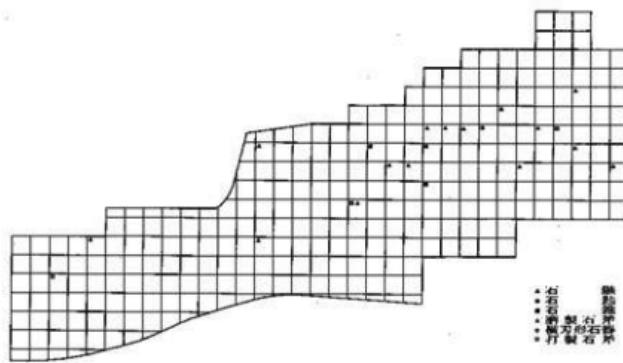
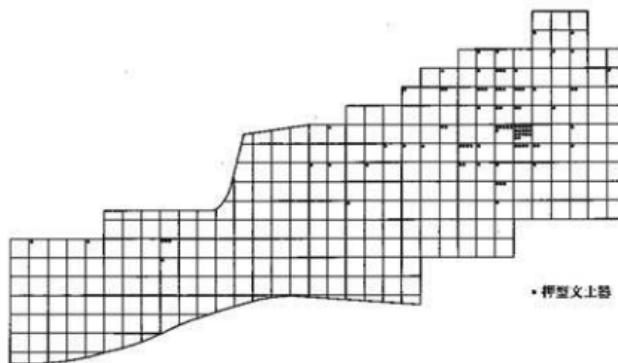
#### 小豎穴47 (第9・12・13図)

尾根上のCP-60グリッドで検出調査した。平面形は30×26cmの円形で、埋土は黒褐色土の自然埋没であった。壁の立上りはなだらかで、底面は平で深さ48.5cmを計る。柱穴状の小豎穴で、本址に接する状態で大きな礫の発見がある。礫と本址が無縁とは思えないが、性格を明確にすることはできなかった。

遺物の発見は皆無である。

#### 小豎穴48 (第9・12・13図)

尾根上のCQ-58グリッドで検出調査したが、ロームマウンドと重複していて不明瞭なため、ロームを掘り下げての検出であった。平面形は29×19cmの楕円形で、埋土は黒色土の自然埋没であったが、礫が小豎穴の壁際に落ち込んだような状態で発見されている。礫と礫の間から炭化物や焼



第18図 堤之尾根遺跡グリッド別遺物出土状況図

土は一切認められなかった。壁の立上りはなだらかで、底面は丸くなり深さ30cmである。

遺物の発見は皆無である。

(平出・平林)

#### (4) 遺構外出土の遺物 (第19~32図)

遺構に伴わない縄文時代の遺物は、土器と石器がある。

土器はそれほど多くないが、早期、前期、後期に大別できる。早期の土器は押型文系と条痕文系と絡条体圧痕文系の土器があり、土層のところで記載したように、層位的に把握できたものではなく、明確な帰属時期を示すことはできない。

石器もそれほど多くないが、凹石、磨石(特殊磨石)、打製石斧、磨製石斧、石匙、石錐、石鎌などがあり、やはり帰属時期については不明である。若干説明を加え紹介したい。

#### 縄文時代早期の土器 (第19~23図)

##### 押型文土器

押型文の施された破片の総数は86片、内訳は山形文26、楕円文60であるが、拓影を採集できない小破片が多く、図示できたのは43片にとどまる。無文土器の中に帶状構成の無文破片を若干認めるが、微々たる点数なので除外した。

なお、表の記述項目と内容は、塩尻市向陽台遺跡(『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年 塩尻市教育委員会)と準じている。

##### 山形文土器 (第19図)

山形文は、最も一般な比較的小さな山形のもの(山形文1)と、やや大ぶりな、山の高さが大きく、陽部(凸部)の巾の広いもの(山形文2)に大別される。現体を復原できるものは少なく、刻みの単位が明確にわかる例は1と2で、1は2単位で1周し、条数は6条1原体、径3.9mm、長さ20.9mmとみられる。端部処理も明確なものが少ないが、全体に谷部が丸味をもち、頂部の角張るさざなみ状ないし波状のものである。

文様構成は、小さな破片ばかりで接合もしないため全体を復原することは無理である。施文方向からある程度推定すると、横位帯状施文の7片(1~7)の他は、大半が縦位密接施文であり、他に異方向密接施文(9)は1片あるだけである。横位密接施文がたいへん少ないとから、横位密接構成(口縁部に1~2帯の無文帯をもち胴部以下密接施文—G種)が少なく、異方向密接構成(口縁部横位帯状、胴部以下縦位密接施文—D種、あるいは口縁部を横位密接、胴部以下縦位密接—F種)であるかもしれない。口縁部破片は横位帯状施文が多く、逆に胴部破片は縦位施文が多いが、同一個体と断定できるものが少ないため、もう一つ明確にできない。

胎土は比較的緻密で堅く、器肉も薄手であるが、含有物が多いことはやや異質であろうか。胎土に黒鉛を含むものはない。口縁部の刻み目(1)も特異な例といってよいか。2の口唇部は原

体端部の押圧であるかもしれない。

なお、2と8、3と4、10と14、18と19はそれぞれ同一個体破片の可能性がある。

### 橢円文土器（第20図）

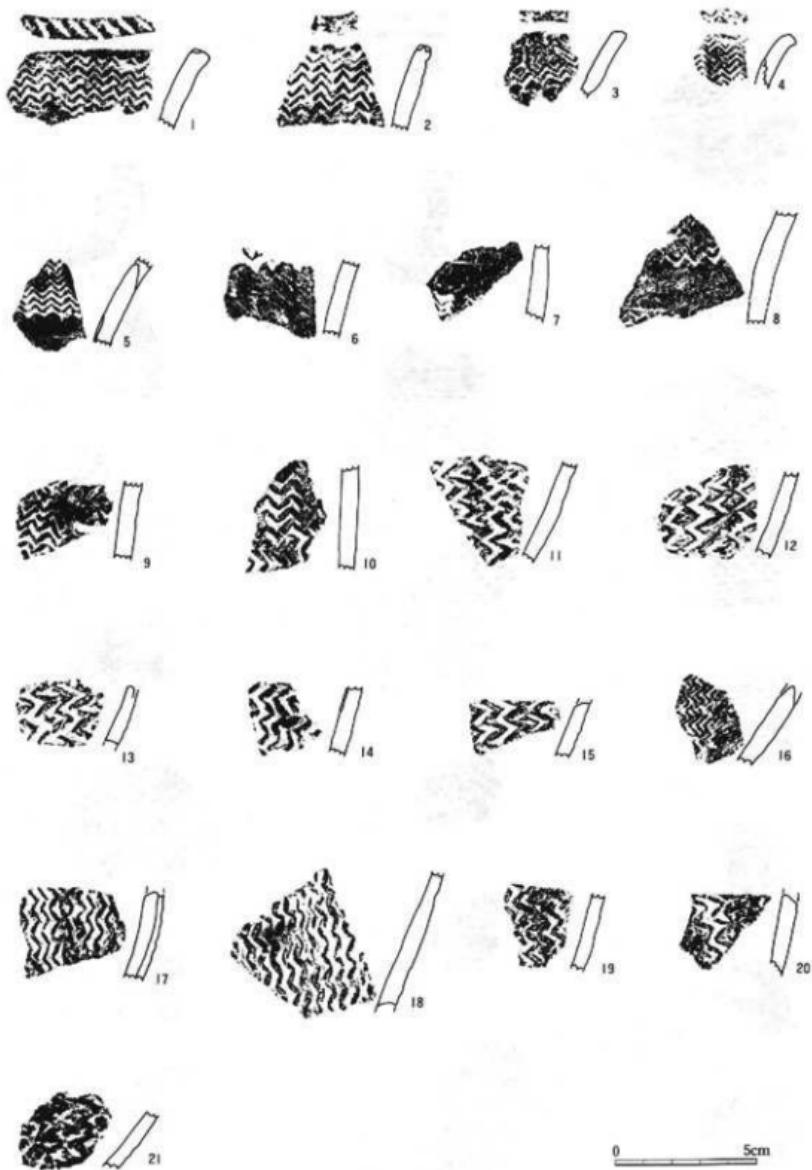
橢円文は、不連続の比較的小さな穀粒状の陽部（凹部）が斜め及び横に並ぶもの（橢円文1）が大部分である。陽部が円形に近い例が1点だけである（44）が、円形の大きな陽部がやや間隔を広く並ぶもの（橢円文2）とは若干異なるようである。

橢円文の場合は、帯状施文のものを除くと、原体の端部、長さ、太さ（文様の繰り返しから計測）が見極めにくいか、本資料も例外ではなく、これらが明瞭なものは少ない。22~30片から得られた原体は、径3.6mm、長さ26mm、端部は波形であろうか。22~35までは原体がよく似ている。同一個体破片の可能性が強い。37~43はこれに対しやや陽部が大きく、原体径も太いようである。

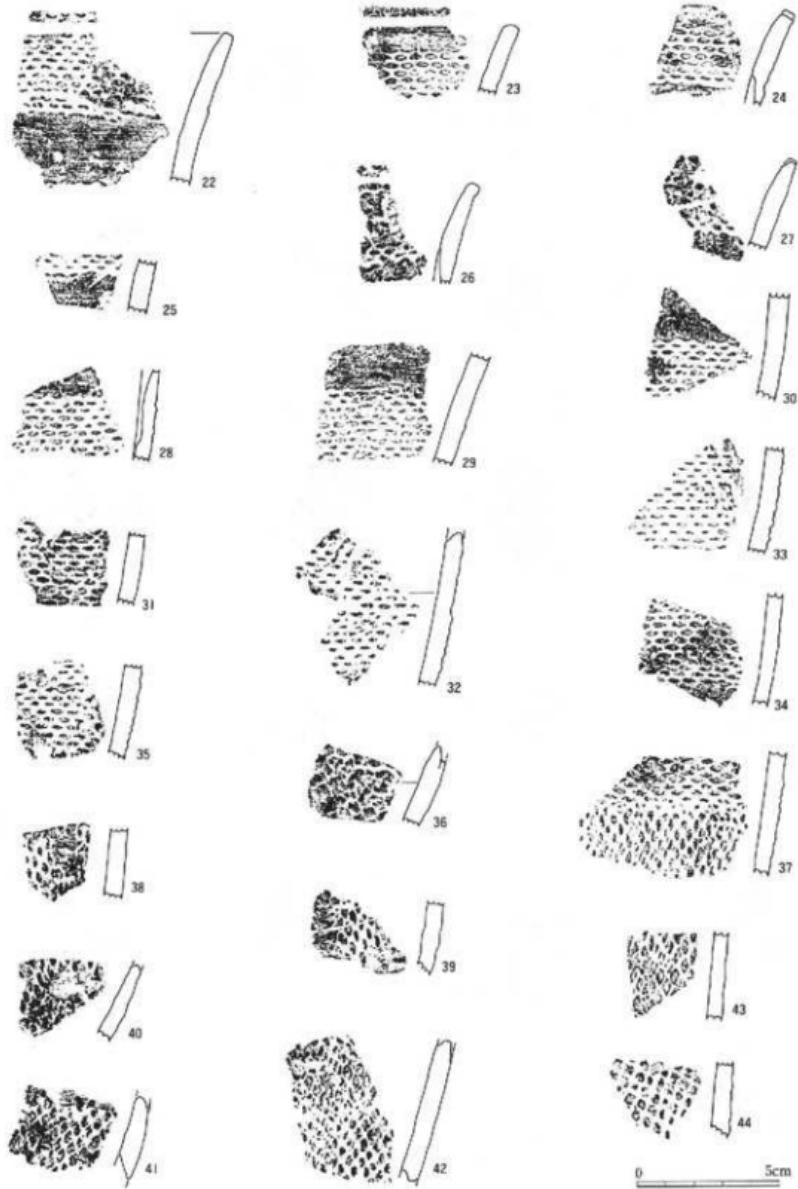
文様構成は、山形文同様に全体を復原するまでにいたらないが、施文方向からみると、横位帶状（22~30）、縦位帶状（38・39）、縦位密接（36・40~44）、異方向密接（37）施文の破片があ

第3表 山形文土器観察表

No.	層位	分類	形数	単位	原体径・長さ	端部	文様	文様構成	口巻	筋土	蓋形	遺物 No.	部位	考
1	山形文	6	2	3.9~20.9	2(2)	山1	C	2	2(2)	1~2	81.CM-57	口縁部	内面アバサ法で窓型タイプに似る筋土 口唇剥離有り	
2	山形文		2	4.7	2(2)	山1		1	2(1)	1~2	81.CR-61	口縁部	原体縁部の押圧から口唇部	
3	山形文				2(2)	山1			2(3)	1~1	81.CP-61	口縁部	筋土もろい 口唇部施文	
4	山形文	(8)	(2)	(3.9)	2(2)	山1	C	1	2(3)	1~2	81.CR-58	口縁部	蓋母とくに多い 3と同一個体か	
5	山形文	(6)	(2)	(3.9)	2(2)	山1	C	1	2(3)	1~2	81.CP-58	(口縁部)		
6	山形文				1(1)	山1	C		2(2)	1~1	81.BU-56	頭部	筋土良好	
7	山形文				2(1)	山1	C		2(2)	1~1	81.CN-53	頭部	筋土は多くに近似(蓋母多い) 蓋形と同じ	
8	山形文				2(1)	山1	C		2(1)	1~2	81.CN-57	頭部	含有的多く 内面は粒子がザラザラ	
9	山形文					山1			2(2)	1~2	81.CQ-57	頭部	1の筋土似る	
10	山形文					山2	DまたはF		2(2)	1~1	81.BU-56	頭部	筋土良好 山形の形状は山1と同じ やや大ぶり	
11	山形文					山2	DまたはF		2(2)	1~1	81.CN-59	頭部		
12	山形文					山2	DまたはF		2(2)	1~1	81.CO-58	頭部	筋土良好	
13	山形文					山2	DまたはF		2(2)	1~1	81.CN-59	頭部	内面に炭化物付着 同一個体か?	
14	山形文					山2	DまたはF		2(2)	1~1	81.BU-56	頭部		
15	山形文					山2	DまたはF		2(2)	1~1	81.CO-59	頭部		
16	山形文					山1	DまたはF		2(2)	1~1	81.CT-59	頭部	4~5に近似する	
17	山形文				4?	山1	DまたはF		2(2)	1~1	81.BQ-50	頭部	筋土良好 蓋母多量に含み 脂土上4~5に似る	
18	山形文	2	5.7			山1	DまたはF		2(1)	1~2	81.BE-	頭部	筋土良好 内面粒子が出てザラザラ 凹凸密しない	
19	山形文					山1	C?		2(2)	1~1	81.CF-52	頭部	筋土ややもろい 4~5に似る 蓋母多い 同一個体か?	
20	山形文					山1	C?		2(3)	1~1	81.BR-58	頭部		
21	山形文								2(2)	1~1	81.CE-56	頭下部	筋土に大きな粒子有り(石灰)	



第19図 堤之尾根遺跡遺構外出土繩文早期土器拓影 (1) (1 : 2)



第20図 堤之尾根遺跡遺構外出土繩文早期上器拓影 (2) (1 : 2)

る。これと器形を合わせて考えると、密接施文の破片は胴部位のものが大半であり、逆に横位帯状施文の破片は口縁部位である。したがって、文様構成は横位帯状構成（G種）が主体となり、その他に異方向密接構成（D種）であると考えられるが、この少ない点数では明確に言及することは無理である。38・39は縦位帯状施文であるが、これだけの小破片では異方向帯状構成ということはできない。

胎土は、山形文に共通する雲母の微粉を多量に含むものがいくつもあり、色調もよく似ているが、楕円文の方がやや含有物が少なく、内面の整形具合をみると楕円文の胎土の方が緻密である。

口縁端部は施文されるが、それによる肥大化はみられない。

本遺跡の押彫文土器は、黒鉛を含むものは全く認められず、異方向帯状構成もないし、山形文の原体が比較的長いなど、樋沢式土器の範疇にないことは明白である。楕円文土器は横位密接構成（口縁部帯状施文）の所謂細久保式土器に比定されるものが多い。山形文の一部も横位帯状施文の一群はそれにふくまれるであろうが、横位密接施文の破片が少ない点は注意されよう。楕円文にやや胴部破片の縦位密接施文が多いことと口縁部に施文することは、特徴的なこととして記憶しておきたい。また、胎土に雲母や石英などの含有物が多く含まれる点や、内面のザラザラ、口唇部の刻み目なども、本資料の位置付けには見落とせない点である。

山形文に、胴部位の縦位施文が多いが、これは樋沢遺跡でも指摘されたことと共通する。

第4表 楕円文土器観察表

No.	層位	分類	条数	単位	原体径・長さ	破部	文様	大標識式	口唇	胎土	整形	遺物 No.	部位	備考
1	楕円文		2	3.6		2(2)	横1	C	1	2(2)	1・1	81.CO-56	口縁部	無文部に横ナジ形彫のこる山形文の中にれた胎土なし
2	楕円文					2(2)	横1	C	1	2(2)	1・1	81.CO-56	口縁部	口唇施文
3	楕円文					2(2)	横1	C	1	2(2)	1・1	81.CO-56	口縁部	同一個体か
4	楕円文					2(2)	横1	C	1	2(2)	1・1	81.CP-56	口縫部	
5	楕円文					2(2)	横1	C	1	2(2)	1・1	81.CP-55	口縫部	
6	楕円文					2(2)	横1	C	2(2)	1・1	81.CN-38	頭部	無文部横ナジ形彫残る	
7	楕円文					2(2)	横1	C	2(2)	1・1	81.CN-56	頭部		
8	楕円文					横1	C	2(2)	1・1	81.CO-56	頭部	1~5と同一個体か		
9	楕円文					2(2)	横1	C	2(2)	1・1	81.CO-56	頭部		
10	楕円文					横1		DorF	2(1)	1・1	81.CO-56	頭部	透明の粒子多い	
11	楕円文					横1			2(1)	1・1	81.CO-56	頭部	透明の粒子多い	
12	楕円文					横1			2(2)	1・1	81.CN-49	頭部	透明の粒子多い	
13	楕円文					横1			2(2)	1・1	81.CO-56	頭部	内面変化物多量に付着	
14	楕円文					横1			2(1)	1・1	81.CO-56	頭部	透明の粒子多い	
15	楕円文					横2			2(2)	1・1	81.BN-50	頭部		
16	楕円文					2(2)	横1	DorF	2(2)	1・1	81.CO-57	頭部	事跡微粉多量 胎土良好	
17	楕円文					横1			2(2)	1・1	81.CR-60	頭部		
18	楕円文					後1	C?		2(2)	1・1	81.CM-58	頭部	外表面化物付着	
19	楕円文					横1			2(2)	1・1	81.CP-54	頭部	雲母微粉多量 16に近似する	
20	楕円文					横1			2(2)	1・2	81.CO-58	頭部	胎土良好 内面アバタ状	
21	楕円文					横1			2(2)	1・1	81.CN-56	頭部	内面変化物付着	
22	楕円文					横1			2(2)	1・1	81.CN-53	頭部		
23	楕円文					横3			2(1)	1・1	81.CN-58	頭部		

全体に個体数が少なくまとまった資料であり、文様構成やその変遷を知る上では、今後よい参考になると思われるが、惜しむらくは量が少なく、かつ接合資料が少ないため、断定的に言えないことは残念である。しかし、八ヶ岳山麓にも、良好な該期資料が見つかった意義は大きく、今後の周辺の調査に期待すること大であり、一層の慎重な遺物検出が望まれる。 (会田)

#### 条痕文系と絡条体圧痕文系土器 (第21~23図)

早期末葉の条痕文・絡条体圧痕文を中心とする土器破片は、器厚は比較的厚く胎土には多量の纖維を含むものが大多数をしめているが、拓影を採集できない小破片が多く、図示できたものは60片にとどまる。

口縁部破片は4点あるだけで、底部破片は1点もなく、器形および文様構成の把握は困難なため、施文原体や胎土に重点をおき、とりあえず文様を系統別に分けてみた。しかし、小破片でありながら、〔無文+撚糸文+絡条体圧痕〕、〔撚糸文+絡条体圧痕〕、〔沈線文+絡条体圧痕〕などその組合せは多種多様である。

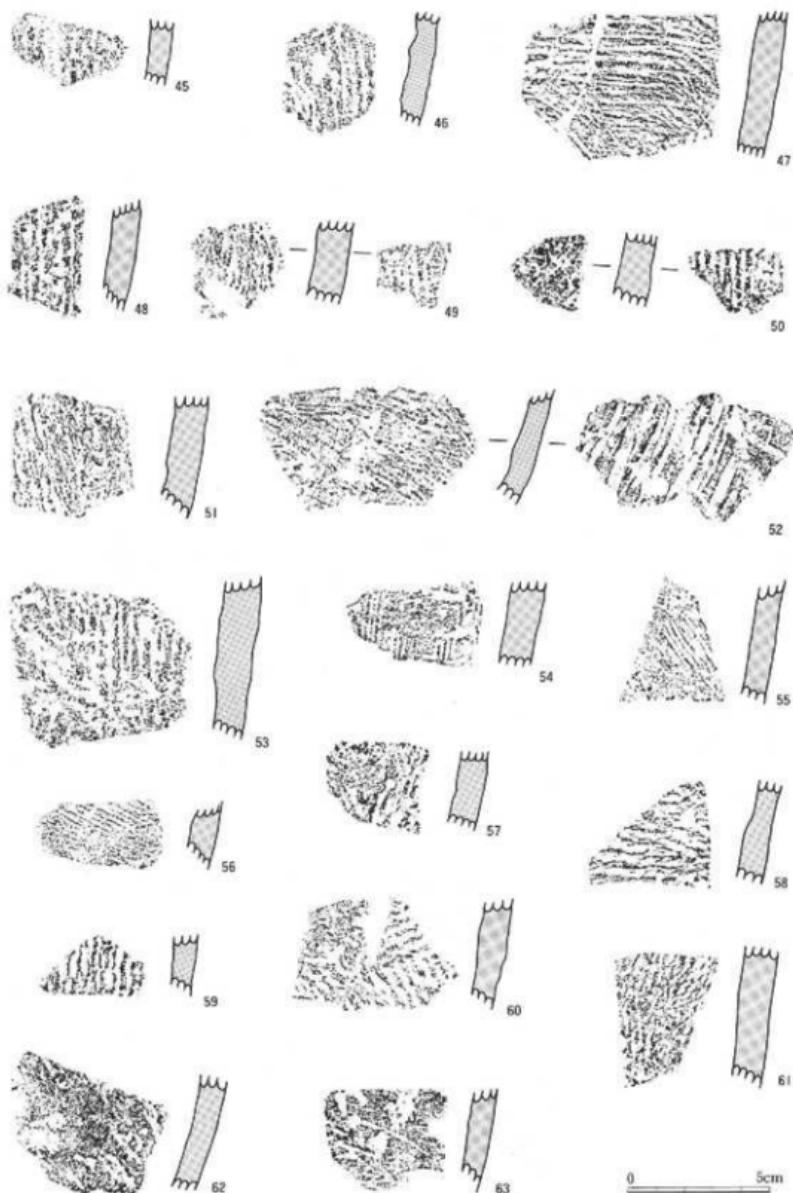
器面に条痕が施されたものは、条痕の明瞭な貝殻条痕(47・52・54・56)と、雑で不明瞭な絡条体圧痕(45・46・48~51・53・55・58~63)に分けられるが、そのほとんどが絡条体圧痕であり貝殻条痕は少ない。高風呂遺跡では「条痕を詳細にみると条痕内に節状の痕跡が残るものがある。」と、説明している。本遺跡も同様で、絡条体圧痕と撚糸文が区別できないものもある。ここでは条痕の中に撚糸文を包括させたが、58・61は撚糸文が比較的明瞭なものである。条痕の施文方向は、横位、縦位、斜位、それらを組合わせた多種多様のものがみられる。

49・50・52は外面と内面に条痕が施されたもので、52は外面と内面の条痕は異なり施文具が確実に違うものである。

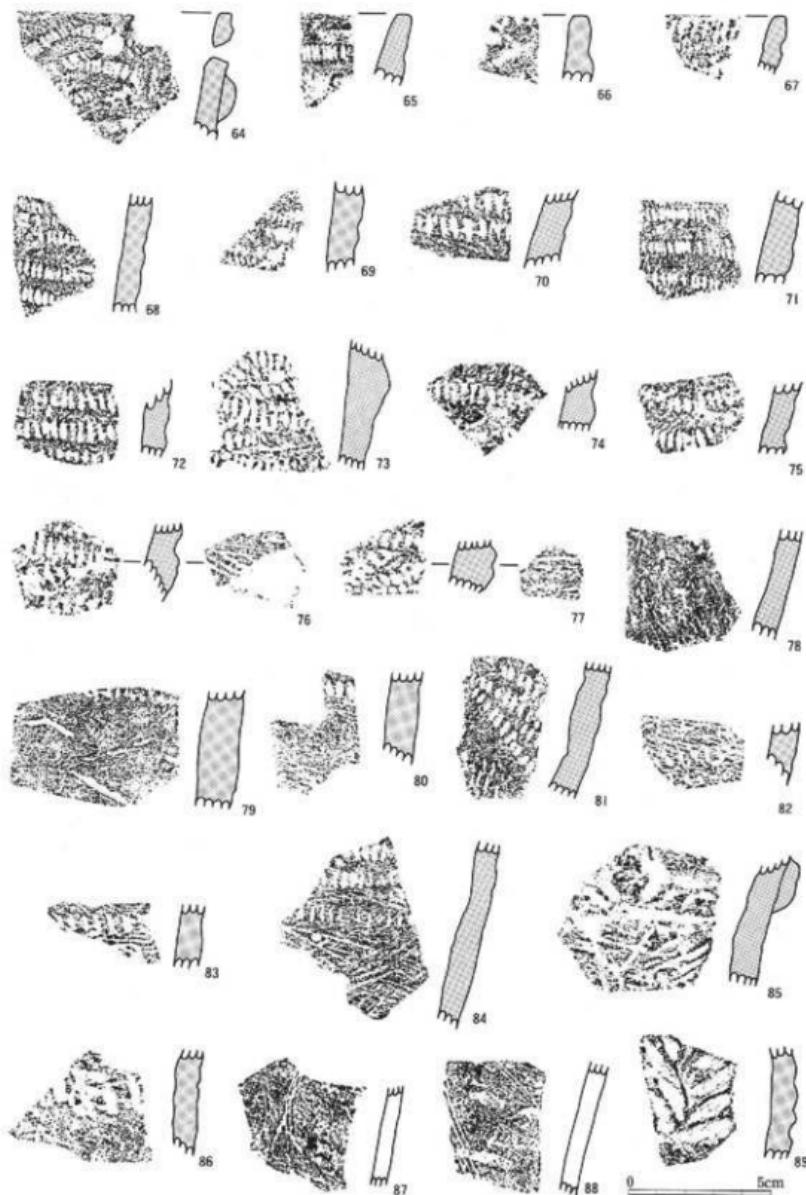
概して石英・長石等の粒子を多量に含む粗い胎土である。62と63は同一個体の破片と思われ、金雲母を混入し纖維の含有量も少ない。内面は荒れているものもあるが、47の内面には指頭圧痕が53には指頭によるナデ痕が残る。

絡条体圧痕文は、無文部分に絡条体圧痕文を施したもの(68~80)、地文に条痕を有し絡条体圧痕文が施文されたもの(81~84)、隆帯が貼付されたもので、隆帯上や隆帯と器面との接合部に絡条体圧痕文が施文されたもの(64・66・73・77)などがあり、絡条体圧痕文の方向は65・67~72・74~80・82~84が横位、81は斜位、64・66・73は孤状となる。65・67・70・74・76・83は絡条体圧痕文の圧が強く沈線状に凹んでいるものである。

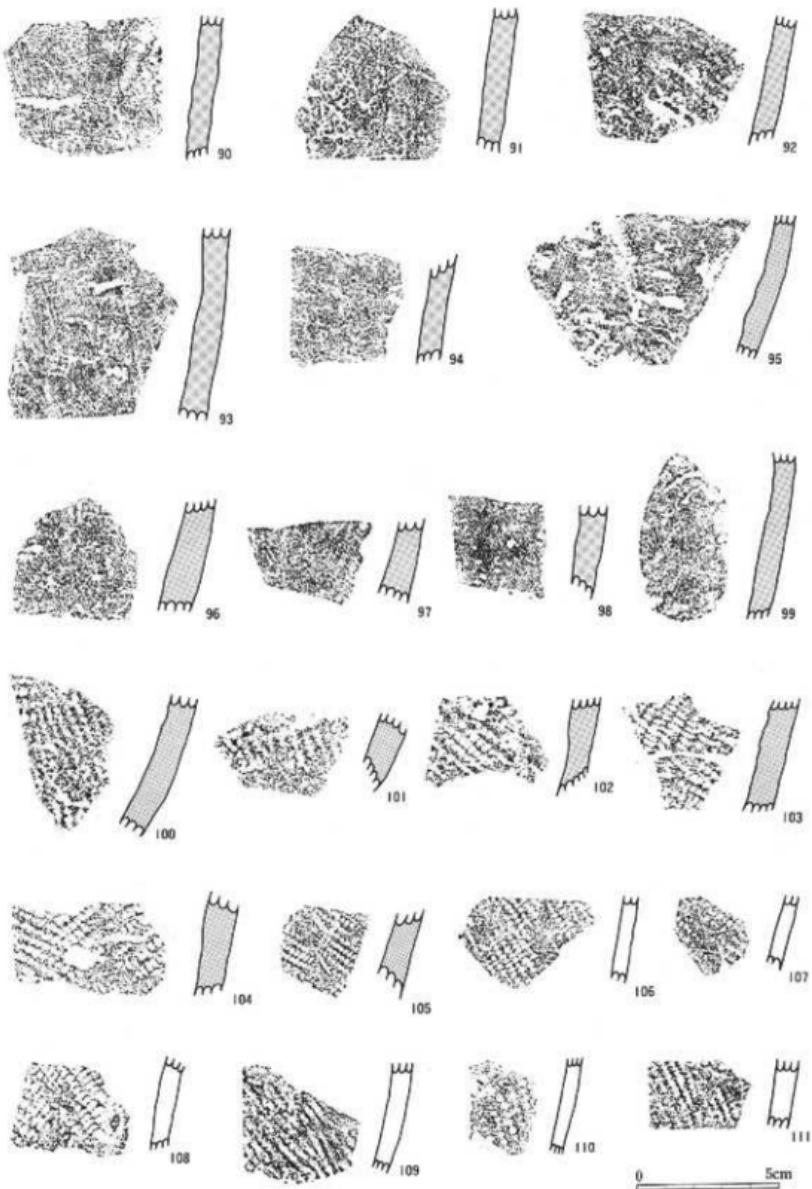
口縁部破片64は、隆帯を貼付し絡条体圧痕文を施文しているが、隆帯と器面の接合部にみられる絡条体圧痕文は孤状となる。高風呂遺跡では、孤状に施文した原体は貝殻腹縁の可能性も述べている。本資料は絡条体圧痕文の重なり合いをみる限り、確実に絡条体が原体であり、重ね合わ



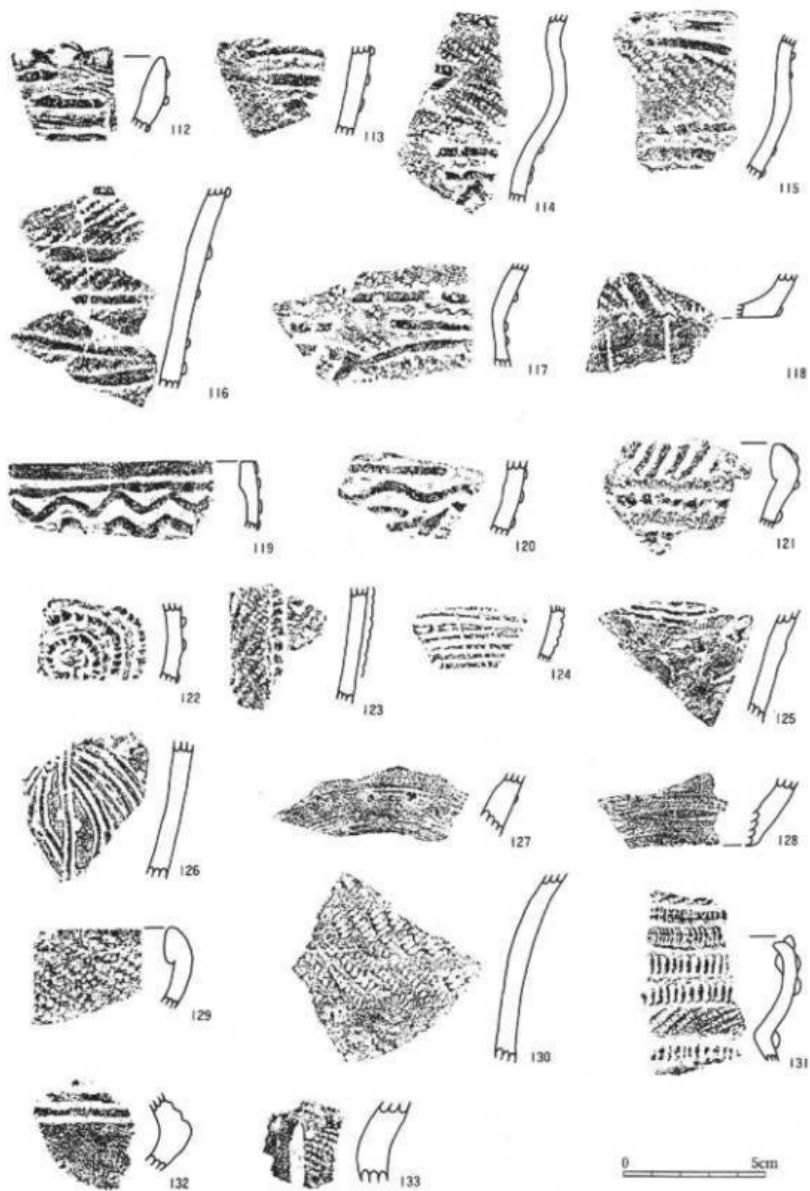
第21図 堤之尾根遺跡遺構外出土網文早期土器拓影 (3) (1 : 2)



第22図 堤之尾根遺跡構外出土縄文早期土器拓影 (4) (1 : 2)



第23図 堤之尾根遺跡遺構外出土縄文早期土器拓影 (5) (1 : 2)



第24図 堤之尾根遺跡遺構外出土繩文前期・中期土器拓影 (1 : 2)

せを繰り返すことで弧状を描きだしている。なお、補修孔が外面側から内面に向かって1個あけられている。やはり口縁部破片67は、口唇直下に幅の狭い連続窪切りを施し、その下に絡条体圧痕文を横位に施文しているが、圧痕が強く沈線状になっている。

内面は荒れているものもあるが、76・77には条痕が施され、84には指頭圧痕が残る。概して石英・長石等の粒子を多量に含む粗い胎土で、64と71は同一個体の破片であろう。

隆帯が貼付された口縁部破片（85）は、地文に絡条体圧痕を有し、隆帶上は棒状工具による押え刻み文が施されたものである。

沈線文（86～89）はそれほど多くないが、86は棒状工具で比較的幅広な沈線文を連続的に施したもの。87と88は棒状工具で沈線文（条線）を施した同一個体の破片で、外面には指頭圧痕が残り僅かではあるが凸凹している。纖維は含まれていないが、胎土・焼成ともに良好で堅い。89は矢羽状の構成で、器厚は薄くなり纖維の含有量は少なく、胎土・焼成ともに良好で堅い東海系の土器である。

無文土器（90～99）は、絡条体圧痕文が施された土器の文様構成の在り方からみると、下脣部の破片と思われる。やはり内面は荒れているものもあるが、91には指頭圧痕が、95には指頭圧痕と指頭によるナデ痕が、90・92・93・98には指頭によるナデ痕が残る。

縄文の施文されたものは、纖維を含むもの（100～105）と含まないもの（106～111）があり、106～111は帰属時期は不明なためここで取り上げた。101と102の内面には指頭によるナデ痕を残す。

#### 縄文時代前期の土器（第24図）

前期末葉の土器破片の発見はそれほど多くない上に、拓影を採集できない小破片もあり、図示できたのは20片である。

ソウメン状貼付文（112～121）は、地文を有するものとそうでないものとがある。112～118は地文に縄文が施されているもので、112は口縁部破片、118の底部には木葉痕がみられる。119と120には地文はなく同一個体の破片で、119は口縁部である。113～117は同一個体の破片であろう。

結節状浮線文（121～123）は、121は「く」の字状に屈折する口縁部破片で、口唇直下にソウメン状貼付が施され、その下に、結節状浮線文が横帶する。122は同心円状の施文であり、123は地文に縄文が施されている。

窪着沈線文（124）は、窪切りの間隔が比較的広い。沈線文（125・126）の、125は調下半が無文となる深鉢の中脣部破片で、126はレンズ状の構図である。

ボタン状凸起文（127）は、ボタン状凸起が小さく、地文に不明瞭な沈線文が施されている。127と128は同一個体の破片であろう。

この他に押圧隆帯文の小破片もある。

移入土器（131）は、西日本に分布をもつ鷹島式系の口縁部破片である。諏訪市千鹿頭社遺跡か

ら類似する完形土器が発見されている。中期初頭に帰属するものかもしれない。  
図示しなかった小破片の中には押圧隆帯文もみられる。

#### 縄文時代中期の土器 (第24図)

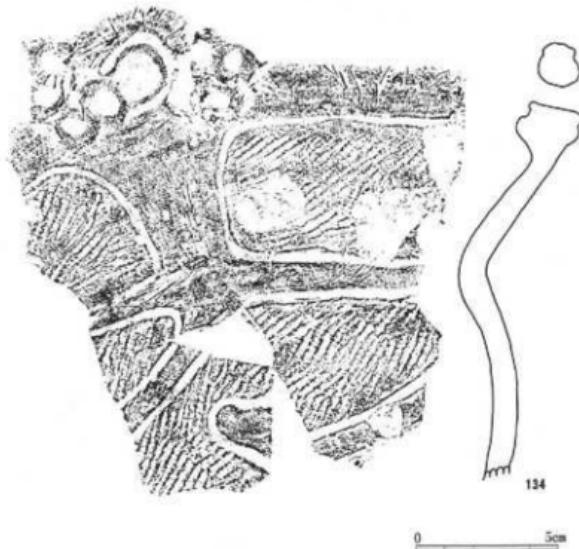
中期の土器は図示した小破片(132・133)2点だけである。132は中葉の屈折底の屈折部分であろうか。133は後葉の胴部破片である。

#### 縄文時代後期の土器 (第25図)

後期の土器は同一個体の破片(134)を発見した。擦り消し縄文が施された深鉢で、接合したものと図示した。BR-51グリッドからの一括出土である。

#### 縄文時代の石器 (第26~32図)

石器は帰属時期を示すことはできないが、石錐15点、石錐2点、石匙2点、敲打器1点、円板状石器1点、磨製石斧1点、打製石斧5点、横刃形石器2点、凹石と擗石17点、礫器1点である。



第25図 堤之尾根遺跡遺構外出土縄文後期土器拓影 (1:2)

石鎌（1～15）は、1・3・4・7・8・10～15の11点が黒曜石、2・5・9の3点がチャート、6が圭質頁岩製である。15は4号住居址から出土した。

黒曜石製の（16・17）は、その形態は石槍状であるが、用途については不明である。

石錐（18・19）は、2点とも黒曜石製で先端を欠損する。

石匙（20・21）も黒曜石製で、21は完形の優品であり20はつまみ部分を欠損する。

円板状石器（23）は、粘板岩の側面に磨滅痕がみられるもので、阿久遺跡で「石器の素材には小形すぎ、研磨痕をもつ例もあり他に用途を考えたい。」と、述べているもので用途は不明である。

磨製石斧（24）は、輝緑凝灰岩製の定角式磨製石斧で刃部側を欠損するが、残存部からみて片刃のものであったと思われる。

打製石斧（25～29）は、全て破損品で25～27は刃部側で、25と27の刃部には磨滅がみえる使用によるものであろう。26は横刃形石器であるかもしれない。28と29は基部側である。石材は25が結晶片岩、26は粘板岩、27は不明で、28は鳴滝石であろうか、29は緑泥片岩である。

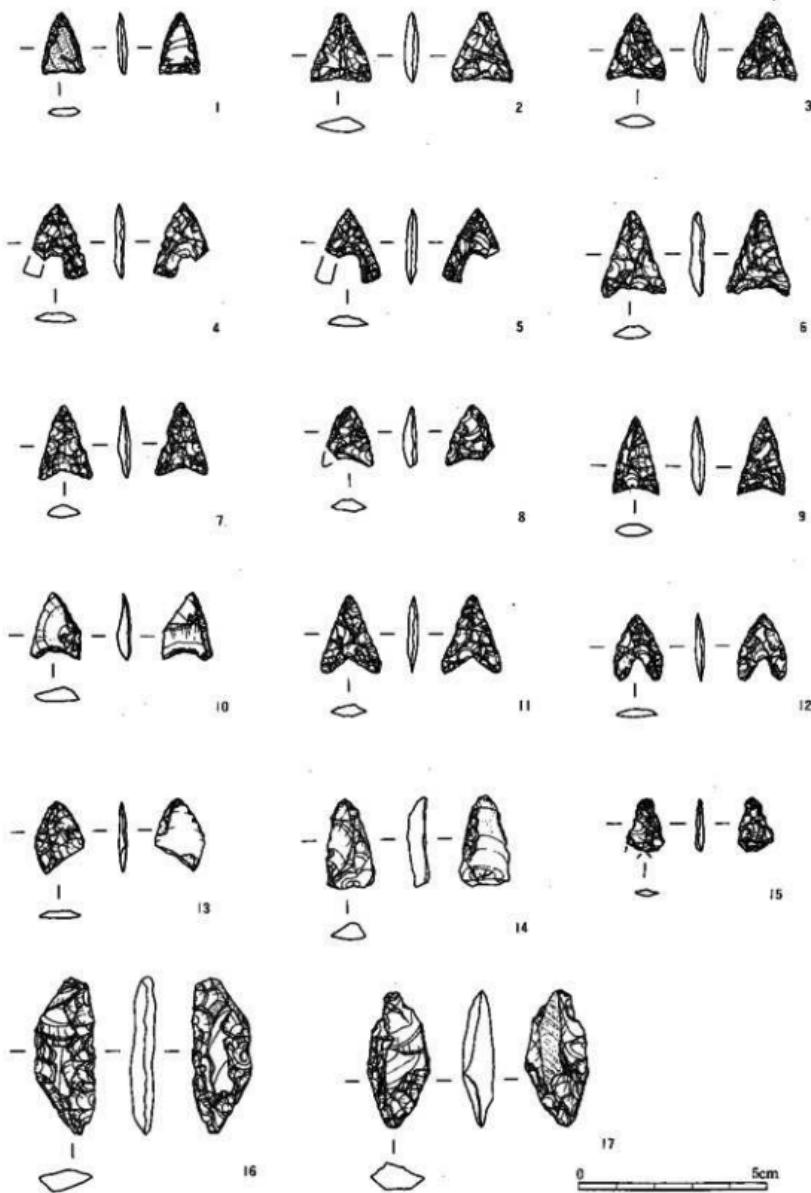
横刃形石器（30・31）は、比較的小形なもので30は硬砂岩で自然面が残り、31は粘板岩である。

凹石・磨石・敲石（22・32～48）は、用途に適した素材（転石）を用い、凹穴・磨耗面や敲打痕を残すものである。それらは作意的に作り出したものではなく、使用の結果生じた痕跡で、その状態によって凹石・磨石（轆摺石・特殊磨石）・敲石に分けられるが單一でなく、中には38・44のように凹穴と磨耗面、36の凹穴と敲打痕、40の磨耗面と敲打痕のように、一つの石器に複数の使用痕を残す併用石器もある。

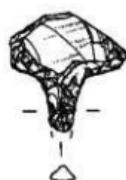
凹石32～36は片手で容易に握ることのできる大きさで、整形されたものは1点もない。凹穴は全て敲打によって生じた痕跡で、32は表面に2穴裏面に3穴、33は片面だけに2穴あり、34と35は表・裏面ともに2穴である。36は破損品で凹穴は広い上に浅く、他に凹穴とは若干違っているもので、いわゆる叩き石として使用されたものであろうか、端部には敲打痕も認められ、敲石としても利用されている。なお、38と44の凹穴も敲打によって生じたものである。

磨石は、磨耗面の違いによって分けることができる。37～39は椿円形の自然石に、広い磨耗面を残すもので、40～48は柱状石の稜線部分または側面に、幅は狭く細長く磨耗面残す「特殊磨石」と呼ばれるものである。40・42・44・46の4点は破損品で、従来より指摘されているように破損率は高い。44はCL-56グリッド出土資料と表採資料が接合したものである。磨耗面は41・42・44・46・48の5点には1箇所に一面、40・45・47の3点は、1箇所に隣接して二面、43は2箇所にそれぞれ一面ずつの二面が残るものである。40の両端には敲打痕も認められる。磨耗面を観察しても風化が著しくその作業方向が確認できないものばかりである。凹石と磨石は当地方で産出する安山岩製である。なお、磨石と対になる石器（石皿、平板状石皿等）の発見はなかった。22は、粘板岩の自然石を用いた敲石で、両端に明瞭な敲打痕が残る。

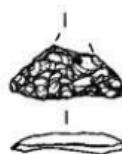
大形の礫器（49）は緑泥片岩製で、発掘の折に生じた破損面が広く明瞭な観察はできなかった



第26図 堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (I) (1 : 1.5)



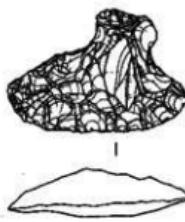
18



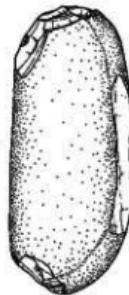
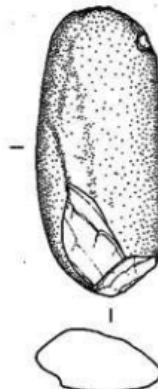
20



19

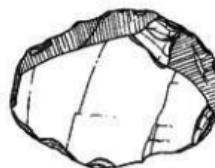
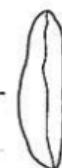
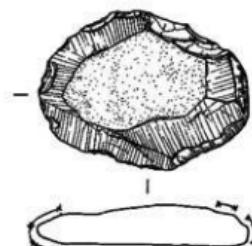


21



24

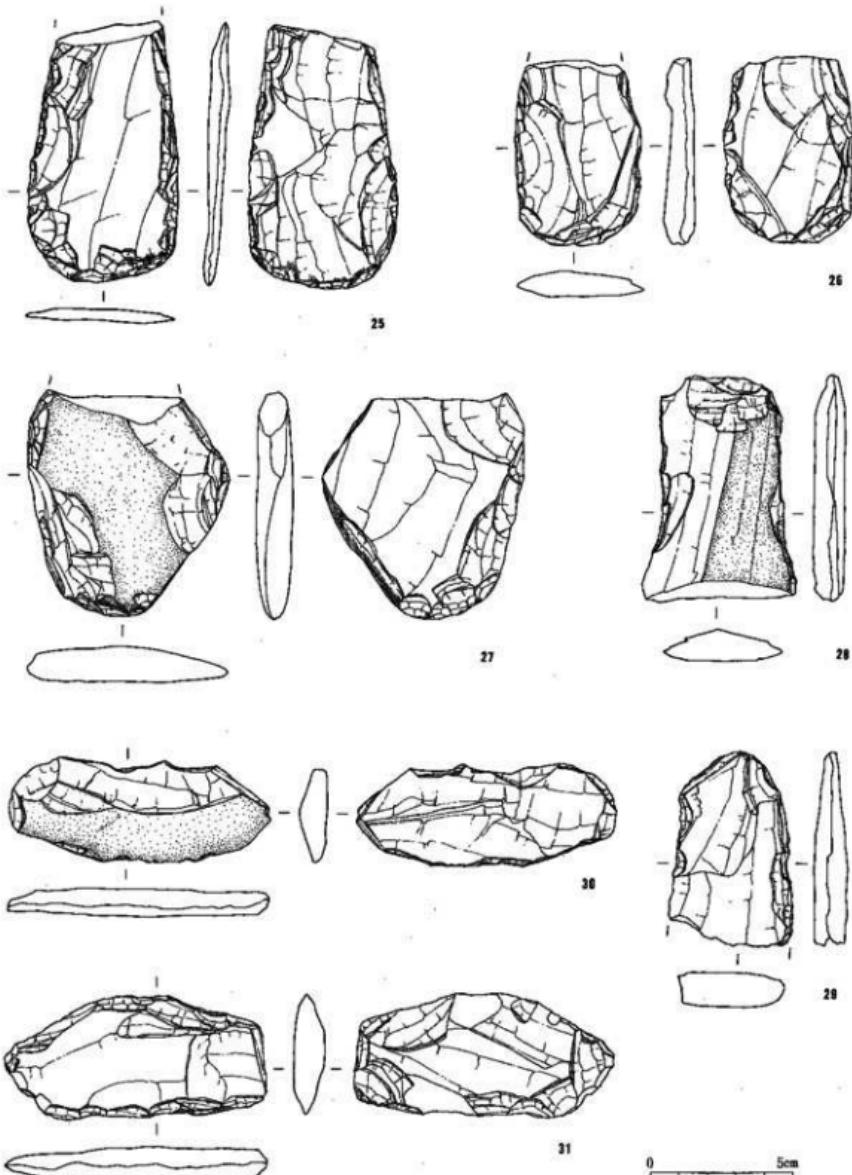
22



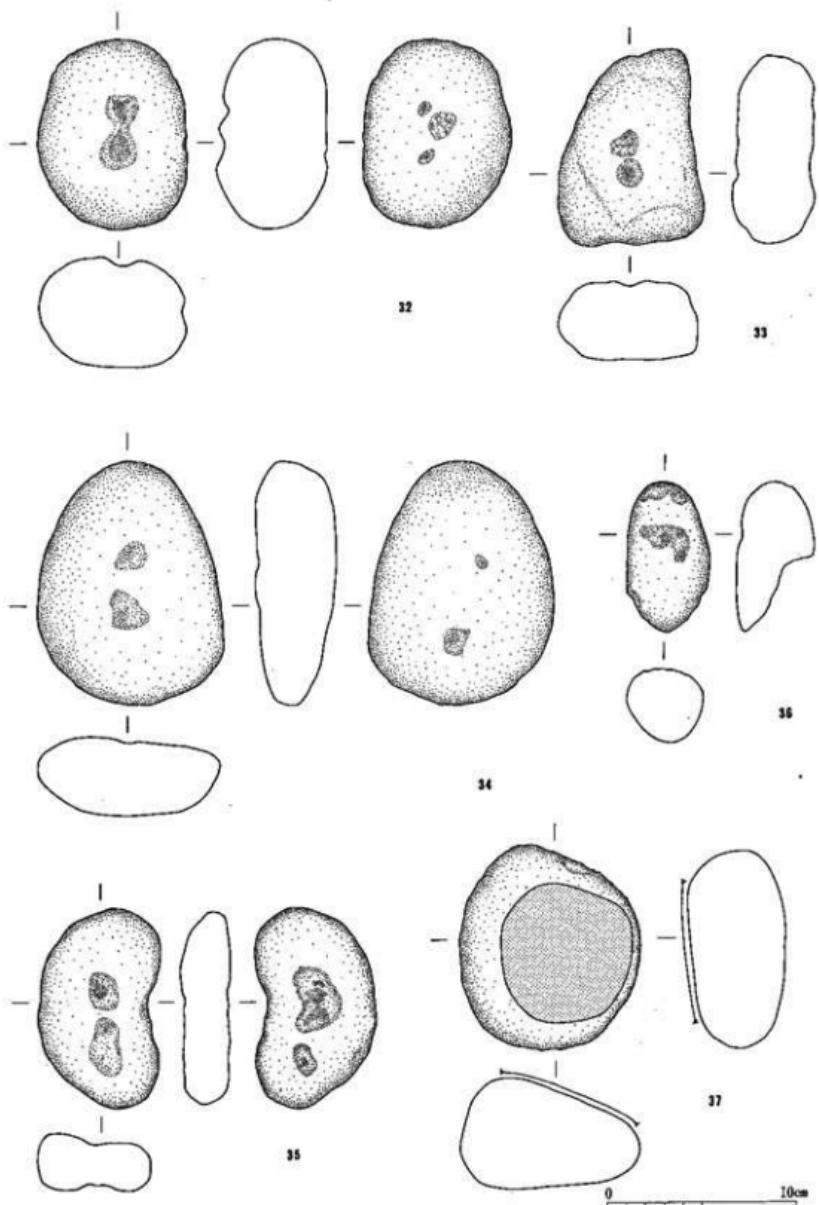
23

0 5cm

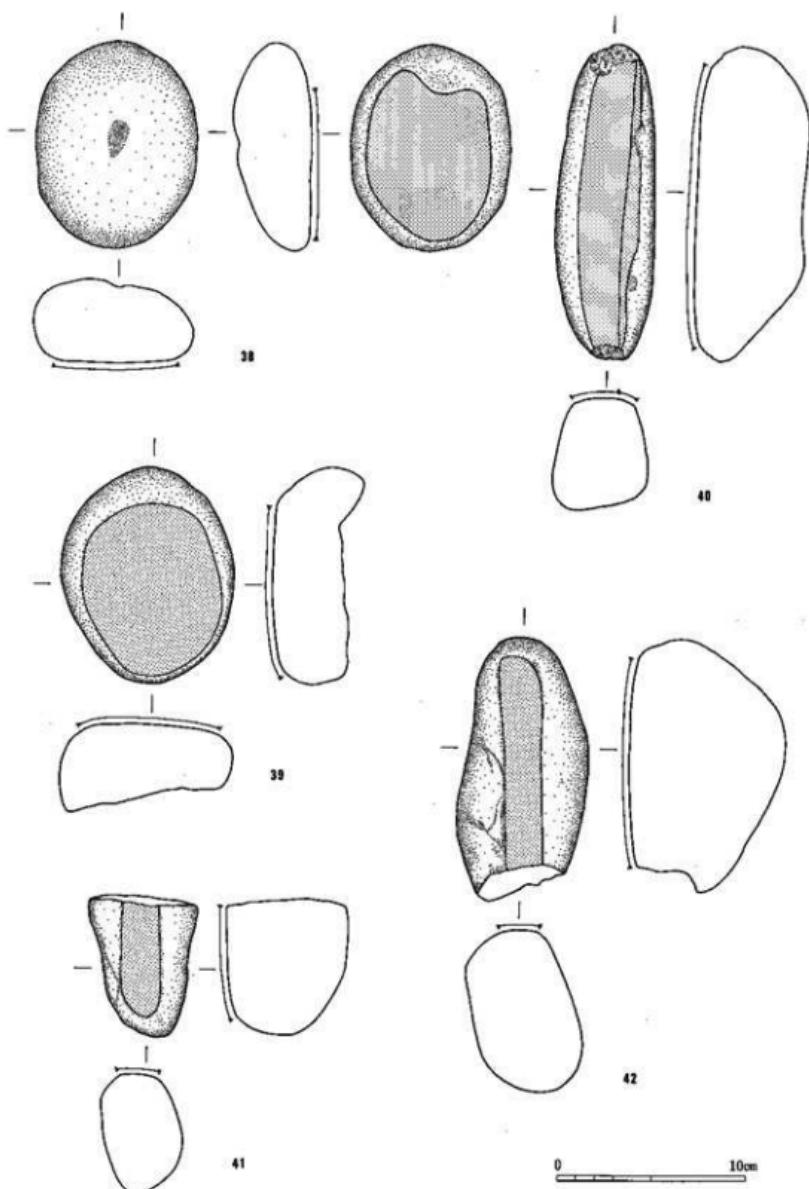
第27図 堤之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (2) (1 : 1.5)



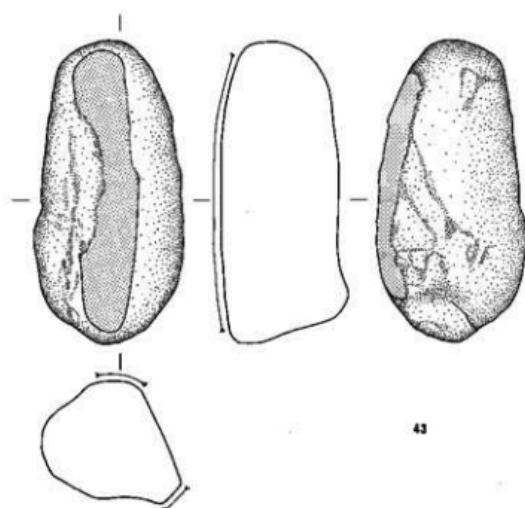
第28圖 堤之尾根遺跡遺構外出土石器實測圖 (3) (1 : 2)



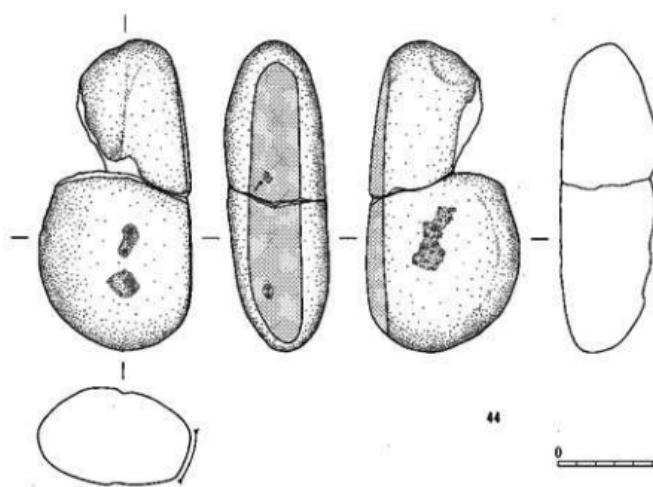
第29図 堤之尾根遺跡遺構外出土石器尖測図 (4) (1 : 3)



第30図 堤之尾根遺跡遺棊外出土石器実測図 (5) (1 : 3)



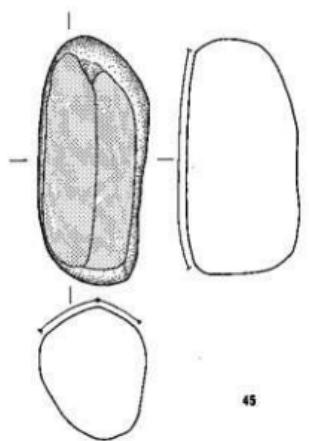
43



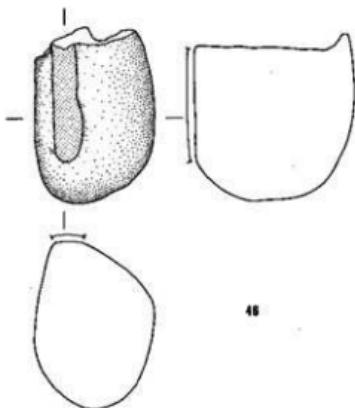
44

0 10cm

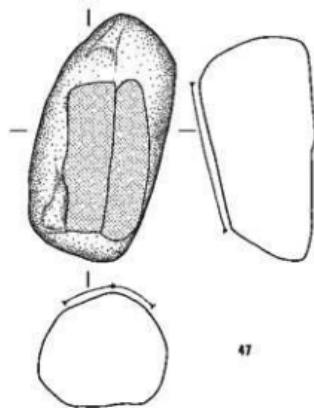
第31図 墳之尾根遺跡遺構外出土石器実測図 (6) (1 : 3)



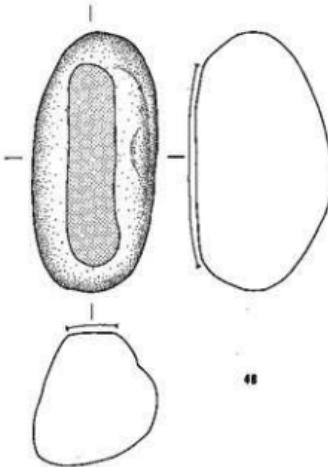
45



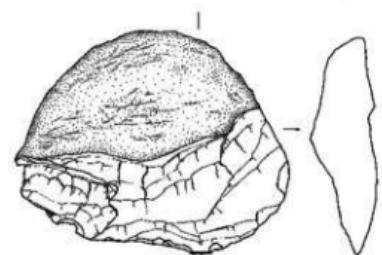
46



47



48



49

0 10cm

第32図 堤之尾根遺跡遭構外出土石器実測図 (7) (1 : 3)

が、刃部に幅が狭い磨滅面が認められる。

この他に、硬砂岩や緑泥片岩などの原石と剝片、黒曜石の使用痕ある剝片、黒曜石やチャートの剝片やチップなどもある。

以上であるが、発見した石器数は少ないので破損品の多い点が目を引く、この事実は本遺跡の性格の一端を物語っているものであろうが、遺跡の性格を語るだけの資料を持ち合わせていない。

#### 4 平安時代の遺構と遺物

検出調査した平安時代の遺構は、後期の住居址3軒である。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器がある。

##### (1) 住居址

第1号住居址 (第9・33~35図)

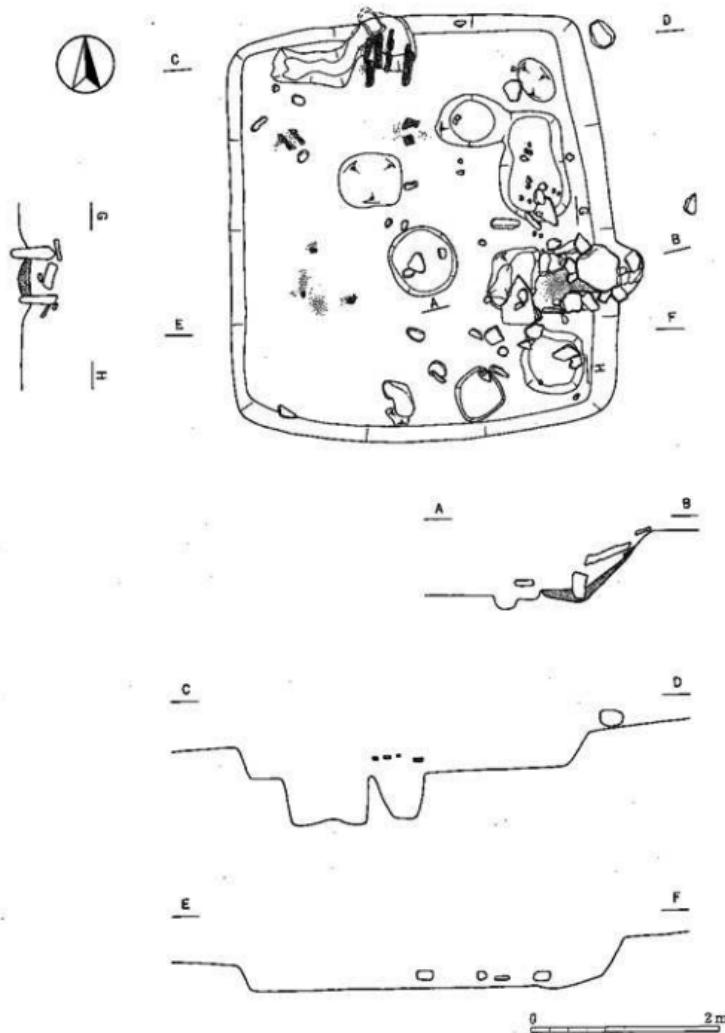
###### 調査の経過

尾根上のBM-48とBO-48グリッドで住居址と思われる落ち込みを認め、手掘りで住居址の検出を進め、BO-48グリッド第II層の黒色土下半分で、おぼろげながら住居址が確認できる状態となり、隅丸方形の落ち込みを認めたことにより、住居址の埋没を確信した。窓の一部と思われる石が東壁際で発見された。第V層のソフトローム層上面まで掘り下げBM-47~49、BN-47~49、BO-47~49の9グリッドに跨る平面隅丸方形を呈する竪穴住居址を検出した。この地点の尾根幅は狭く、本址が構築された所だけが平坦面で、南と北側は傾斜面となってしまう。

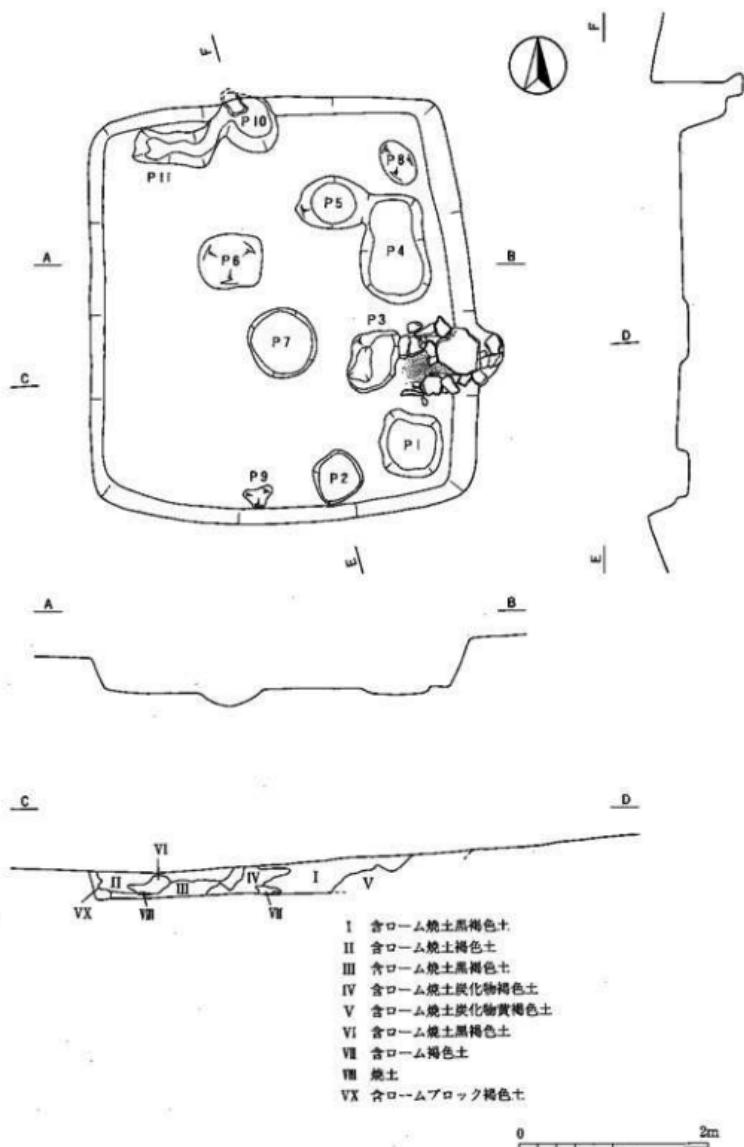
なお、ロームマウンドの調査をしていないため、図示していないが、住居址の北西隅から北壁の約半分位にかけて、ロームマウンドと重複する。埋土の状態からみて本址の方が新しい。

土層観察ベルトを自然傾斜の東西方向に設定し、住居址の精査を行った。床面までは深く東で51.5cm、西で32cmを計り、その埋土をI~IXに細分した。Iは含ローム焼土黒褐色土で基本層序第III層の黒褐色土にロームと焼土が含まれたものである。IIは含ローム焼土褐色土で明るい。IIIは含ローム焼土黒褐色土でIより黒色が強い。IVは含ローム焼土炭化物褐色土で、IIより焼土が多いため赤色は強くなっているし、炭化物によって黒色も強く見える。Vは含ローム焼土炭化物黄褐色土、VIは含ローム焼土黒褐色でIIIより焼土が多い。VIIは含ローム褐色土でローム粒は大きく包含量も多く黄色くみえる。VIIIは焼土、IXは含ロームブロック褐色土である。以上の様式にいわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達がみられた自然埋没による竪穴である。

土層説明のように、炭化物と焼土の包含は全ての層にわたり、北壁際と北西隅の床面直上から炭化材の出土があり、本址は火災によって廃絶したものと思われるが、出土遺物は破片ばかりで出土量も少なく、遺物の在り方から考えると、上屋を片付けるために燃やしているのかもしれない。



第33図 堤之尾根遺跡第1号住居址実測図 (1) (1 : 60)



第34図 塙之尾根遺跡第1号住居址実測図 (2) (1 : 60)

遺物は住居内全面に散在していたが、竈周辺に多い傾向は見られた。しかし、全て破片であり、完形および完形に復原できたものは1点もない。また、住居址内から発見された砾も、竈の前を中心とした周辺に多く、床面より浮いていたことから竈の材料が散乱していたものと思われた(第33図)。

### 遺構

平面形は東西410cm、南北454cmの隅丸方形を呈する。壁高は東壁の51.5cmを最高に、北壁29.5cm、南壁29cm、西壁32cmを計り、良好な状態を遺存していた。床面はロームのタタキ床で堅く平坦である。

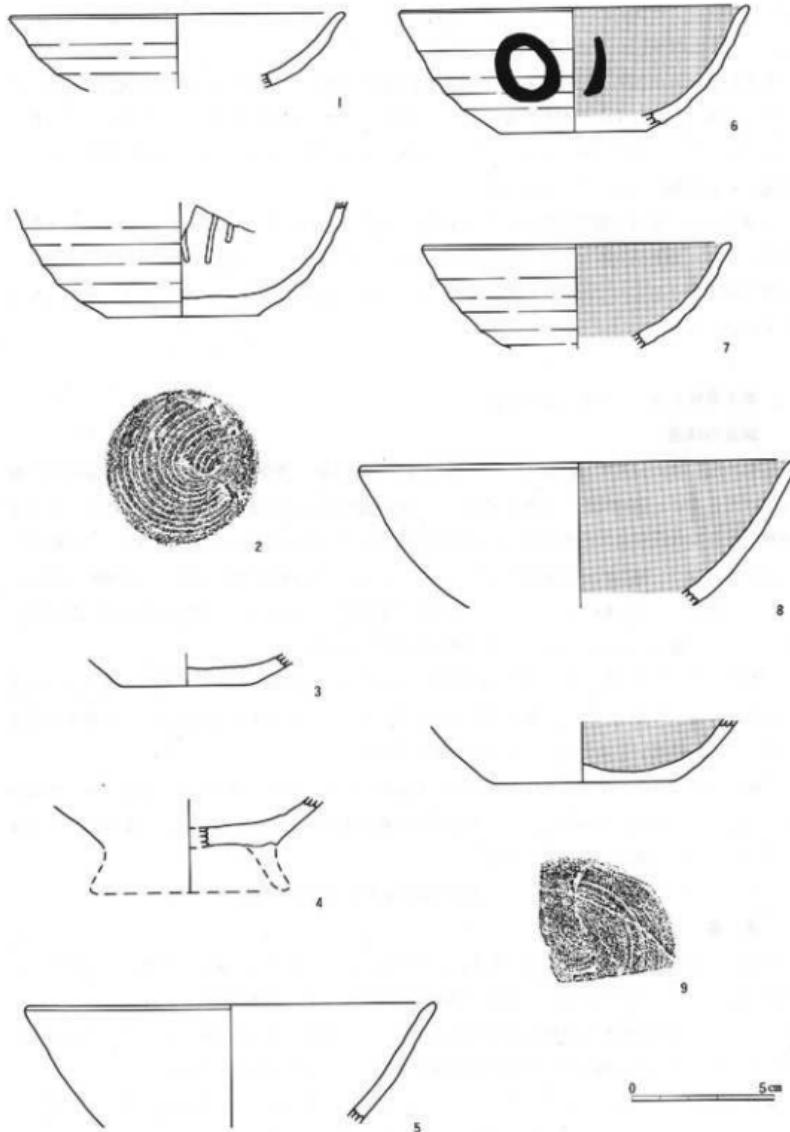
明確に柱穴と思われるものはなかったが、P1～P11の大小さまざまな穴を検出した。それらの穴の大きさは次の通りである。P1は竈右隣りにあり68×68cmの隅丸方形で深さ11.5cmと浅く、いわゆる灰溜めの穴とは違うようである。P2は南壁直下で50×49cmの隅丸方形に近い円形で深さ14cm、P3は竈の前にあり66×50cmの不整梢円形で、底面は確りしたものではなく深い所でも19cmと浅く、竈の灰を搔き取る時にできた穴とも考えられる。東壁下のP4とP5は接触するもので、P4は116×70cmの隅丸長方形で深さ7cmと浅く小さな礫が11個入っていた。性格については不明である。P5は71×54cmの梢円形で深さ17cmを計る。住居ほぼ中央のP6は68×58cmの隅丸方形で深さ20cmの舟底、P7は74×72cmの円形で房8.5cm。北東隅近くのP8は51×34cmの梢円形で深さ11.5cmの舟底、P9は南壁直下で32×20cmの不整隅丸三角で深さ9cmである。北壁直下で検出したP10とP11は重複しているが、検出地点は丁度ロームマウンドと重複していたこともあり、明確なものではない。P10は70×56cmの梢円形で、底は二段となり北側の一部は袋状となり、深さは深い方で68.5cm浅い方が50cm、P11は86×33cmの平面隅丸長方形で深さ44.5cmである。

竈は東壁中央より南に片寄った位置にある。石組粘土竈で、平石を立て袖石とし(写真24～26)黄褐色土に覆われていた。天井石も一部残りその遺存状態は比較的良好であった。P3の上面で検出した平板石は竈の天井石が落ちたものであろう。石は当地方で産出する安山岩である。竈の規模は、焚口部から煙道部までが112cm、焚口部の幅は65cmを計る。竈内の焼土の厚さは12cmを計る。

### 遺物

遺物は埋土中からは少なく、ほとんどが床面ないしは床面直上で、土師器・須恵器・灰陶器がある。

供膳形態では土師器の坏形土器(第35図1～9)があり、破片から器形を復原した。胎土、整形、焼成とも普通であるが、2の胎土はやや良く、3は微密である。2・3・9は底部に糸切り痕が明瞭に残るものである。2の器内には暗文が施され、4は高台付で高台が剥落している。剥落部を観察すると底部を切り離した後に高台を付けたもので、高台際は薄い粘土で補強されている。内面には僅かであるが炭化物が付着している。6～9は内面黑色土器で、6はP1と床面出土破片が接合したもので、約4分の1が残存し、外面に墨書きされているが判読できない。7はP4



第35図 堤之尾根遺跡第1号住居址出土土器実測図 (1 : 2)

からの出土。この他に図示できなかった小破片もある。灰釉陶器もやはり小破片で図示しなかつたが、折戸53号窯跡の壺形（楕形）土器がある。

貯藏形態は須恵器の大形甕がある。胴部分破片ばかり39点で、埋土と床面上、竈内、P 3からの出土である。接合するが器形を復原するには破片が少なく図示できなかった。外面の叩き仕上げ痕の違いから2個体の破片である。胎土、整形、焼成は普通であるが、一部赤灰色部分がみられるし、自然釉のかかっているものもある。

煮沸形態は土師器の变形土器がある。口縁部、胴部、底部の破片170点を数えるが、接合するものは少なく、器形を復原できるものがなく図示していないが、厚い口縁部は「く」の字に屈折し、胴部は薄手作りのものである。整形痕の違いから4～5個体の破片がみられ、胎土、整形、焼成とも普通である。

### 第3号住居址 (第9・36・37図)

#### 調査の経過

尾根の北斜面に位置するCB-54グリッドの発掘で、住居址の埋没がわからないまま、床面まで掘り下げてしまい、ほぼ完形の耳皿を発見した。その状況から住居址の埋没が確信できた。表土は重機で取り除き住居址の検出を進め、第IV層の褐色土でおぼろげながら住居址のプランが確認できる状態となり、竈石の一部を発見した。しかし、尾根の北斜面で傾斜は強く、不明瞭な箇所が多いこともあり、第V層のソフトローム上面まで掘り下げCA-53～55、CB-53～55、CC-53～55の9グリッドに跨る平面隅丸方形を呈する豎穴住居址を検出した。

CB-54グリッドは、悪いことに住居址の真ん中に位置し、土層観察ベルトを残し精査できる状態ではなかった。そこでグリッド掘りの壁面を観察すると、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達がみらる自然埋没による豎穴であることが確認できた。

遺物の発見は、あまり多くないが竈内から土師器の壺が、周辺と東壁直下からやはり土師器の壺が出土した。前記したようにグリッド掘りで耳皿が床面近くで出土している。竈左側の穴は浅く土師器壺破片が出土しただけである。

なお、近くのCD-56グリッドから、灰釉陶器の皿形土器破片を発見している。

#### 造構

北壁の一部は明確にすることができずに、やや掘りすぎたくらいもあるが平面形は東西310cm、南北346cmの隅丸方形を呈する。壁高は東南隅の54cmを最高に、北西隅に向い自然の傾斜にそって低くなるが、東壁と南壁は良好な状態で遺存していた。床面はほぼ水平となりロームのタキ床で堅く良好であるが、北壁際には軟弱な箇所もみられた。柱穴は検出できなかった。

竈は東壁南寄りで壁が一番高い所にある。平石を立て袖石としている石組粘土竈で、黄褐色土に覆われていた。右袖の石は残存し良好であるが、左袖の石は残っていないかたし、住居内にも散乱することはなく、廃絶時に取り除いてしまったのであろうか。煙突部には3枚の平板石が折

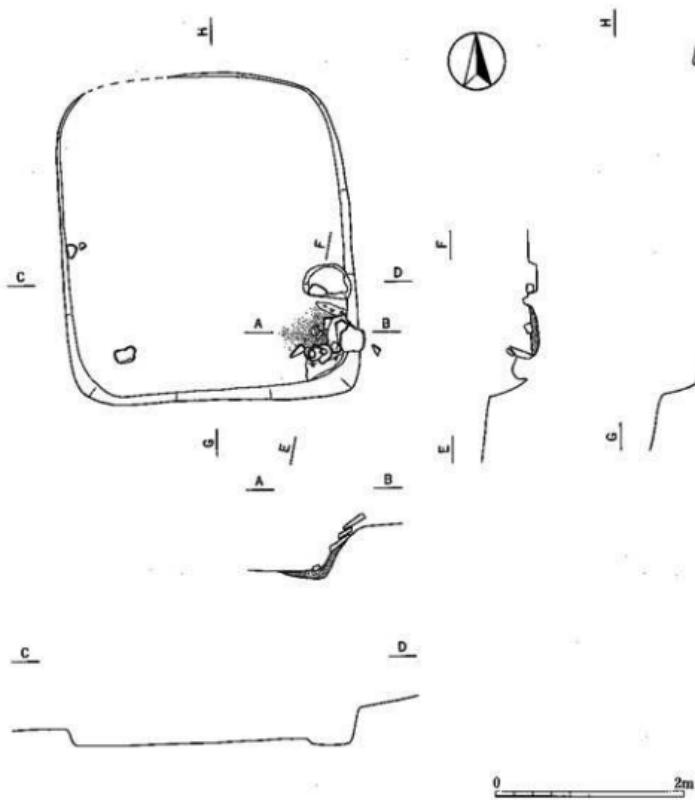
り重なり、壁に貼り付いた状態で残存した。石は当地方で産出する安山岩である。竈の規模は、焚口部から煙道部までが110cm 焚口部の幅が (58) cmで、竈内の焼土の厚さは 9 cmを計る。

### 遺物

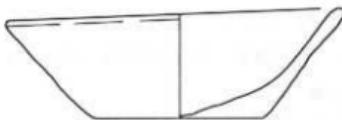
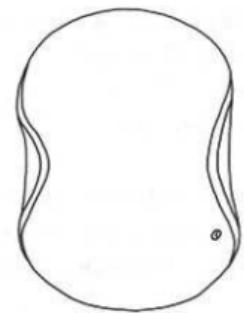
遺物は埋土中からの発見は少なく、ほとんどが竈内とその周辺からの発見である。

土器は土師器だけで、それも供膳形態の耳皿と环形土器である。

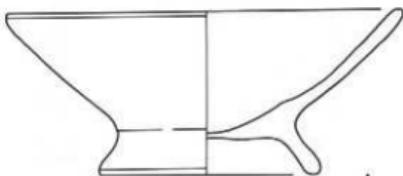
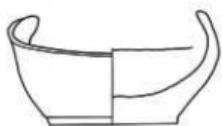
耳皿（第37図1）はグリッド掘りの際に発見したもので、口唇を僅かに欠損するだけの優品である。胎土は普通で、整形は皿部を作り出した後に、皿部の両端をつまみ耳としている。焼成前に小穴が1個穿孔されている。穿孔位置に違いはあるが、類例は塩尻市の吉田川西遺跡、松本市



第36図 堤之尾根遺跡第3号住居址実測図 (1:60)



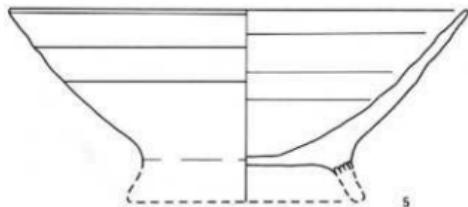
3



4



1



5



2



6

0 5cm

第37図 堤之尾根遺跡第3号住居址出土土器実測図 (1:2)

の県町遺跡や南栗遺跡などにみられるが、その性格についてはわからない。底部には糸切り痕が明瞭に残り、焼成は比較的軟質である。

坏形土器（2～6）は5点で、2は竈内から出土した底部破片で、成形はあまり良くないが胎土と焼成は普通である。内面に黒光り炭化物が付着している。3は竈内、P1、床面から出土した破片が接合し約3分の2が残存する。胎土、整形、焼成とも良くない。2と3の底部には糸切り痕が明瞭に残る。4～6は高台環で、4は竈右袖部から出土し、口唇部を僅かに欠損する。胎土、整形、焼成ともあまり良くない。外面にロクロ整形痕がみえることから、ロクロ整形されたものであるが、内面はロクロ整形とは思えないような粗雑なまで凹凸している。5は東壁直下で出土し、約2分の1が残存する。胎土は微密で整形は良く焼成は比較的軟質である。内面底部には僅かであるが炭化物が付着している。6は竈内から出土した底部破片で、胎土、整形、焼成とも普通であるが、底部内面には焼成時に生じたと思われるひび割れがみえる。高台外面と器内には炭化物が付着している。4～6の底部にも糸切痕が残り、高台は糸切り後に付けられたものである。

図示したもの以外にも坏形土器の小破片が8点あり、個体数では5個体になるものと思われる。2点は同一個体の破片で内面黑色土器である。

#### 第4号住居址 (第38図)

##### 調査の経過

重機で表土剥ぎを行ない、遺構の検出作業を進めていた折に、第V層のソフトローム上面で検出した。尾根上のCU-52、CV-51-52、CW-51-52の5グリッドに跨る平面隅丸方形の堅穴住居址で、北壁側は大きな土取りの穴によって削りとられすでに欠損していたし、耕作のための擾乱も著しくその保存状態はあまり良くなかった。

精査を進めるが耕作の擾乱は著しく、床面まで達しているものもみられた。壁の立上りはなんだらかであるし、タキ床も部分的に認められはしたが確りしたものではなかった。埋土中から縄文時代の土器と石器が発見されている。しかし、土器は縄文が施された纖維土器の小破片1点であり、石器は黒曜石製の石鎚の破損品1点と黒曜石の剥片5点で、本址の帰属時期を決めることができるものではなかった。

西壁際の床面上から6×12cmの礫1点が出土した。打痕や磨痕は一切認められないもので、用途および性格については不明である。

南壁際の埋土中で焼土を認めたが、炉址や竈に結び付ける状態ではなかった。したがって炉ないしは竈を検出できなかったことになる。遺物は埋没途上に流れ込んだと思われる縄文土器と石器が僅かにあり、土器は帰属時期を示すことができない小破片で、本址を縄文時代の住居址と認定するには問題も残り、ここでは堅穴の形状と検出位置から平安時代後期の住居址と考えておきたい。

### 遺構

平面形は北壁側が土取りの穴で削りとられているが、遺存部分から推定すると、東西290cm、南北(280)cmの隅丸方形であろう。壁はなだらかに立ち上がっているが、壁高は南壁の41cmを最高に、東壁33cm、西壁33cmを計る。

床面はほぼ水平で、部分的にロームのタタキ床も認められたが、総体的には軟弱であった。

### 遺物

平安時代と考えたので異物の発見は皆無となる。

## (2) 遺構外出土の遺物

遺構に伴わない平安時代の遺物は、土器と鉄率がある。

土器は土師器と灰釉陶器があり小破片で図示できなかったが、供膳形態の皿形と环形土器がある。鉄率も小さい物で図示していない。平安時代の住居址から鉄率は1点も発見できなかったことから、帰属時期は特定できない。

## 5 まとめ

調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかった。発見した遺構・遺物ともそれほど多くないが、調査から整理の折々に感じたことを書いてみたい。

### 縄文時代

縄文時代は早期、中期、後期で、早期は押型文土器の発見と、中部山岳地帯を中心に分布するとされている格条体压痕文土器の発見は特記できる。しかし、その出土状態は散発的で法則性を見出すことができなかつたし、耕作土の直下がローム層となってしまい、層位的に把握できたものではなく、明確な帰属時期を示すことはできなかつたが、当方としてはまとまった資料である。前期は最末期で、阿久遺跡と大石遺跡の間を埋める貴重な資料である。

中期は尾根の南斜面で住居址を1軒発見したが、調査の結果は単独のものであり、このようにやせ尾根に1軒だけとはいえた中期の住居址を発見した事実は、今後集落立地を考える上で貴重な資料となろう。水田造成前の地形を復原観察してみても、従来いわれてきた中期の遺跡立地には程遠いようである。中期の遺跡といえばどうしても尾根幅の広い大遺跡に目が向きがちで、また、そのような遺跡しか発掘されていないが、縄文時代の復原にあたって、中期中葉にもこのような小集落跡の有ることを忘れてはならない。

後期については、御射山道北・古屋敷西遺跡同様に同一個体の土器破片が発見されただけで、その生活時間は極めて短かったようであり、興味深いことである。

### 平安時代

当地方における平安時代の集落立地は、一口にいえば尾根の南斜面と理解されてきている。御

射山地区県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査で、平成元年度に調査を実施した梨の木沢遺跡は、尾根の南斜面に集落が展開していた。付近で調査の行われている判ノ木山東・居沢尾根・阿久遺跡などでも同様である。

そんなことから第1号住居址を検出した後、集落の展開を南斜面と考え重点的に調査を進めた。しかし、堤之尾根遺跡では北斜面に展開し様相は若干違っていた。「南斜面の日溜まり」との立地概念が強くそれを固守したこと

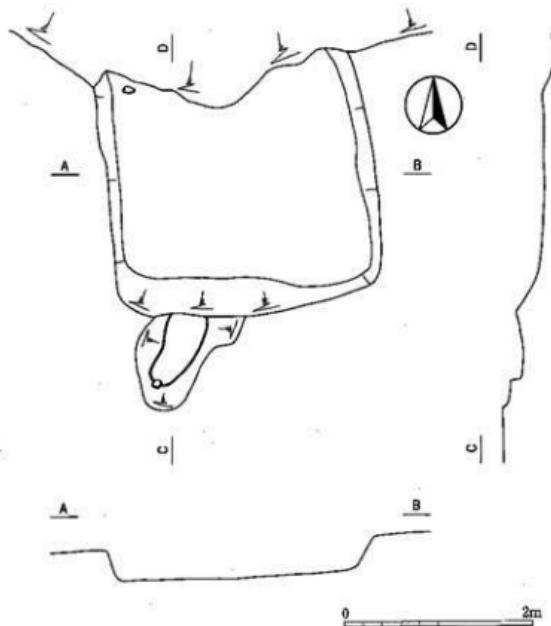
もあり、調査では無駄な時間を費やしたようである。調査が終わってみると、日当たりが良ければ、集落の展開は北斜面でも南斜面でも良いのである。古い時期に水田造成が行なわれているが、堤之尾根遺跡の地形を復原観察してみると、南斜面より北斜面の方がその傾斜は緩やかで、立地条件は北斜面の方が適していたようである。そんなことを考えると、調査地域外となる水田地域までが遺跡の範囲のように思えてきたが、すでに工事は実施された後で、その実態を知ることはできなかった。

住居址3軒を発見した小規模な集落跡で、住居址以外の遺構を検出することはできなかった。

#### 耳皿の発見について

調査と北巨摩の近隣では、第39図と第5表に示したように、8遺跡8点の耳皿が発見されているようである。耳皿は平安時代の全ての遺跡から発見されるものではないようで、数少ない耳皿を保有した「ムラ」の性格は重要になってくる。

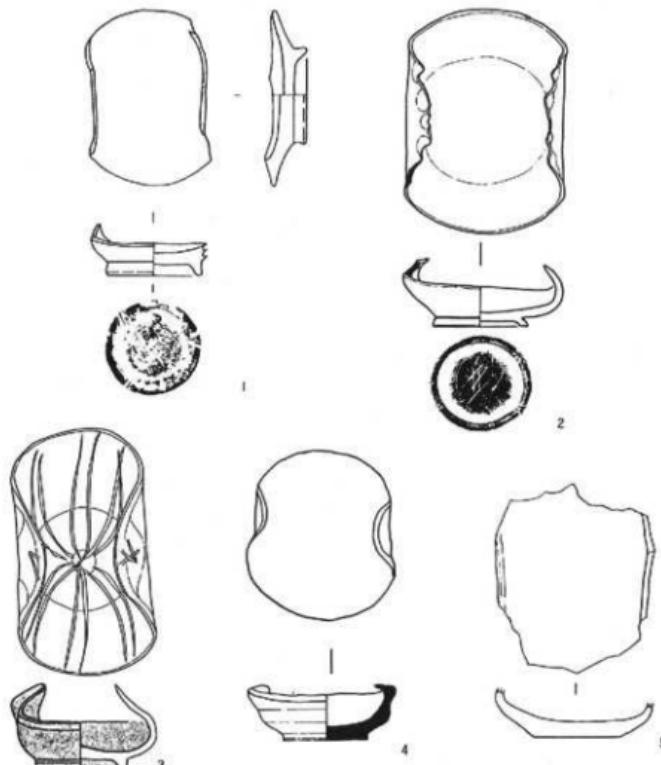
楕垣外遺跡・阿弥陀堂遺跡・判ノ木山西遺跡は八稜鏡が発見された大遺跡で注目されているし、判ノ木山西遺跡では綠釉陶器の皿破片も発見されている。また、その発見数に違いこそあるが、



第38図 堤之尾根遺跡第4号住居址、小豎穴46実測図 (1:60)

第5表 耳皿出土遺跡地名表 (諏訪・山梨県北巨摩)

団番	遺跡名	遺構名	種類・破損状況・出土状態等
1	岡谷市・花上寺	65号住居址	灰釉陶器 北壁際の周溝内から出土 縁を一部欠損
2	岡谷市・橋原	26号住居址	高台付の土師器で外面黒色 耳を欠損
	岡谷市・梗垣外		
	諏訪市・御屋敷		
3	茅野市・阿弥陀堂	10号住居址	高台付の灰釉陶器 完形
4	茅野市・棚畠	1号住居址	高台付の土師器で外面黒色 放射状暗文 寧内から出土 完形
5	茅野市・判ノ木山西	13号住居址	土師器 完形
	原村・堀之尾根	3号住居址	土師器 焼成以前の小孔1個 寧近くから出土 縁を一部欠損
6	小淵沢町・上平出	5H住居址	灰釉陶器 耳を欠損



第39図 諏訪・山梨県北巨摩郡出土の耳皿 (1:4)

墨書き土器や鉄製品も多いようで、それらの遺跡は相当経済力が有った「ムラ」のように思える。しかし、本遺跡は小遺跡であり、墨書き土器を1点発見したが鉄製品はなく、性格が若干違っているようにも思える。

いずれにしても耳皿は神饌に使われた祭具で、その祭具が発見されたことは、堤之尾根遺跡で神饌を伴う祭事が執り行われたことであろう。遺跡の規模からみて単独で執り行われたことは考えにくく、位置と環境で述べたように御射山神社を支えた一つの遺跡であり、御射山神社における一つの神事と考えたい。

(平出・平林)

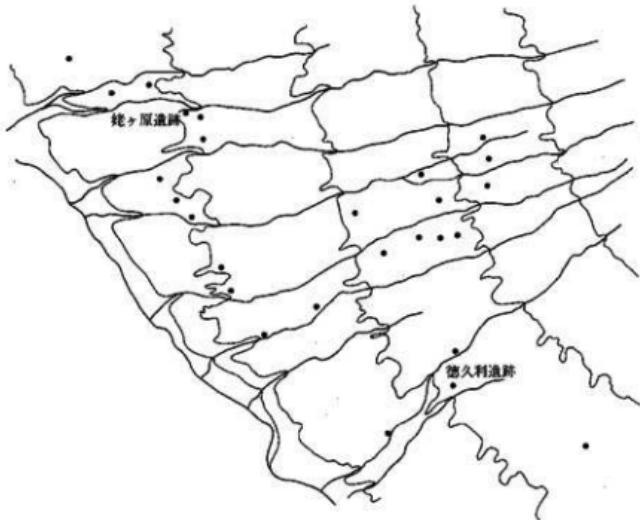
## IV 結 語

昭和59年度にはじまった「県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区」も、平成2年は最終年度にあたり、第6表に示したように2回にわたる分布調査と、13遺跡の発掘調査を実施し良好な調査結果が得られている。それは記録保存という名のもとに13遺跡が消滅したことでもあり、心から喜べるものではない。調査成果をまとめなくてはならないが、調査の折々に感じたことを書き結語としたい。

### 縄文時代

県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区内は、原村における遺跡の希薄地帯にあたるが、それでも13遺跡の発掘調査を実施した。その結果、当地方において爆発的に繁栄した縄文時代中期の資料よりも、衰退期にあたる後期の資料が多かったことは注目されよう。

それは、中御射山東、中御射山西、花表原、御射山、箕手久保、梨の木沢、御射山沢、御射山道北、古屋敷西、堤之尾根の10遺跡から僅かであったが土器破片を発見した。それも、箕手久保、御射山道北、古屋敷西、堤之尾根遺跡では、同一個体の破片であるという共通性もみられ、遺跡の性格を究明する足掛かりとなろう。中央自動車道の建設に伴う発掘調査においてもやはり住居



第40図 縄文時代後期の遺跡分布 (1 : 50,000)

址は発見できなかつたが、遺物を発見した遺跡は数多く南から一の沢、手洗沢、頭殿沢、御狩野、金山沢北、判の木山東、判の木山西、大石の8遺跡がある。それは土器の出土量が少なく、当時の人たちの生活の舞台であったことは事実であるが、その時間は短い上に小人数の存在しか考えられないものばかりで、これらの土器をもたらした親村は何処に埋没しているのか考えさせられる。すでに発掘調査が行なわれ該期の集落跡が発見されているのは、原村の南外れで富士見町にその多くが広がる徳久利遺跡、原村の姥ヶ原遺跡（住居址1軒）だけである。

付近一帯における後期の遺跡分布状況を第40図に示してみた。遺跡は調査密度の違いから、県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区内と中央道ルートに集中するが、未調査地域にも同様な傾向はあるものと思われ、やや特異な後期の遺跡群が形成されているようである。

このように極めて短い生活の場は、一つに定住性の乏しさに起因するもので、当地方における遺物散布地と集落遺跡がどのような関係にあったのか、今後に残した研究課題は大きいようである。それは中期文化の衰退を物語ることにもなる。

#### 平安時代

平安時代の集落跡調査は、平成元年度に実施した梨の木沢遺跡と本年度に調査した堤之尾根遺跡があるが、住居址以外の造構については、梨の木沢遺跡は住居址と住居址の間を全面発掘していないこともあり、確実のこととはいえないが、住居址以外に溝址を発見しただけである。堤之尾根遺跡は住居址と住居址の間にあたる尾根上の全てを調査し、それ以外の箇所は2m置きのグリッド調査を実施したが、住居址以外の造構を検出するまでに至っていない。

縄文時代の集落跡からは貯蔵穴、墓穴、用途不明の数多い穴などが発見されるが、平安時代の集落跡は住居址が発見されるだけで、本当にすっきりしたものばかりである。これが平安時代の本当の村の姿と考えるには、余りにもすっきりしすぎていて、平安時代の人たちは貯蔵穴や墓穴を必要としなかつたのか考えさせられ、集落跡から住居址以外の造構（施設）が発見されないことに疑問を持つようになって久しい。

そこで、付近の遺跡に目をむけると、茅野市・判ノ木山東遺跡では小竪穴1基（報告書では、土壙1基）、茅野市・頭殿沢遺跡で小竪穴2基（土壙2基）が発見され、1基は火葬墓と考えている。茅野市・御狩野遺跡では鉄鐸・灰釉陶器などが出土した墓壙1基、この3遺跡は歴史的環境で述べたように、御射山神社を支えた遺跡である。大石遺跡で小竪穴4基（土壙4基）が発見されているくらいである。

貯蔵穴がないのなら墓穴はと考えたが、この当時はすべての人が埋葬されたのではないと言われていることから、墓穴はなくてもよいと考えることもできるが、原村で調査された平安時代の集落跡（住居址）は梨の木沢・堤之尾根・大石・ヲシキ・居沢尾根・阿久・家裏・金芳の8遺跡におよぶ、それなのに明らかに墓穴とわかるものは1基も発見されないことは大きな疑問であり、墓穴が発見調査されている遺跡に目を向けると、塩尻市の吉田川西遺跡や山形村の殿村遺跡は住居域と墓域が近接し、集落内といえる範囲のものである。南箕輪村の神子柴遺跡や、茅野市の狐

塚遺跡と御射野遺跡は、日常生活の場から離れたところに埋葬されたようであり、墓穴だけが発見されている御射野遺跡は八ヶ岳西麓で御射山神社を支えた遺跡であり、当地方では住居域と墓域は違う尾根上にある可能性は高いようである。しかし、それを明確にする資料がないまま、土地改良事業のような大規模開発で消滅させているのかもしれない。1日も早く住居域と墓域の在り方を究明しなくてはならないようである。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方に厚く御礼申し上げる次第である。

(平出)

第6表 県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区に伴う埋蔵文化財調査一覧

番号	遺跡名 報告書 発行年月日	調査年月日	発掘担当
分布調査			
1	分布調査	昭和59年	五味一郎
2	分布調査	昭和63年	平出一治 伊藤 証
原村の埋蔵文化財小報5 昭和64年度県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区の踏査報告書 梨の木沢・御射山沢・梨の木沢西・中道通遺跡 昭和63年12月23日			
発掘調査			
1	中御射山東遺跡全無届	昭和59年10月31日～11月7日	五味一郎
2	中御射山西遺跡 無届	昭和59年10月31日～11月7日	五味一郎
3	花表原遺跡 無届	昭和59年10月31日～11月7日	五味一郎
原村の文化財2 花表原・中御射山西・中御射山東遺跡 県営畠地帯総合土地改良事業御射山地区埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書 昭和60年3月20日			
4	御射山遺跡 2次	昭和60年5月7日～18日	平出一治 日達 厚
原村の埋蔵文化財3 御射山遺跡(第2次発掘調査) 御射山地区県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書 昭和61年3月20日			
5	箕手久保遺跡 1次	昭和61年7月23日～29日	平出一治 伊藤 証
原村の埋蔵文化財8 箕手久保遺跡 御射山地区県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書 昭和62年3月			
6	判の木東遺跡 1次	昭和62年8月6日～13日	平出一治 伊藤 証
原村の埋蔵文化財9 判の木東遺跡 御射山地区県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書 昭和63年2月15日			
7	中道通遺跡 1次	平成元年6月20日～9月27日	五味一郎

8	御射山沢遺跡	1次 平成元年6月20日～9月27日	伊藤 証 五味一郎 伊藤 証
9	梨の木沢西遺跡	1次 平成元年6月20日～9月27日	五味一郎 伊藤 証
10	梨の木沢遺跡	1次 平成元年6月20日～9月27日	五味一郎 伊藤 証
原村の埋蔵文化財17 梨の木沢・中遺通・御射山沢・梨の木沢西遺跡 御射山地区県営烟地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書 1990年3月15日			
11	御射山道北遺跡	1次 平成2年5月16日～8月10日	平出一治 伊藤 証
12	古屋敷西遺跡	1次 平成2年5月16日～8月10日	平出一治 伊藤 証
13	堤之尾根遺跡	1次 平成2年5月16日～8月10日	平出一治 伊藤 証
本報告書			

#### 引用参考文献

- 1969 03 南箕輪村教育委員会「神子柴遺跡緊急発掘調査報告書 第3次発掘調査」
- 1976 03 長野県教育委員会「昭和50年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その1、富士見町その2」
- 1979 03 長野県教育委員会「昭和51年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その2」
- 1981 03 長野県教育委員会「昭和51・52年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3」
- 1981 03 長野県教育委員会「昭和51・53年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市4・富士見町その3」
- 1985 03 原村教育委員会「花表原・中御射山西・中御射山東遺跡 県営烟地帯総合土地改良事業御射山地区埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書」
- 1986 03 茅野市教育委員会「高風呂遺跡 昭和59年度県営圃場整備事業湯川地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」
- 1986 03 岡谷市教育委員会「郷土の文化財15 梨久保遺跡 中部山岳地の绳文時代集落址 梨久保遺跡第5次～第11次発掘調査報告書」
- 1986 03 原村教育委員会「御射山遺跡(第2次発掘調査) 御射山地区県営烟地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書」
- 1987 03 山形村教育委員会「山形村遺跡発掘調査報告書 第6集 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書殿村遺跡」

- 1987 03 原村教育委員会『笑手久保遺跡 御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1988 02 原村教育委員会『判の木東遺跡 御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1988 03 塩尻市教育委員会『一般国道20号(塩尻バイパス)改良工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1989 03 長野県教育委員会『鈴長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 塩尻市内その2 吉田川西遺跡』
- 1990 03 茅野市教育委員会『狐塚遺跡 前宮公園建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
- 1990 03 原村教育委員会『梨の木沢・中道通・御射山沢・梨の木沢西遺跡御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1990 03 松本市教育委員会『松本市文化財調査報告No82 松本市原町遺跡緊急発掘調査報告書』
- 1990 03 長野県教育委員会『鈴長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書7 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7 松本市内その4 南栗遺跡』

#### 耳皿出土の引用遺跡文献（諏訪・山梨県北巨摩）

- 1974 03 山梨県教育委員会『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 北巨摩郡小淵沢町内』
- 1981 03 長野県教育委員会『昭和51・52年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3 (判ノ木山西遺跡)』
- 1981 03 国谷市教育委員会『郷土の文化財12 橋原遺跡 中部山岳地の弥生時代後期集落址 中央本線国谷・塩尻間別線複線化工事に伴う長野県国谷市橋原遺跡発掘調査報告書』
- 1983 03 茅野市教育委員会『橋井・阿弥陀堂遺跡 茅野有料道路内埋蔵文化財発掘調査報告書(阿弥陀堂遺跡)』
- 1987 03 国谷市教育委員会『花上寺遺跡 昭和61年度小規模排水対策特別事業柄久保地区に伴う発掘調査概報』
- 1990 12 茅野市教育委員会『棚畠 八ヶ岳西山麓における绳文時代中期の集落遺跡』

第7表 堤之尾根遺跡の小堅穴一覧

表中のカッコ付けの数値は、重複した小堅穴で現存部分を示す

番号	検出位置 グリッド	平 面 形	規 模			埋土・出土遺物など
			長軸	短軸	深さ	
1	CO-55 CO-56	円 形	70	64	27.5	黒色土、土器破片 2
2	CL-56	楕 圓 形	90	72	17	褐色土
3	CK-56	不 整 楕 圓 形	79	48	78.5	含ローム黒色土、 土器破片 1
4	CJ-56 CK-56	円 形	76	75	23	黒色土
5	CM-58 CN-58	楕 圓 形	82	94	16	黒色土
6	CM-58 CM-59	楕 圓 形	118	82	67	黒褐色土
7	CM-59	楕 圓 形	72	60	23.5	黒褐色土
8	CM-59	楕 圓 形	82	50	78	褐色土
9	CJ-56	円 形	70	65	13.5	黒色土
10	CK-56 CL-56	円 形	52	45	13	褐色土
11	CM-56 CM-57	楕 圓 形	152	88	27	褐色土、土器破片 1
12	CO-57	不 整 楕 圓 形	102	68	17.5	黒色土
13	CO-58	楕 圓 形	94	92	18.5	黒色土、黒曜石剥片 1
14	CO-58 CP-58	円 形	80	78	17	黒色土、土器破片 1、黒曜石剥片 1
15	CO-59 CP-59	円 形	48	44	32.5	黒色土
16	CP-60 CP-61 CQ-60 CQ-61	不 整 楕 圓 形	176	124	79	黒色土、土器破片 8(押型文)、特殊磨石 1
17	CQ-60 CQ-61 CR-60 CR-61	円 形	58	54	13.5	黒色土
18	CQ-61	円 形	72	64	14.5	黒色土
19	CP-60	円 形	66	64	20.5	褐色土
20	CL-58	楕 圓 形	94	70	22	黒色土、土器破片 1
21	CL-57 CL-58	円 形	66	58	57	黒色土、土器破片 3
22	CK-57	楕 圓 形	82	48	29	黒褐色土、土器破片 3

	CK-58					
23	CJ-57 CK-57	円 形	56 54 24.5		黒褐色土	
24	CK-58	円 形	38 38 14		褐色土、土器破片 1	
25	CK-59	円 形	52 51 27		黒褐色土	
26	CL-60	楕 円 形	64 52 20		黒褐色土	
27	CL-58	円 形	58 53 12.5		黒褐色土	
28	CK-57 CL-57	楕 円 形	90 42 24		黒褐色土、土器破片 2	
29	CQ-59 CQ-60	不 整 楕 円 形	80 72 35		黑色土	
30	CP-55 CP-56	楕 円 形	78 59 13.5		褐色土	
31	CJ-51 CJ-52 CK-51 CK-52	不 整 楕 円 形	128 108 75		黑色土、集石	
32	CK-51 CK-52 CL-51 CL-52	不 整 楕 円 形	114 94 33		褐色土	
33	CL-50 CL-51	不 整 楕 円 形	194 86 31		小豎穴 3 基の重複?、含炭化物黒褐色土、土器破片 1	
34	CM-52	楕 円 形	122 (102) 22		小豎穴 41 と重複、含炭化物黒褐色土、土器破片 1	
35	CN-52 CN-53	楕 円 形	86 68 19		黒褐色土	
36	CO-56	楕 円 形	30 20 10.5		褐色土、土器破片 1 (押型文)	
37	CK-54 CK-55 CL-54	不 整 楕 円 形	74 54 22		黒褐色土	
38	CM-53	円 形	68 62 48		黒褐色土	
39	CL-51 CM-51	楕 円 形	82 62 20		黒褐色土	
40	CM-50	円 形	74 66 13		黒褐色土	
41	CM-52 CN-52	円 形	(60) 60 8		小豎穴 34 と重複、黑色土	
42	CD-53 CE-53	楕 円 形	162 108 118.5		黒色土、土器破片 6 (押型文)、黒曜石剝片 2	
43	BQ-49 BQ-50	円 形	92 90 43.5		黒色土・含ローム褐色土・焼土	
44	CF-56 CF-57	円 形	84 82 24		含炭化物黒褐色土	

	CG-56 CG-57				
45	BS-51 BS-52	楕 円 形	82 72 25		
46	BV-50 BV-51	不 整 楕 円 形	(106) 102 19.5	4号住居址と重複、土器破片2、黒曜石 剝片2	
47	CP-60	円 形	30 26 48.5	黒褐色土	
48	CQ-58	楕 円 形	24 19 30	黑色土	



写 真 図 版





写真1 遺跡遠景

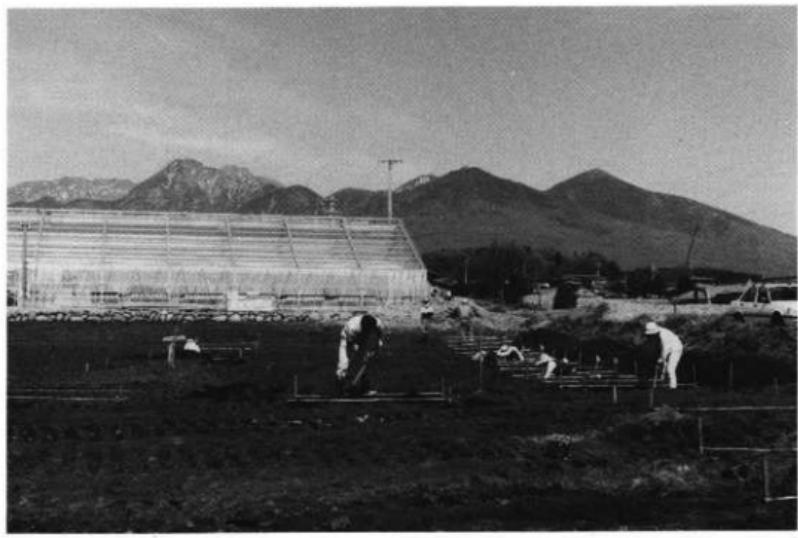


写真2 発掘風景



写真3 遺跡遠景



写真4 発掘風景



写真5 遺跡遠景(西から)



写真6 遺跡遠景(北東から)



写真7 碑 群

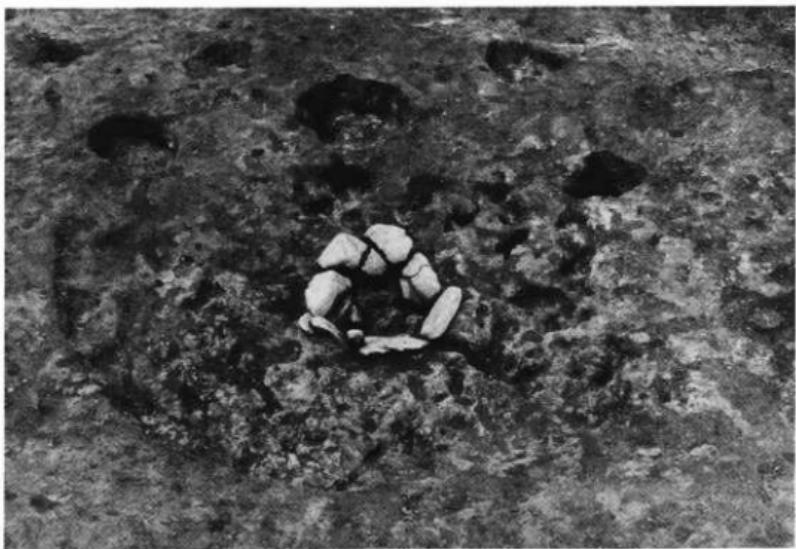


写真8 2号住居址 (北から)



写真9 碓出土状態



写真10 碓出土状態



写真11 2号住居址炉址



写真12 小 豎 穴



写真13 小 豎 穴

写真14 小豎穴31  
砾出土状態（北から）

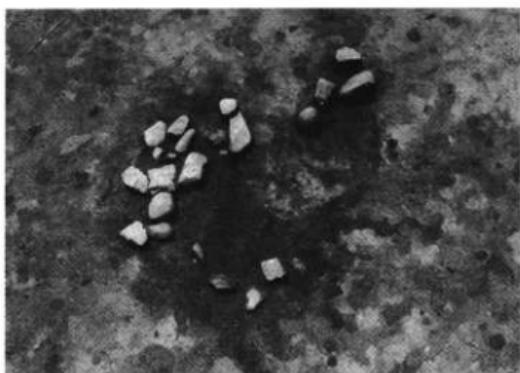


写真15 小豎穴31  
砾出土状態（西から）



写真16 小豎穴31（西から）



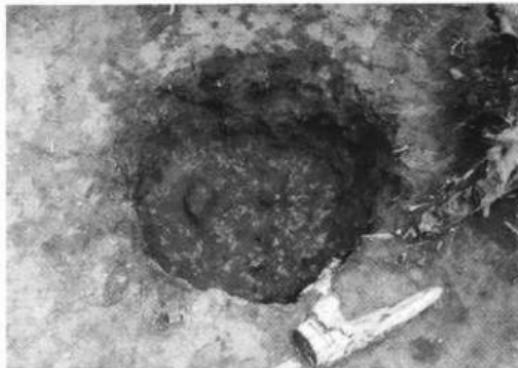


写真17 小豎穴 43

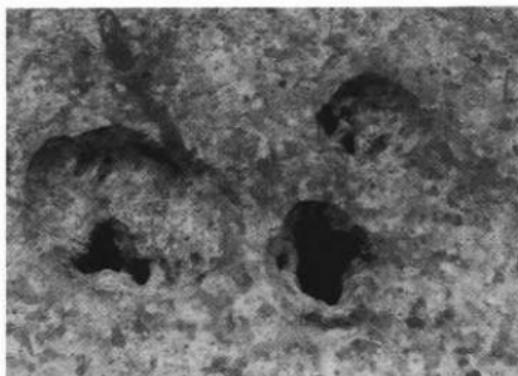


写真18 小豎穴 3・4・10

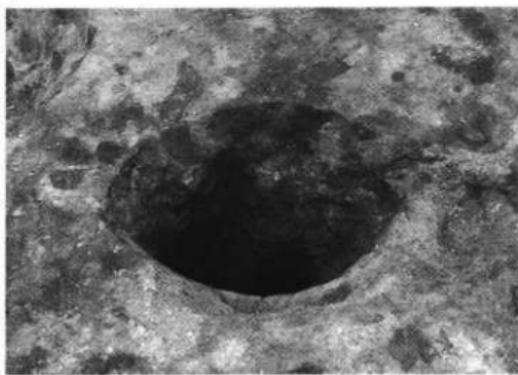


写真19 小豎穴 8



写真20 小 穴 1

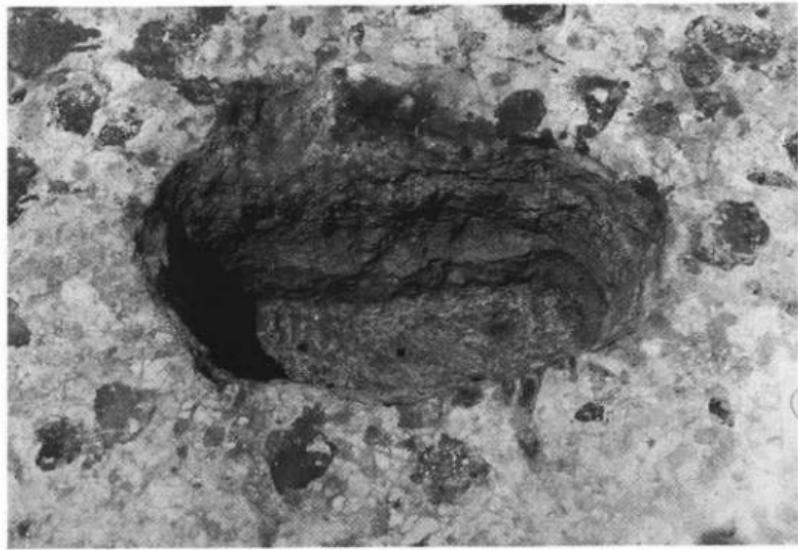


写真21 小 穴 42



写真22 1号住居址(西から)

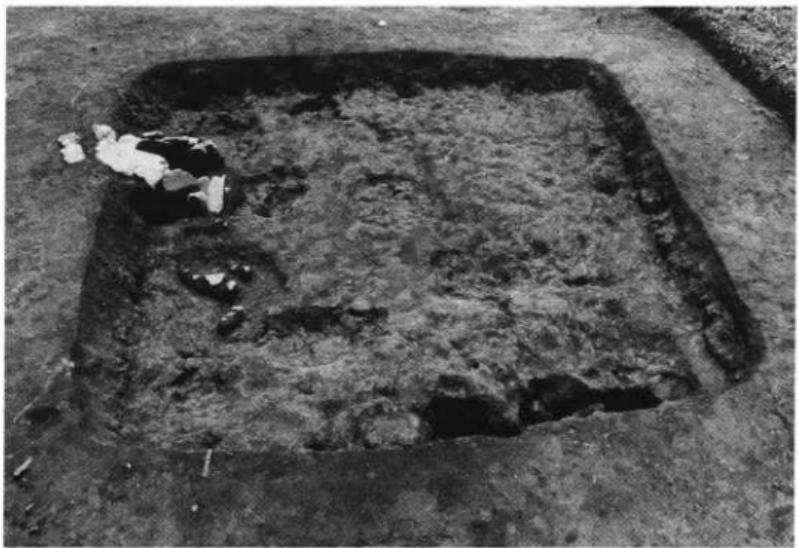


写真23 1号住居址(北から)

写真24 1号住居址  
カマド全景



写真25 1号住居址  
カマド全景



写真26 1号住居址  
カマド全景





写真27 1号住居址  
炭化材出土状態



写真28 1号住居址  
炭化材出土状態



写真29 3号住居址  
カマド全景



写真30 3号住居址(西から)

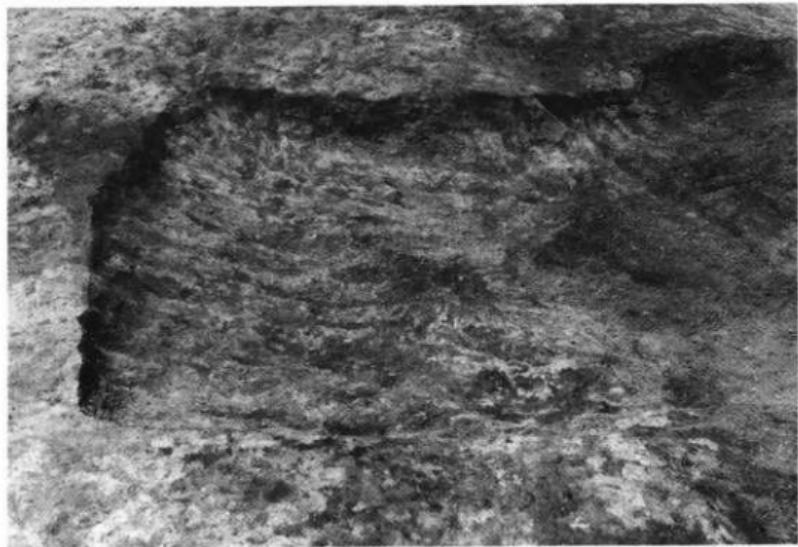


写真31 4号住居址(東から)



写真32 遺構検出地点全景（北東から）



写真33 発掘風景

原村埋蔵文化財19

**御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡**

御射山地区県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 平成3年3月

発行 原村教育委員会

長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社

